

高成樋 松重端 墓墳丘 遺弃寺跡

—白鳥町町内所在遺跡発掘調査報告書—

2002.3

香川県
白鳥町教育委員会

高成樋端 松重端 墓墳 遺墳 廃寺

—白鳥町町内所在遺跡発掘調査報告書—

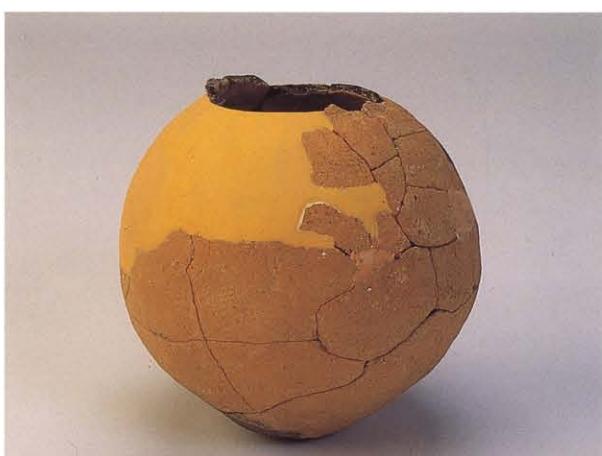
2002.3

香川県
白鳥町教育委員会

卷頭図版（樋端墳丘墓）



1. 穫穴式石槨赤色顔料 1 検出状況



2. 土器棺墓棺蓋・棺身

3. 石杵

序

白鳥町には県指定史跡である白鳥廃寺をはじめ、先人たちの足跡を示す多くの文化財が残されています。こうした文化財は我々が郷土の歴史や文化を理解するうえで、欠くことのできない貴重な文化遺産であり、白鳥町教育委員会では適切な保存・活用に努めています。

このたび報告します高松廃寺・成重遺跡・樋端墳丘墓の3つの遺跡は、民間土地開発および基幹用水路工事に際しまして発掘調査を実施したものです。高松廃寺は平安時代後期頃の寺院として知られています。今回土器や瓦とともに窯跡が発見されたことにより、その活動の変遷をより詳しく知り得ることができました。次に成重遺跡は弥生時代後期頃の遺跡であり、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で、注目されました集石遺構を新たに確認することができました。最後に樋端墳丘墓は弥生時代末期から古墳時代にかけての墓であり、ちょうど最初の前方後円墳が造られる頃にあたり、この時代を研究する上での重要な資料といえます。

本報告書はこれらの成果をまとめたものであり、地域史解明の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するに際しまして、深厚なるご理解とご協力をたまわりました関係者各位に、心より感謝を申し上げます。

平成14年3月

白鳥町教育委員会
教育長 村上克美



例　　言

1. 本報告書は、香川県大川郡白鳥町内に所在する高松廃寺（たかまつはいじ）・成重遺跡（なりしげいせき）・樋端墳丘墓（といばなふんきゅうぼ）の調査報告を収録した。
2. 調査の実施にあたっては白鳥町教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が担当して実施した。
3. 発掘調査の担当は下記のとおりである。

高松廃寺	期間	平成11年1月～
	担当	萬木一郎・阿河銳二
成重遺跡（第1次）	期間	平成11年1月～4月
	担当	萬木一郎・阿河銳二
（第2次）	期間	平成11年9月～12月
	担当	阿河銳二
樋端墳丘墓	期間	平成12年12月～平成13年2月
	担当	阿河銳二

4. 本報告書の作成は白鳥町教育委員会の依頼を受け、平成13年度に大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が実施した。作業総括および執筆・編集は阿河銳二が担当した。遺物実測および遺構・遺物の製図は多田歩、遺物整理は間嶋京子・池田朋美によるところが大きい。
5. 本報告書で用いる方位の北は、特に示さないかぎり磁北である。縮尺は掲載図面内にスケールで示した。また、遺構の略号は下記のとおりである。

S K：土坑　　S F：窯跡　　S X：不明遺構　　S P：柱穴

6. 掲図の一部に国土地理院地形図「三本松」（1/25,000）、白鳥町全図（1/5,000）、大内町都市計画図（1/2,500）を使用した。
7. 掲図番号は通し番号にしてある。遺物番号は各遺跡ごとに付している。
8. 遺物観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』を使用して表す。
9. 本報告に際して自然科学分野における鑑定・分析を下記の機関等に依頼した。有益なご教示・ご報告文をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略）

赤色顔料分析　　魚島純一（徳島県立博物館）
石材鑑定　　谷山 積（香川大学）

10. 発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、地権者各位および以下の諸機関・方々より多大なご協力・ご援助ならびにご教示を得た。記して厚くお礼申し上げる次第である。（順不同・敬称略）
丹羽佑一、片桐孝浩、藏本晋司、松本和彦、塙崎誠司、大久保徹也、森下英治、笠川龍一、森格也、梅木謙一、橋本達也、松本敏三、長井博志、陶山仁美、中山尚子、米田武子、六車ふみ子、矢木和子、鎌田敬子、木村育子、六車美保
白鳥町産業振興課、香川県教育委員会文化行政課、（財）香川県埋蔵文化財調査センター、（株）山西組
(株)笠井土木運送、東和設計株式会社、（社）東かがわ広域シルバー人材センター、地元自治会

本文目次

序

例言

第1章 調査の概要

　　第1節 調査体制 1

　　第2節 地理的・歴史的環境 2

第2章 高松廃寺

　　第1節 はじめに 7

　　第2節 経緯と経過 7

　　第3節 遺構 8

　　1 窯跡 10

　　2 土坑 10

　　第4節 遺物 11

　　1 遺構にともなわない遺物 11

　　2 遺構にともなう遺物 12

　　第5節 まとめ 13

第3章 成重遺跡

　　第1節 はじめに 35

　　第2節 経緯と経過 35

　　第3節 調査の結果 36

　　1 I区 38

　　2 II区 47

　　3 III区 48

　　4 IV区 57

　　第4節 まとめ 58

第4章 樹端墳丘墓

　　第1節 はじめに 59

　　第2節 経緯と経過 60

　　第3節 調査の結果 61

　　1 墳丘 61

　　2 埋葬施設 65

　　3 その他の遺構 74

　　4 出土遺物 75

　　第4節 まとめ 76

　　1 築造時期 76

2 埋葬行為の諸要素について	76
3 結語	78
付章 桶端墳丘墓出土赤色顔料関係遺物の蛍光X線分析 魚島純一	81

高松廃寺出土遺物観察表

成重遺跡出土遺物観察表

挿図目次

第1図	白鳥町位置図	2
第2図	周辺遺跡位置図	4
第3図	遺構位置図	8
第4図	窯跡およびトレンチ位置図	9
第5図	S F—01・02平面図	9
第6図	S K—01平・断面図	10
第7図	第1次出土遺物	15
第8図	トレンチ1出土遺物（1）	16
第9図	トレンチ1出土遺物（2）	17
第10図	トレンチ1出土遺物（3）	18
第11図	トレンチ1出土遺物（4）	19
第12図	トレンチ1出土遺物（5）	20
第13図	トレンチ1出土遺物（6）	21
第14図	トレンチ1出土遺物（7）	22
第15図	散布地A出土遺物（1）	23
第16図	散布地A出土遺物（2）	24
第17図	散布地A出土遺物（3）	25
第18図	散布地A出土遺物（4）	26
第19図	散布地A出土遺物（5）	27
第20図	散布地A出土遺物（6）	28
第21図	散布地A出土遺物（7）	29
第22図	散布地B出土遺物（1）	30
第23図	散布地B出土遺物（2）	31
第24図	散布地B出土遺物（3）	32
第25図	かつて採集された遺物	33
第26図	遺構にともなう遺物および他の出土土器	34
第27図	第1次出土石器	34
第28図	調査区位置図	36
第29図	I～III区遺構配置図	37
第30図	I～III区土層柱状図	38
第31図	S X—01検出状況図	41・42
第32図	S X—02検出状況図	43・44
第33図	S X—03検出状況図	45・46
第34図	III区第2遺構面S K—05平・断面図	48
第35図	出土遺物実測図（1） S X—01	50

第36図	出土遺物実測図（2）	S X-01	51
第37図	出土遺物実測図（3）	S X-02	52
第38図	出土遺物実測図（4）	S X-02	53
第39図	出土遺物実測図（5）	S X-02・03ほか	54
第40図	出土遺物実測図（6）	Ⅲ区第2遺構面	55
第41図	調査区南壁土層図		56
第42図	IV区遺構配置図		57
第43図	IV区出土遺物実測図		57
第44図	樋端墳丘墓周囲遺跡位置図		59
第45図	調査区配置図		60
第46図	墳丘測量図（調査後）		62
第47図	各トレンチ土層断面図（1）		63
第48図	各トレンチ土層断面図（2）		64
第49図	竪穴式石槨上面礫堆検出状況図		65
第50図	礫堆円礫法量グラフ		66
第51図	竪穴式石槨平面図・断面図・壁体図		67・68
第52図	鉄製品出土状況図		69
第53図	第2主体部平・断面図		70
第54図	土器棺墓平・断面図		71
第55図	土器棺棺蓋・棺身実測図		72
第56図	周溝内土壙平・断面図		73
第57図	不明遺構平・断面図		73
第58図	出土遺物実測図（1）		74
第59図	出土遺物実測図（2）		75

図版目次

卷頭図版（樋端墳丘墓）

- | | |
|--------------------|------|
| 1 横穴式石槨赤色顔料 1 検出状況 | 3 石杵 |
| 2 土器棺墓棺蓋・棺身 | |

写真図版

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 図版 1 町内平野部空中写真 | 3 III区第2遺構面近景（東から） |
| 高松廃寺 | 図版13 |
| 図版 2 | 1 III区第1遺構面近景（東から） |
| 1 調査地遠景 | 2 III区第2遺構面近景（西から） |
| 2 窯跡所在段地近景（北西から） | 3 III区第2遺構面近景（東から） |
| 3 窯跡所在段地南側法面状況 | 図版14 |
| 図版 3 | 1 SX-01調査状況（北から） |
| 1 SF-01確認状況（西から） | 2 SX-01検出状況（東から） |
| 2 SF-01確認状況（南から） | 3 SX-02調査状況（東から） |
| 3 SF-01確認状況（北西から） | 図版15 |
| 図版 4 | 1 SX-02検出状況（西から） |
| 1 SF-01法面断面図 | 2 SX-03検出状況（西から） |
| 2 SK-01検出状況（南東から） | 3 SX-03西端検出状況 |
| 3 SK-01検出状況（南から） | 図版16 |
| 図版 5 | 1 III区第2遺構面SK-05調査状況（南から） |
| 1 トレンチ1瓦出土状況（1） | 2 IV区第1遺構面近景（西から） |
| 2 トレンチ1瓦出土状況（2） | 3 IV区第2遺構面近景（西から） |
| 3 トレンチ1瓦出土状況（3） | 図版17 出土遺物（1） |
| 図版 6 出土遺物（1） | 図版18 出土遺物（2） |
| 図版 7 出土遺物（2） | 図版19 出土遺物（3） |
| 図版 8 出土遺物（3） | 図版20 出土遺物（4） |
| 図版 9 出土遺物（4） | 樋端墳丘墓 |
| 図版10 出土遺物（5） | 図版21 樋端墳丘墓周辺空中写真 |
| 図版11 出土遺物（6） | 図版22 |
| 成重遺跡 | 1 調査地遠景（南東から） |
| 図版12 | 2 丘陵頂部調査前状況（1） |
| 1 I区全景（東から） | 3 丘陵頂部調査前状況（2） |
| 2 II区第1遺構面近景（西から） | |

図版23

- 1 壓穴式石槨検出状況
- 2 磔堆検出状況（1）
- 3 磔堆検出状況（2）

図版24

- 1 磔堆掘下げ状況
- 2 磔堆土器出土状況
- 3 石槨内掘下げ状況（1）

図版25

- 1 石槨内掘下げ状況（2）
- 2 石槨内掘下げ状況（3）
- 3 西側土層断面状況

図版26

- 1 壓穴式石槨壁体検出状況（1）
- 2 壓穴式石槨壁体検出状況（2）
- 3 壓穴式石槨壁体検出状況（3）

図版27

- 1 壓穴式石槨床面検出状況（1）
- 2 壓穴式石槨床面検出状況（2）
- 3 壓穴式石槨基底石検出状況

図版28

- 1 基底石南東隅検出状況（1）
- 2 基底石南東隅検出状況（2）
- 3 基底石南東隅検出状況（3）
- 4 基底石北西隅検出状況（1）
- 5 基底石北西隅検出状況（2）

6 基底石北西隅検出状況（3）

図版29

- 1 西小口溝南側検出状況
- 2 鉄製品出土状況（1）
- 3 鉄製品土状況（2）

図版30

- 1 第2主体部検出状況
- 2 第2主体部調査状況
- 3 第2主体部土層断面状況

図版31

- 1 墳丘および周溝南東側調査状況
- 2 周溝検出状況（1）（南から）
- 3 周溝検出状況（2）（北から）

図版32

- 1 土器棺墓検出状況（1）
- 2 土器棺墓検出状況（2）
- 3 土器棺墓検出状況（3）

図版33

- 1 周溝内土壤検出状況（北から）
- 2 不明遺構検出状況（1）（北から）
- 3 不明遺構検出状況（2）（南から）

図版34

- 1 調査後墳丘近景（1）
- 2 調査後墳丘近景（2）
- 3 調査後墳丘近景（3）

図版35 出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査体制

今回、報告する高松廃寺・成重遺跡・樋端墳丘墓の3遺跡は平成10年度から12年度にかけて発掘調査を実施したものである。四国横断自動車道の建設本格化とともに直接・間接的に関連した公共工事や民間開発が増加したことを契機とする。他方、大川郡では平成7年度より郡内8町で構成する、一部事務組合の大川地区広域行政振興整備事務組合に埋蔵文化財専門職員を配置し、各町の要請に基づいて職員を派遣し埋蔵文化財の調査を実施してきている。今回も白鳥町教育委員会が調査主体となり事務を、調査実務は大川地区広域行政振興整備事務組合埋蔵文化財係が担当して実施した。また、調査後の整理作業も引き続いて担当し平成13年度に報告書作成業務をおこなった。各年度の発掘調査体制と整理作業体制は下記のとおりである。

平成10年度		平成12年度	
白鳥町教育委員会		白鳥町教育委員会	
教 育 長	児嶋 弘	教 育 長	児嶋 弘 (~6.30)
課 長	六車 博	課 長	村上 克美 (7.1~)
副 主 幹	橋本 正敏	係 長	岩井 信明
大川広域埋蔵文化財係		係 長	松村 富子
主任主事	萬木 一郎	大川広域埋蔵文化財係	
主 事	阿河 錠二	主 事	阿河 錠二
平成11年度		平成13年度	
白鳥町教育委員会		白鳥町教育委員会	
教 育 長	児嶋 弘	教 育 長	村上 克美
課 長	六車 博	課 長	友国 晃
副 主 幹	橋本 正敏	係 長	松村 富子
大川広域埋蔵文化財係		大川広域埋蔵文化財係	
主任主事	萬木 一郎	主 事	阿河 錠二
主 事	阿河 錠二	技 術 員	多田 歩
		整 理 員	間嶋 京子
		整 理 員	池田 朋美

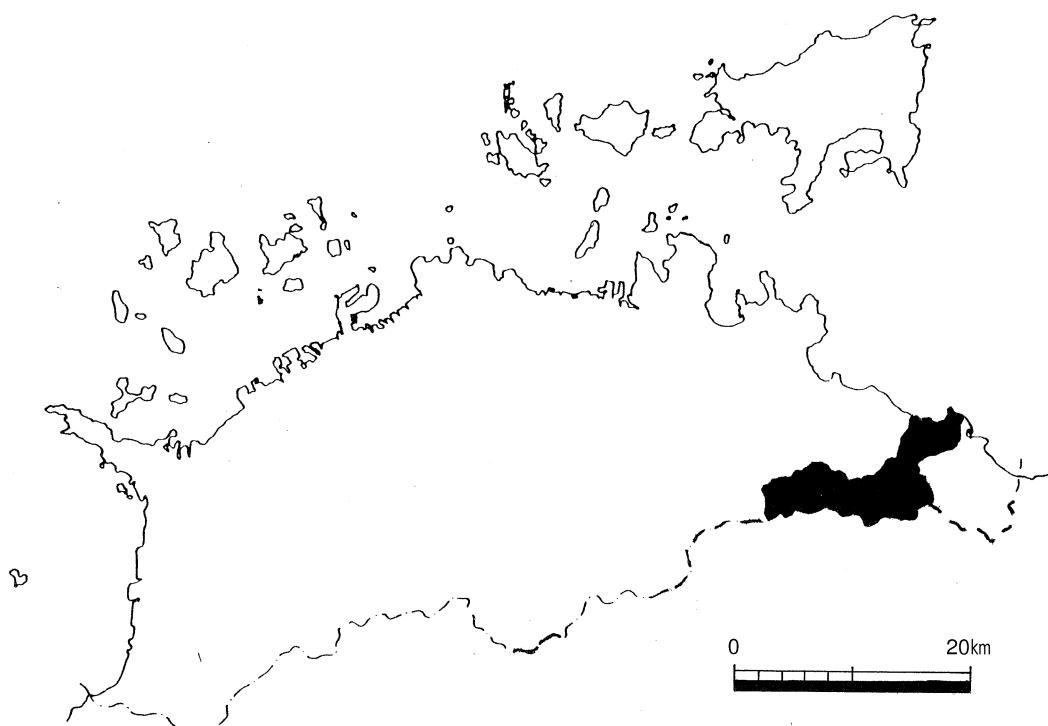
第2節 地理的・歴史的環境

白鳥町は県央・高松市から南東へ約30km、東讃と呼ばれ県域の東半をしめる大川郡では引田町について東側に位置している。面積は約72km²で弧状をなし東を引田町、南は徳島県土成町・市場町、南西では長尾町、北西は大内町・大川町・寒川町と接し、北東は瀬戸内海に臨んでいる。地形的には町域のほとんどを湊川流域がしめ、北東部の一部が中川の流域となっている。山地は南部において讃岐山地が県境を東西にはしり東女体山（667m）や檀特山（631m）などが聳える。これに連なる丘陵地は北に向かって標高約200m付近からは傾斜の緩やかな山麓地となり、山嘴状の虎丸山（419m）や帰来山などの小起伏山地が東西の町域を画すようにつづいている。また、台地の分布は東山地区宮奥池の周囲で旧扇状地らしい下位台地がみられるくらいである。町内を貫流する湊川は東女体山北麓から東に流れ、町域中ほどの西山地区にて大きく蛇行した後、向きを北東に変え瀬戸内海にそそぐ。上流域では支流も含め山麓地に狭小な谷底平野や扇状地を形成し、下流域には沖積平野が広がっている。海岸近くは発達した浜堤の後背湿地を含め低湿な土地となっている。

これまで町内において確認されていた遺跡は主に平野部周囲の丘陵地に所在する古墳が大半であり、平野における遺跡の状況はほとんど不明であった。また、正式な発掘調査が実施された遺跡は僅かであり、大半の遺跡や古墳についての内容は偶然確認された知見に限られるものであった。しかし平成9年から12年度にかけて行われた四国横断自動車道建設に伴う大規模な発掘調査による多大な成果によって、新たな歴史像が描き出されることとなった。以下簡略に記す。

町内では現在のところ、旧石器時代と縄文時代の明確な遺跡は確認されていない。

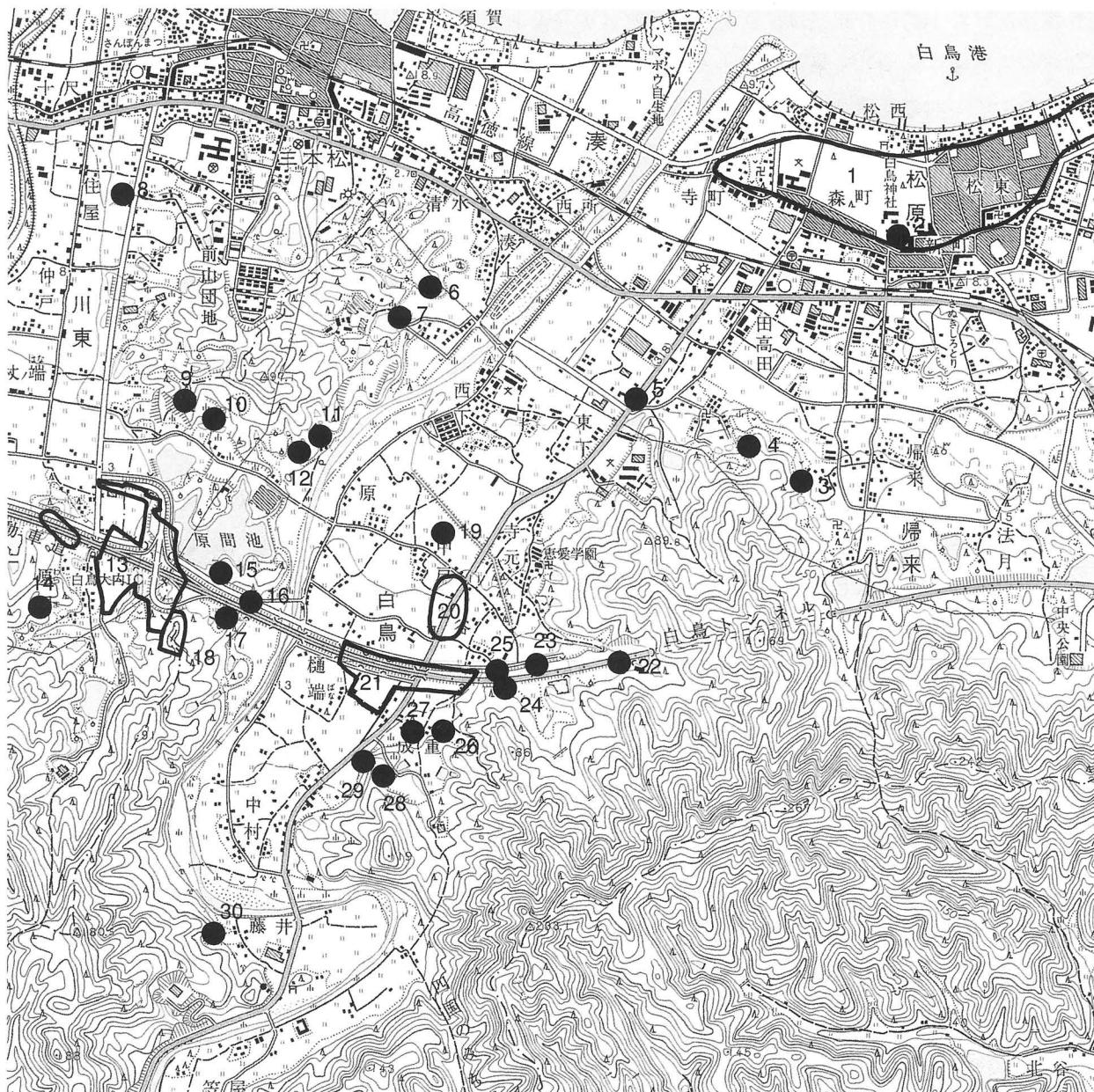
弥生時代でも前期の遺跡は確認されておらず、中期以降になって平野部に集落が営まれるようになる。成重遺跡は集石遺構が多数検出されたことで知られる弥生時代中期から古墳時代前期にかけての大規模



第1図 白鳥町位置図

な集落遺跡で、遺跡の範囲は横断道関連調査区よりもさらに南北に広がる。竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの居住域に隣接して集石遺構・方形周溝墓群や土器棺墓・土壙墓などの墓域が形成されている。善門池西遺跡・池の奥遺跡は成重遺跡の東側に位置するほぼ同時期の集落遺跡である。池の奥遺跡は以前より土器や石器が採取されており、調査によって10基をこえる竪穴住居跡と石器製作工程を示す良好な資料が出土している。湊川西岸では丘陵裾部の傾斜地において中期後半から後期頃の神越遺跡が所在しており、掘立柱建物跡や直径約8mの円形周溝状遺構が検出されている。他方、樋端遺跡は神越橋西側の低丘陵にあり各30基前後の土器棺墓と土壙墓が群集して墓域を形成している。また、内行花文鏡の破鏡が出土している。東側丘陵では四房遺跡において土器棺墓が1基発見されており、集落内の墓域とともにこれらを見下ろす周囲の丘陵先端にも墓域が形成されるようになる。

古墳時代になると秋葉山系と帰来山系北端を中心に古墳（群）が形成されるようになる。前期古墳としては1基ではあるが大内町との境である秋葉山南西側尾根上に大日山古墳が所在する。大日山古墳は前方後円墳としては県下で最も東に位置するもので前方部を北東に向け全長約38mを測る。前方部西側は改変を被っているが柄鏡形を呈する。埋葬施設に関してはすでに開掘され不明であるが後円部頂に板状安山岩の竪穴式石槨と石棺の使用が想定される。中期の古墳として調査によって明らかにされたものは神越3号墳のみである。神越3号墳は樋端遺跡内の海拔35mの丘陵頂部にあり、粘土槨に割竹形木棺を埋葬施設にもちヤリガンナ1点とガラス玉が出土している。この他には神越1号墳や杉尾神社古墳などが伝出土遺物によって想定されるのみである。なお、約300mほど西に所在する大内町原間6号墳は直径約30mの円墳で、埋葬施設に木槨をもち三角板皮綴短甲や三累環頭太刀などを副葬品にしており近在における中期の盟主墳とされる。後期古墳としては横穴式石室をもち数基程度で群集するものもみられるようになる。中期に引き続いて秋葉山系では神越2号墳や樋端古墳群・北原庵の谷古墳が築造されている。神越2号墳は1号墳より南に少し下った斜面に位置する河原石積みの横穴式石室をもつ円墳である。石室は両袖型で残存状況は良く玄室長約3.5m、幅約1.5mに羨道部は現存長約3mを測る。石室からは人骨の他須恵器・土師器や耳環・ガラス玉・管玉・鉄鏃などが出土しており6世紀後半から7世紀初め頃と考えられる。北原庵の谷古墳は秋葉山北東尾根末端付近に所在したとされる古墳であるが須恵器が出土している。樋端古墳群は町境の小さな丘陵稜線上に位置し2基からなる。このうち残りの良い2号墳は直径約12mの円墳で周濠をもつ。埋葬施設は横穴式石室ではなく土坑で鉄刀・鉄鏃が出土している。時期は周濠内の土師器から7世紀前半頃とされる。また神越遺跡西側丘陵にもかつては5～6基の横穴式石室墳が所在していたとされる。一方帰来山系北端斜面にも古墳群の築造がみられるようになる。赤坂古墳群は現存2基であるがかつては7基近くあったとされる。伝えられる出土須恵器などの内容からは6世紀後半頃からの横穴式石室墳からなる群集墳と考えられる。赤坂古墳群から西200mくらい離れた秋葉神社古墳からはかつて須恵器杯蓋・短頸壺などが出土している。また、平野部南側の山裾には藤井古墳が所在している。藤井古墳は最も南に位置する古墳で昭和58年に香川大学によって発掘調査が実施されている。直径約13mの円墳で南東方向に開口する横穴式石室をもつ。石室長約7.8mで玄室長約3m・幅約1.6mを測る。袖石は10～15cmほどではあるが内側に突き出ている。出土遺物はほとんどなかったが石室より7世紀頃のものと考えられる。なお、成重遺跡において平野部に立地する横穴式石室墳が2基調査されている。この時期の集落についてはそう多くはないが成重遺跡では前半期の竪穴住居跡や土壙墓群が善門池西遺跡でも6世紀半ば頃の竪穴住居跡が検出されている。神越遺跡では7



- | | | | | |
|-----------|------------|---------------|-----------|----------|
| 1 松原遺跡 | 7 白鳥廃寺 | 13 原間遺跡・古墳群 | 19 蔽西遺跡 | 25 谷遺跡 |
| 2 須崎山窯跡 | 8 住屋遺跡 | 14 原間1号墳 | 20 中戸遺跡 | 26 成重北遺跡 |
| 3 赤坂古墳群 | 9 大日山古墳 | 15 樋端墳丘墓 | 21 成重遺跡 | 27 四房遺跡 |
| 4 秋葉神社古墳群 | 10 高松廃寺 | 16 神越1号墳 | 22 池の奥遺跡 | 28 成重南遺跡 |
| 5 城泉遺跡 | 11 樋端廃寺 | 17 樋端遺跡・神越古墳群 | 23 善門池西遺跡 | 29 観音谷古墳 |
| 6 杉尾神社古墳 | 12 北原庵の谷古墳 | 18 樋端古墳群 | 24 谷窯跡 | 30 藤井古墳 |

第2図 周辺遺跡位置図

世紀頃の土坑や須恵器が出土している。また、城泉遺跡では僅かの須恵器とともに多量の土師器が道路工事中に発見されている。海浜部の松原遺跡では製塙土器の破片が出土しており、海と後背湿地に挟まれたこの周辺の砂州にて塩づくりが行われていたことがうかがわれる。

古代、律令制期には白鳥町は大内郡に属していた。大内郡は当初引田・白鳥・入野の3郷からなり承和10（843）年に與田郷が入野郷より独立して4郷となり下郡となった。現在の町域はこれと多少異なり白鳥郷及び入野郷の入野山地区・與田郷の与田山地区・寒川郡難波郷の五名地区からなっている。讃岐では白鳳期より多くの古代寺院が建立されており、平安時代には二十八官寺があったとされる。大内郡でこれまでのところ確認されているのは町内にある白鳥廃寺のみである。白鳥廃寺は湊川西岸、秋葉山系の北東側低丘陵によって北と南を挟まれた谷地形状の低地に立地する。これまで昭和43年と57・58年度に発掘調査が実施されている。これらの結果、東西に版築による基壇があり西方では円形柱座を造り出した礎石列、東方では円孔が穿たれた心礎石が見つかっていることからそれぞれ金堂跡・塔跡に比定し、さらに北側建物を講堂跡と想定する事によって南滋賀廃寺式の伽藍配置に復元している。出土及び表採された瓦には八葉複弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦などの白鳳期のものもあり創建時期を示すものとされる。また、比較的多く出土しているのは均整唐草文軒平瓦など奈良時代頃のもので、最も伽藍が整備された頃と考えられる。また、十二葉細素弁蓮華文軒丸瓦のように平安時代まで下るものもみられる。他に寺院跡として秋葉山南麓傾斜地に高松廃寺が所在する。開墾された果樹園には瓦片が多く散布しており、近くには礎石が一つ残っている。具体的な遺構については不明で白鳥廃寺との関連についても定かではない。この時期の集落については成重遺跡において掘立柱建物跡や土坑が確認されているのみである。なお、町内における条里型地割は湊川東岸において不明確な一部が指摘できるにすぎず、南海道についても不定で国道11号線南沿いに白鳥廃寺・白鳥神社御旅所前を直線的に通る道程と大内町原間から樋端をへて東山・西山から引田町小海に至る道程を考えられている。

中世としては成重遺跡や善門池西遺跡・谷遺跡などにおいて掘立柱建物跡や土坑があり、善門池西遺跡では多量の備前や丹波・瀬戸美濃などの国産陶磁器や青磁・白磁が出土している。また、成重遺跡の北側には中戸遺跡や藪西遺跡などが所在している。

近世では谷窯跡があり丘陵先端斜面に階段状連房式登窯が築かれている。操業は19世紀前半頃で鍋や土瓶などを主としている。

参考文献

- 『白鳥町史』白鳥町史編集委員会 1985
- 『大内町史』大内町史編纂委員会 1985
- 『讃岐白鳥廃寺調査報告』白鳥廃寺発掘調査団 1970
- 『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館 1996
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9～12年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか 1998～2001
- 『香川県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』香川県教育委員会 1983
- 『香川県埋蔵文化財調査年報平成8年度』香川県教育委員会 1997
- 『埋蔵文化財試掘調査報告XⅡ・XⅢ』香川県教育委員会 1999・2000

第2章 高松廃寺

第1節 はじめに

高松廃寺は白鳥町白鳥字北池に所在する寺院跡で町域の北西部、大内町との境をなす秋葉山の南側山麓に立地している。秋葉山は虎丸山系からつづくが原間池を挟んで独立状を呈する、標高約97.1mの小起伏丘陵で四方に低丘陵が派生している。高松廃寺はちょうど南と南西方向に延びる2本の丘陵に挟まれた谷地形の奥、2本のV字状の谷筋によって挟まれ秋葉山山頂から下る斜面が緩やかになった標高約35m付近に位置する。現状ではこれまでの開墾によって段地の畑や果樹園となっている。高松廃寺については与田寺にある文書に「高松寺」とあり、『全讃志』には「高松寺 三本松、白鳥、湊村の寺山下に在り。昔大寺ありて、高松寺と曰ひき。天正中土佐元親之を火けり。而して今は只々礎石古瓦存するのみ。」とある。今日でも果樹園内には多数の瓦片が散布し、西側隣地には花崗岩製礎石が1基みられたことから寺院が在ったことはうかがい知ることができるが、内容についてはほとんどわかっていない。これまでの出土遺物として平安時代後半期とされる十五葉素弁蓮華文軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦などが知られている。山塊北東側にある白鳳期創建の白鳥廃寺との関連が指摘されるが具体的に結びつけることはできず、その立地などから小規模な寺院と考えられている。なお、周辺地には寺前や小僧といった字が付されている。

第2節 経緯と経過

今回の調査は周知の埋蔵文化財包蔵地「高松廃寺」として台帳に記載されている果樹園の南側下方隣接地における、個人による段畠地下げのための土地造成に伴うものである。工事実施の把握が遅れたため、すでに一部掘削が行われており急遽、確認調査を行ったもので日程の都合上2度にわたる。以下調査日誌によって経過の概略を記す。

調査日誌（抄）

第1次

1999（平成11）年1月4日 現地における状況確認

1月5日～6日 開発者（地権者・施工者）と県・町教育委員会及び大川広域埋蔵文化財担当者とで取扱いについて協議し、可能な限り残すように進めるが掘削の及ぶ下段畠地については確認調査を行うこととし、重機による試掘トレーニングを南北方向に3箇所に設定する。溝状遺構（東西方向）を検出するとともに、東側中段法面にて窯体（残骸）を確認する。

1月8日 溝状遺構の周囲を拡張したところ、土坑であることが判明する。

1月9日～10日 土坑掘上げ及び作図・周囲の状況を確認。

1月11日 上記作業を終える。中段畠地については今後別に協議を行うこととする。

第2次

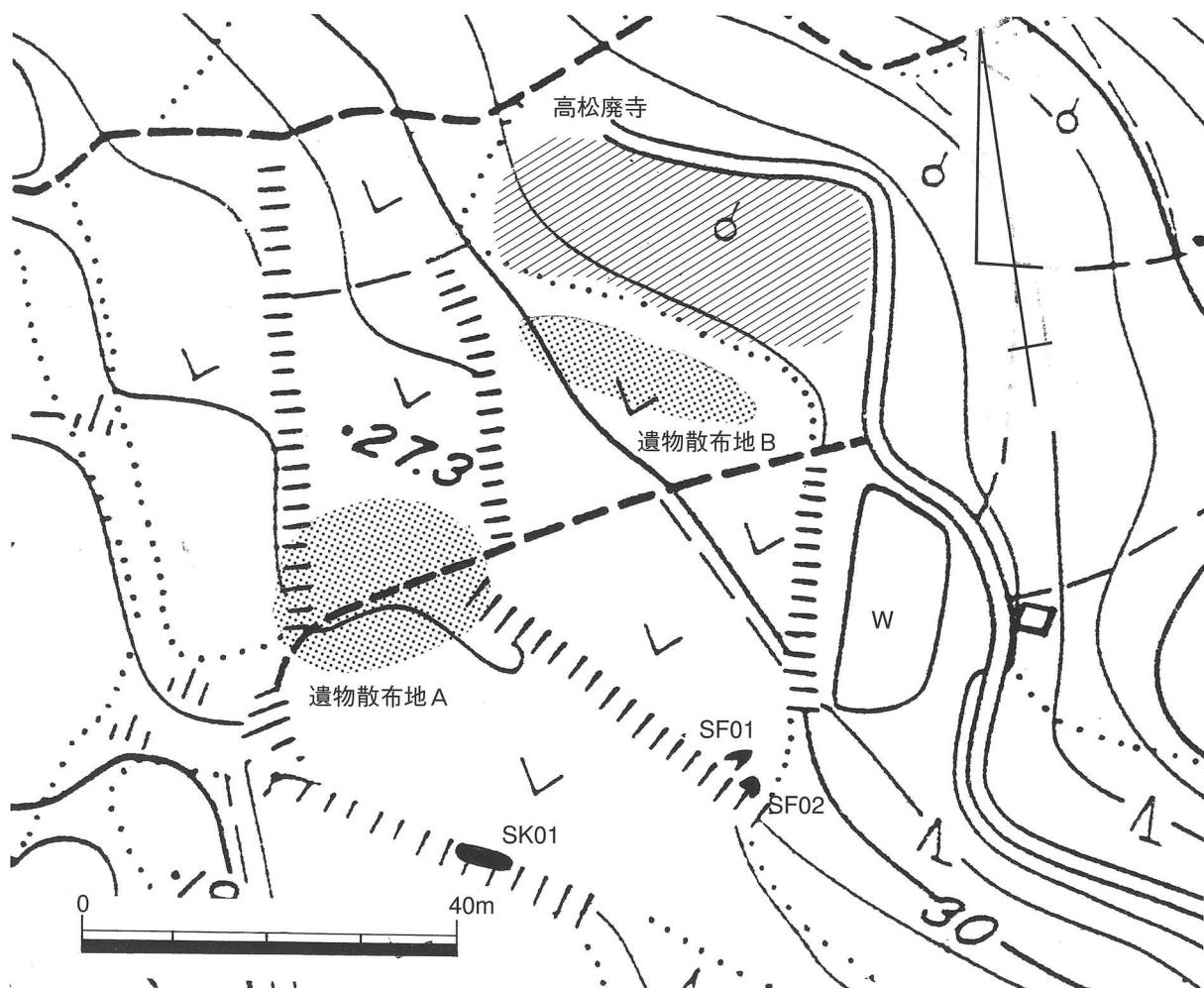
4月16日 窯跡が所在するとおもわれる上段畠地の取扱いについて協議し、内容についての確認調査

を行うこととする。

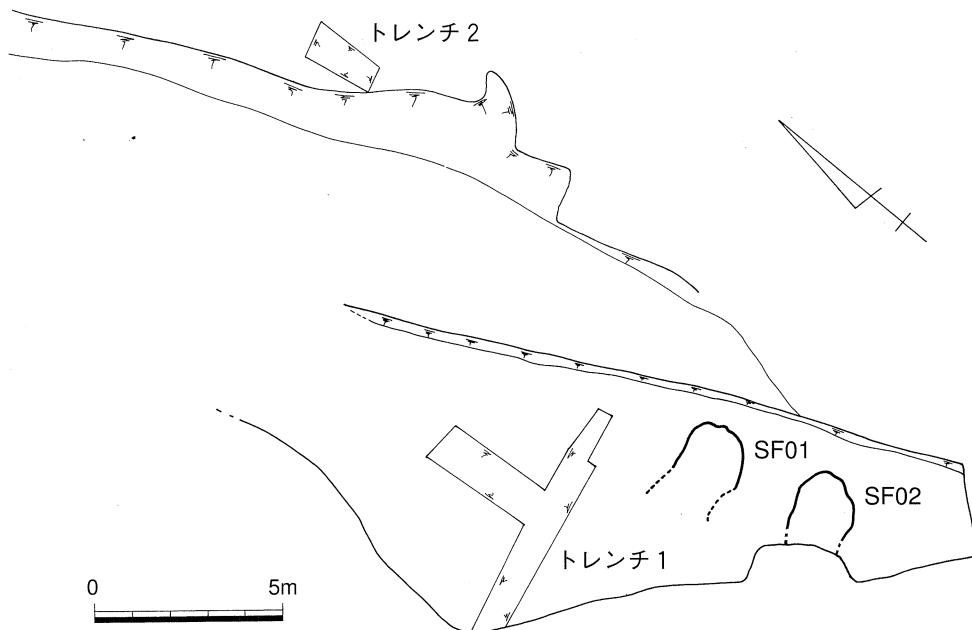
- 4月19日～22日 平坦部・法面表土剥ぎ・遺構の検出。窯2基を検出する。平板測量。
- 4月23日～30日 遺構平面図作成。検出状況写真撮影。法面土層図作成。検出面側にサブトレンチ設定。また、窯跡から約5～60m西にある施工範囲内を試掘調査するが遺構・遺物は確認されない。
- 5月3日～10日 協議により窯跡2基については範囲外となつたことから平面図のみにとどめることとなる。サブトレンチの掘下げ・精査。融着した瓦塊検出。写真撮影。
- 5月11日 道具・機材などの引き揚げ。終了

第3節 遺構

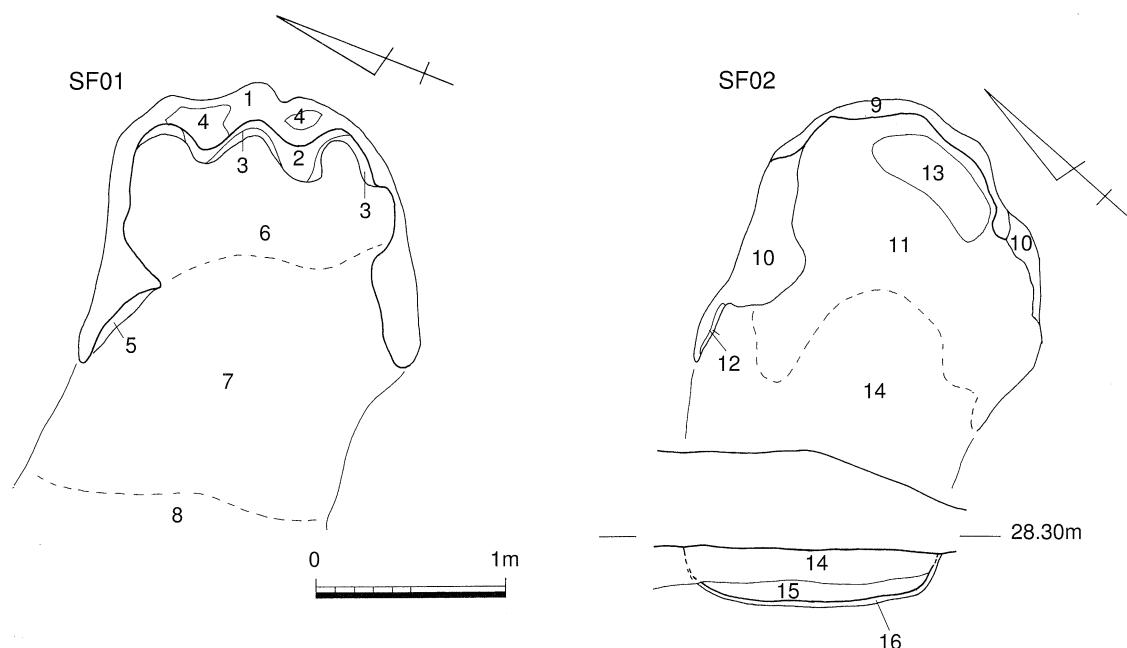
遺構として窯跡2基、土坑1基を検出した。調査地の微地形は北から南方向に開く谷とこれに対して東から西方向に交わる小規模な谷に挟まれた南西方向に下るやや緩やかな傾斜地とおもわれる。すでに開墾によって大きく改変されており、それぞれ削平、盛土により数段の平坦地としている。



第3図 遺構位置図



第4図 窯跡およびトレンチ位置図



- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1. 7.5YR4/8赤色土(酸化層) | 9. 7.5R3/4暗赤色土 |
| 2. 10YR7/6黄橙色土 | 10. 10YR5/4にぶい黄褐色土 |
| 3. 5B5/1青灰色土 | 11. 2.5Y6/4にぶい黄色土(赤色土が混じる) |
| 4. 10YR6/4にぶい赤橙色土 | 12. 10YR3/2黒褐色土 |
| 5. 7.5YR8/8黄橙色土 | 13. 2.5Y7/4浅黄色土 |
| 6. 2.5Y7/3浅黄色土(黄褐色土が混じる) | 14. 2.5Y6/6明黄褐色土(瓦片が混じる) |
| 7. 2.5Y6/3にぶい黄色土(赤色土が混じる) | 15. 10YR4/2灰黄褐色土 |
| 8. 2.5Y7/6明黄橙色土(地山ブロック・瓦片が混じる) | 16. 10YR5/8赤色土 |

第5図 SF01・02平面図

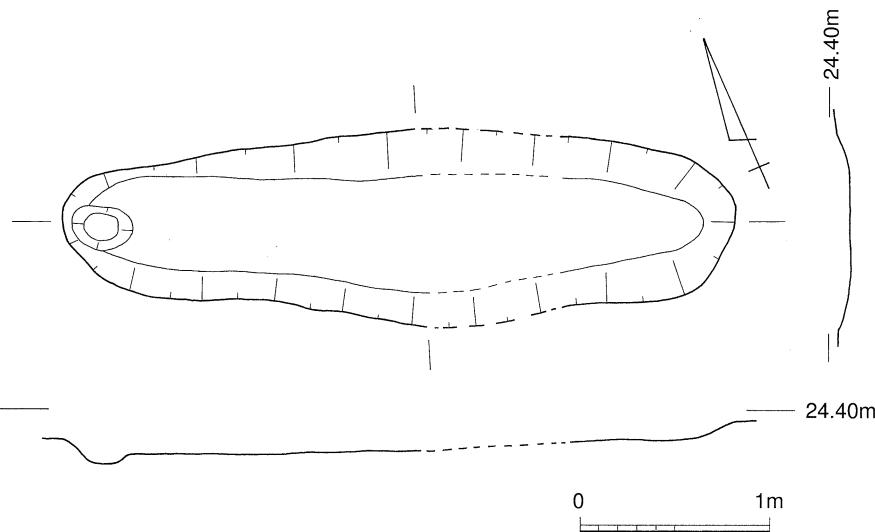
1. 窯跡

検出状況は斜面を標高約28.1mのところで水平に切ったもので、おおよそ南北方向に1.5mおいて2基の窯跡が中心軸をそろえるように並んで検出された。改変により遺存状況は良くなく一部しか確認されなかった。くわえて調査を平面検出までにとどめたため内容については限られるものである。北に位置する1号窯は花崗岩質の地山を掘りくぼめて築いたもので、平面形はやや不整な方形をしめし、壁にそつて酸化層がめぐる。窯構造として奥側において20cmほど突出している暗黄橙色土部分がその形状からして分焰牀といえることから、半地下有牀式に分類できる。分焰牀は2条あり焰道床にかけては青灰色に還元している。分焰牀の存在から焼成室の一部が確認でき、幅は約120cmを測る。他の部位や縦断的な構造については明確にしえない。2号窯では平面において1号窯でみられた分焰牀は指摘できず、赤色層の範囲も側壁では奥ほど明瞭でない。なお、西側すぐの段地法面にて続伸部分の横断面が確認される。断面掘方は地山を掘り込んでおり床がほぼ平坦で側壁の立ち上がりにかけて緩やかな弧状となる。平面奥からの距離は約180cmで床底のレベルは25~30cmほど低く傾斜しているようである。幅約110cmを測り、床下は酸化赤色し埋土下層には瓦片及び炭化物を僅かに含む灰黄褐色土の自然堆積土である。窯構造としては明確に捉えきれない。

なお、トレンチ1は段地法面に露出していた窯残骸から窯主軸に平行して設定したものである。検出面での地山はトレンチ西端から約4mで確認され、法面における旧地形の地表面は標高約26.9mを測る。その間の段地上面までは傾斜にそつて歪んだり窯壁や数枚が融着した瓦を含む整地層で、窯内に残されていた遺物ともども開墾時に削平盛土されたものとおもわれる。

2. 土坑

窯跡から直線距離で南西方向に約25m、一段下がった畠地の縁部に所在する。当初は溝状遺構かとおもわれたが、周囲を拡張したところ土坑であることが判明した。検出面は現地表から約1m掘り下げた標高約24.1m前後で窯跡との比高差は約4mである。だいたい北西—南東方向に主軸をとり、長さ約710cm、幅は最大210cmを測るややいびつな長楕円形の土坑である。土坑は地山である花崗岩質土に掘り込まれており、底面は検出面から深さ15~20cmを測るが僅かに南東側が高くなっている西北側にかけて緩やかに傾斜している。また、特徴として西北端には長径約60cm、深さ約30cmのピットがありピット内及び土坑底面には炭化物を含む黒色土が堆積し、地山掘方の一部では被熱痕がみられる。これらから本土坑はいわゆる窯状遺構と考えられる。埋土からは瓦片や土器片が少量出土している。



第6図 SKO1平・断面図

第4節 遺物

遺物は主に瓦類と土器類に限られ、瓦類は平瓦・丸瓦がほとんどで段地造成土からは窯壁や瓦と瓦が融着した不良品もみられる。また、土器類では須恵器・土師器及び黑色土器が出土している。ただこれら遺物のほとんどが人為的な改変の影響を受けており遺構にともなうものは僅かである。

1. 遺構にともなわない遺物

先に瓦類（1～63）であるが1～4は1999年1月の1次調査時に採取されたものである。5～26はトレンチ1出土のものである。トレンチ1では旧傾斜面直上の整地土より窯壁や瓦3～4枚が融着したものが出土している。おそらく窯内に残されていたものとおもわれる。5～22は平瓦で、23～26は丸瓦である。27～49は掘削中にある程度まとまって採取されたもので段地によっておおむね2つの範囲に分けられるもののうち、低い側の段地（A）出土のものである。27～36が平瓦、37～49が丸瓦で49は今回ただ1点の軒丸瓦である。50～61は果樹園直下の段地（B）から出土したもので50～57が平瓦で58～61が丸瓦である。62・63はこれまでに採取されたものである。

軒丸瓦

瓦当文様のわかる軒丸瓦は蓮華文系1点（49）のみであり、瓦当面の約5分の1を残すのみでわずかに中房がみられる。復元径約16cm弱で周縁端を欠き一重圈線の内側に素弁が4葉残る。各弁端は丸く中ほどを鈍くぼめている。僅かに残る中房には蓮子が1点みられる。丸瓦部凹面にはつよいナデが残る。洲崎寺所蔵の高松廃寺出土軒丸瓦と同型とかんがえられる（註1）。

平瓦

今回出土瓦類のなかでは平瓦がその多くを占めている。ここでは凸面のに残された成形・調整の痕跡によって繩目タタキ（A類）・格子タタキ（B類）に大別されさらに繩目タタキは細（a）・大（b）に、格子タタキは形状によって正方形状（a）・長方形状（b）に分別される。ただ、総じて破片での分類であるため断定しきれないものもあり、ここでは特徴的な成形・調整の痕跡を確認するにとどまるものとする。

A a類（1・7・8・21・22・28～33・54～57）7は片側側面を欠くが完形にちかく、凸面に布目痕を残すものである。8はタタキは角に対しおおむね弧状である。凹面から端面にかけて布目痕がみられる。21・22・28～33はタタキを側縁に対し平行するようにほどこす。ただ、29は鏡像的な弧をえがく。56・57は斜位でほどこしている。57凹面には糸切り痕が残る。

A b類（5・6・9・12～15・19・20・27）5・13・14には凹面から端面にかけて布目痕がみられる。15は焼き歪みのため凹凸面が逆しまになったものである。19・20も端面に布目痕がみられる。また、20は側面にもみられる。27は焼き歪みも小さく残りがいいものである。タタキ後にナデをほどこし、端面に布目痕を残す。

B a類（10・11・16）ほぼ1cm角の正方形をのタタキ目を残すものである。2枚が融着した11を含め4枚とも端面に布目を残す。また、16は側面にもみられる。

B b類（6・17・18・34～36・50～53）おおむね長さが1cmをこえるものとこえないものとに分かれる

ようである。含まれる。6は凹面に窯壁が付着している。35凹面には糸切り痕が残る。

丸瓦

出土した丸瓦はほとんどが破片で完形にちかい資料さえ僅かである。基本的に凹面は布面痕を残し、凸面は整形後ナデ調整をほどこしている。ここでは特徴のみられる丸瓦を取り上げる。2は凸面につよいイタナデをほどこす。凹面には布綴じ痕が残る。3・23・24・26の凸面には深浅の差はあるが1条の沈線がほどこされる。25凹面には布綴じ痕が残る。37は凸面に縄目タタキ痕をかすかに残すが、38はナデが不十分のためか所々で明瞭に残る。40は布のたるみであろうか凹面布目痕が不揃いである。43・44はやや焼成不良で明赤色を呈する。45も凸面にナデによる沈線がみられる。58は比較的厚手のもので調整も丁寧であるが凸面に縄目タタキ痕がわずかにみられる。色調は赤橙色を呈する。62は凸面にケズリ調整をほどこす。63凹面には布綴じ痕が残る。

つぎに瓦類以外の遺構にともなわない出土遺物には土器類と石器があり、土器類では65が1次調査時のものである。67~74がトレンチ1から、75~80がトレンチ2からの出土である。81~84が散布地Aで85~88が散布地Bからである。土師器・須恵器の他に黒色土器が少量含まれるが破片が多く器形全体がつかめるものは数点である。

土師器

器種として高台が付く（65・72・75~79・85・88）には椀と杯が含まれる。ただ88は皿に高台が付いたいわゆる托である。

須恵器

すべて小片である。68は鉢の口縁部で重ね焼きのため2個体が融着したものである。69は広口瓶肩部での突帯で下方にはタタキが残る。ほかは体部であろう。81・82は明灰色でやや異なる。81は外面タタキ後カキ目をほどこし、内面はナデを加えるが一部に当て具痕が残る。82は外面に自然釉が流れる。内面にはナデを加えない。

黒色土器

67・71・80があり、どれも両黒である。67は口縁端部で器厚はうすい。71は底部で断面正方形の高台がやや直立気味につく。80は体部立ち上がり部と高台の境に鎧状の突帯を付すいわゆる托上椀である。

石器

1次調査で89が1点出土しており3方のうち2つの先端を欠くが、石匙であろうか。

2. 遺構にともなう遺物

遺構から出土したもので図示できるものはSK-01からの64・66のみである。64は平瓦B a類で凸面に格子タタキが残る。66は須恵器鉢で口縁端部を斜め上方に短く引き出し内面には鋭い稜をもつもので、68と特徴を同じくするものである。

第5節 まとめ

充分な内容とはいえないが今回の調査によって検出された遺構・遺物について記してきた。これらは伽藍跡など直接的に寺跡を確認できる資料ではないが、これまで伝えられている高松廃寺に関連づけられるものである。まず検出された遺構は窯跡2基と窯状遺構とする土坑1基である。窯跡については2基とも地山を掘り込む半地下式で、1号窯は2条の分焰牀を有する有牀式で小型の平窯と考えられる。2号窯については断定できないが同様なものとおもわれる。窯状遺構とする土坑はその形態や検出状況などからしていわゆる伏焼木炭窯と考えられるもので、窯の燃料として黒炭を製造していたものであろう（註2）。時期については出土土器類からすると須恵器81・82が7～8世紀とやや古くなるもので、他はおおむね平安時代中期以降である。量的に多いのは10世紀後半～11世紀にかけてのものである。ただこれらのなかでも須恵器66・68・69は11世紀後葉から12世紀前葉にかけての年代的には最も下る段階のものである（註3）。66・68は出土状況などから窯跡と伏焼木炭窯とする土坑1の下限を示すものである。遺構の性格からしてもその経過は同時期とみなせることから、両者は平安時代後期前半頃（12世紀前葉）には操業停止（廃絶）した窯跡群と考えられる。操業形態としては高松廃寺の境内内に設けられた小規模な生産施設として、瓦及び須恵器などをあわせて焼成していた瓦陶兼業が復元される。なお、創建時期及び白鳥廃寺との関連を示す具体的な資料はみられないが、遺物からは平安時代中期段階に一つの盛期が認められ、実質的な創建時期の可能性がうかがわれる。ここでは高松廃寺は推定南海道を視界におさめ標高約35m、東西両側低地との比高差20mほどの狭小な傾斜地に立地する、平安時代中期後半から後期にかけての小規模な寺跡と考える。

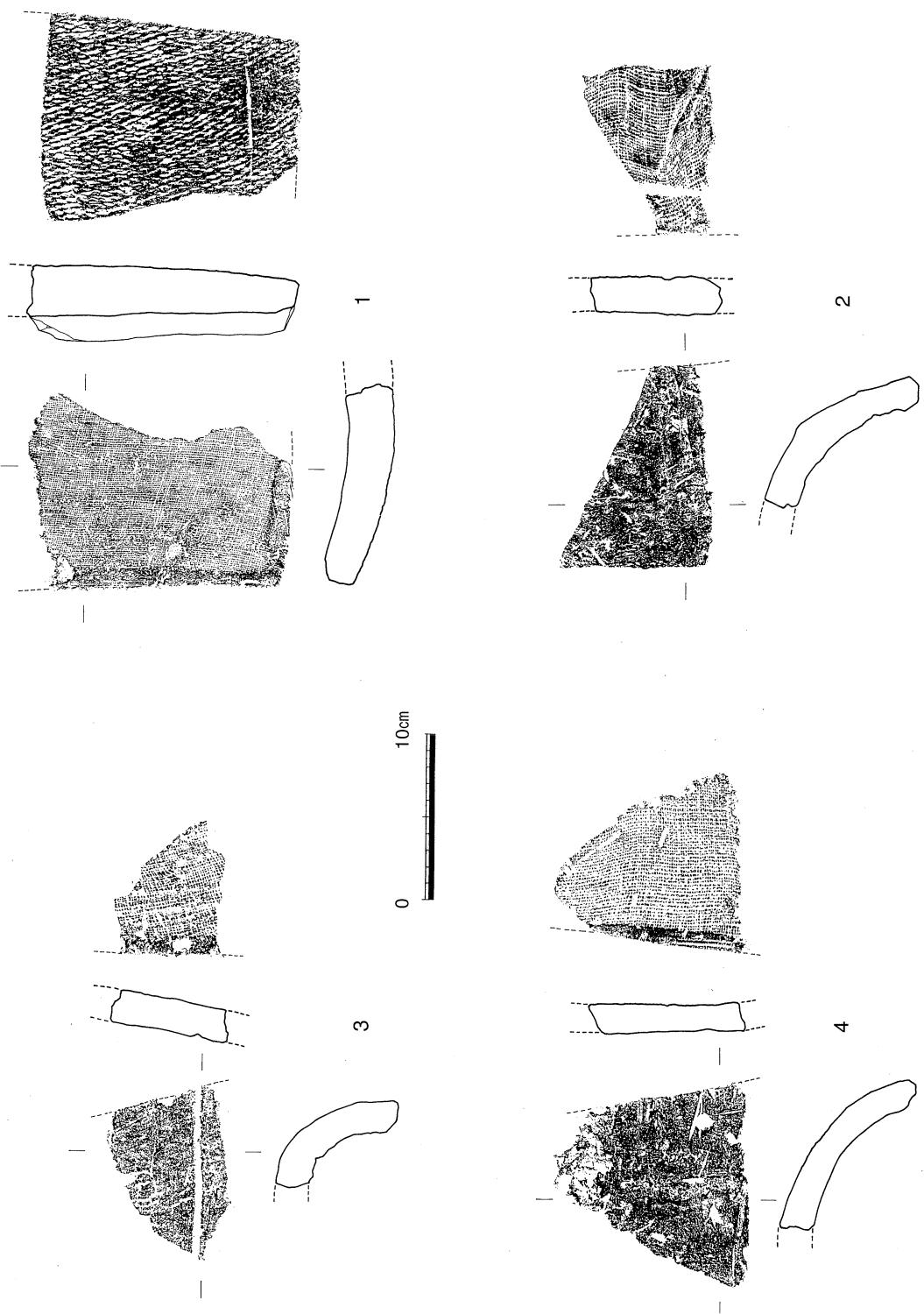
山中における宗教関連遺跡として修験道が先ずあげられるが、修験道とそれ以前の山岳仏教は別とされる（註4）。県内における調査例は少ないが古代山岳寺院として琴南町中寺廃寺があり、平安時代中期（10世紀前半頃）には標高700mをこえる山上において塔跡などからなる伽藍を有するものがみられる（註5）。大川郡内においても資料検討を要するが寒川町小倉寺（峯の薬師）が指摘される（註6）。高松廃寺も広義の山岳寺院にあてはめられようが、上記のような深山にあるものに対し高松廃寺はきわめて人界と接するものである。山岳寺院は宗教的要因・時代・立地・伽藍・存続形態などの点に関連して多様なあり方を示すことからも充分な比較検討が図られようが、いまだ県下の具体的な様相については上記を含む僅かな例を除いてほとんど不明であり、今後さらなる資料の充実が必要である。

参考文献

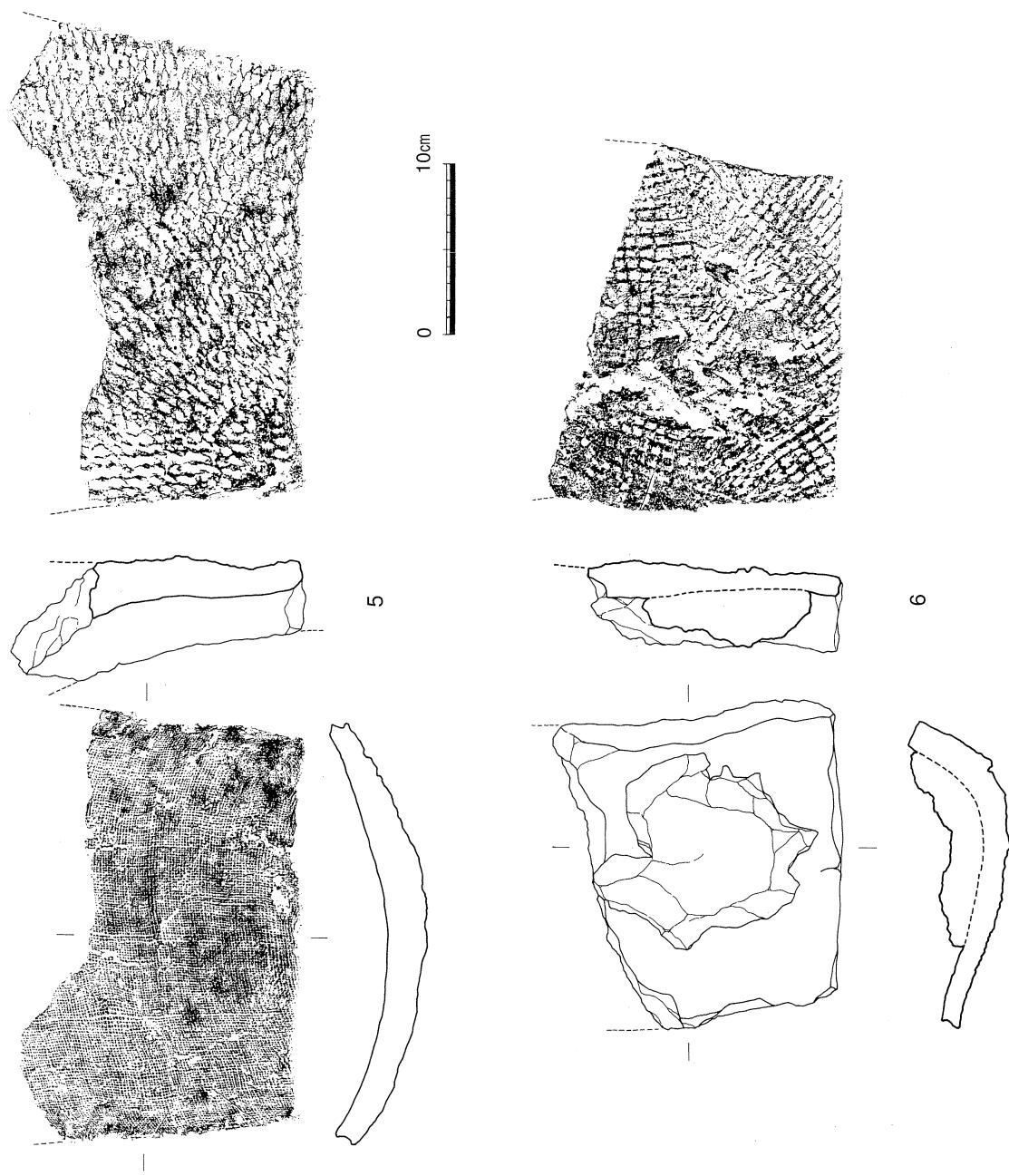
- 『平安京提要』 1994 角川書店
- 大川清『日本の古代瓦窯（増補版）』 1997
- 毛利光俊彦「近畿地方の瓦窯」『仏教芸術』 148 1983
- 栗原和彦「九州における平瓦一枚づくり」『九州歴史資料館研究論集』 15 1990
- 『考古学ジャーナル 特集古代中世の山岳寺院』 No.382 1994

註

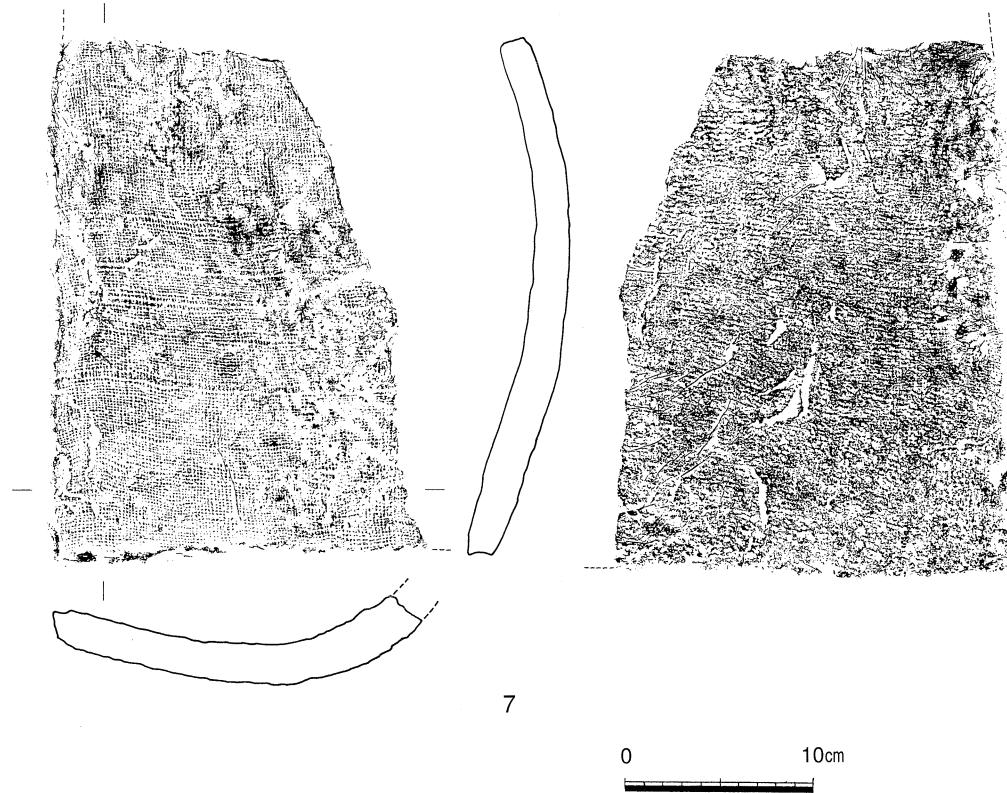
- (1) 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報特別号8』1967 香川県文化財保護協会
『古瓦百選（讃岐編）』1974 美巧社
- (2) 菅原康夫「遺物を持たない遺構」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2 (財)徳島県埋蔵文化財センター 1991
水谷寿克「窯跡付帯の焼土壙について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 1987
- (3) 佐藤竜馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』1993
片桐孝浩「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』1992 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森 格也「前田東・中村遺跡の平安時代の土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』1995 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- (4) 時枝 努「修驗道の考古学」『季刊考古学』第59号 1997
宮家 準『修驗道儀礼の研究（増補決定版）』1999
- (5) 中西 昇「中寺廃寺確認調査概報」『県道府中・琴南線改良工事に伴う備中地遺跡発掘調査報告書』1988 琴南町教育委員会
- (6) 『寒川町史』寒川町史編集委員会 1985



第7図 第1次出土遺物

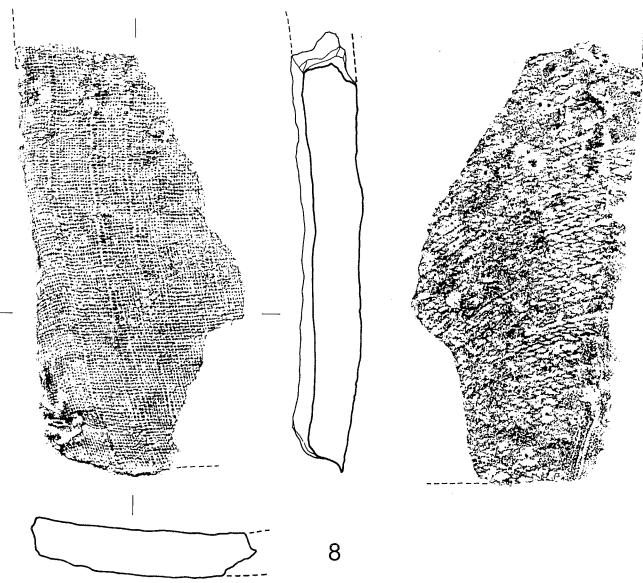


第8図 トレンチ1出土遺物（1）



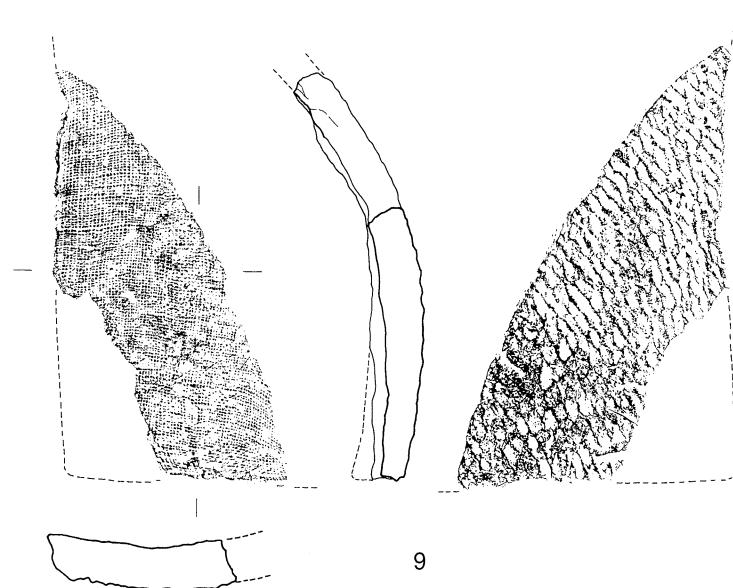
7

0 10cm

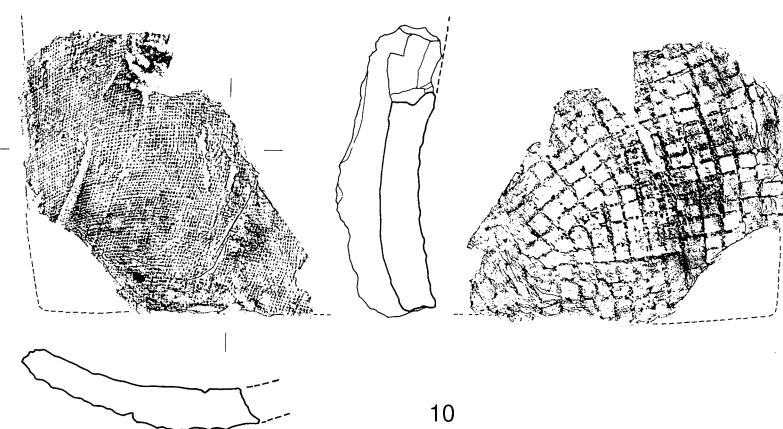


8

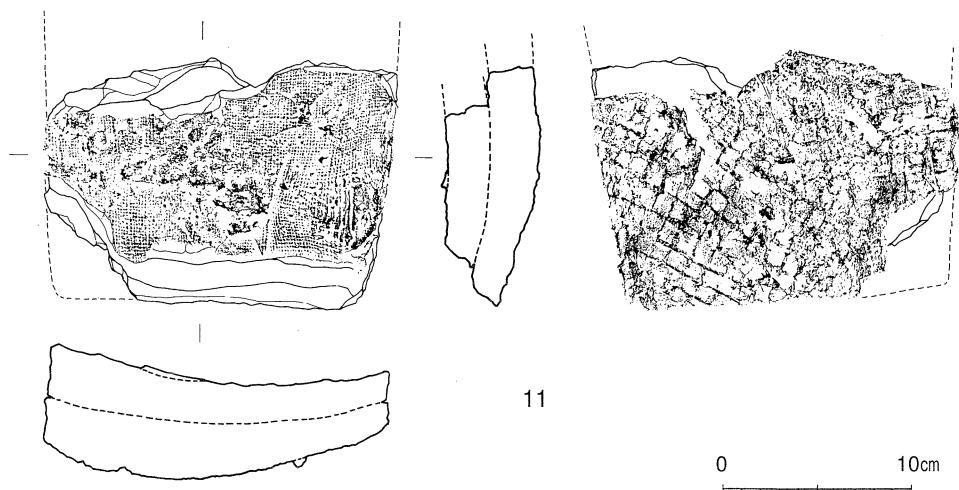
第9図 トレンチ1出土遺物（2）



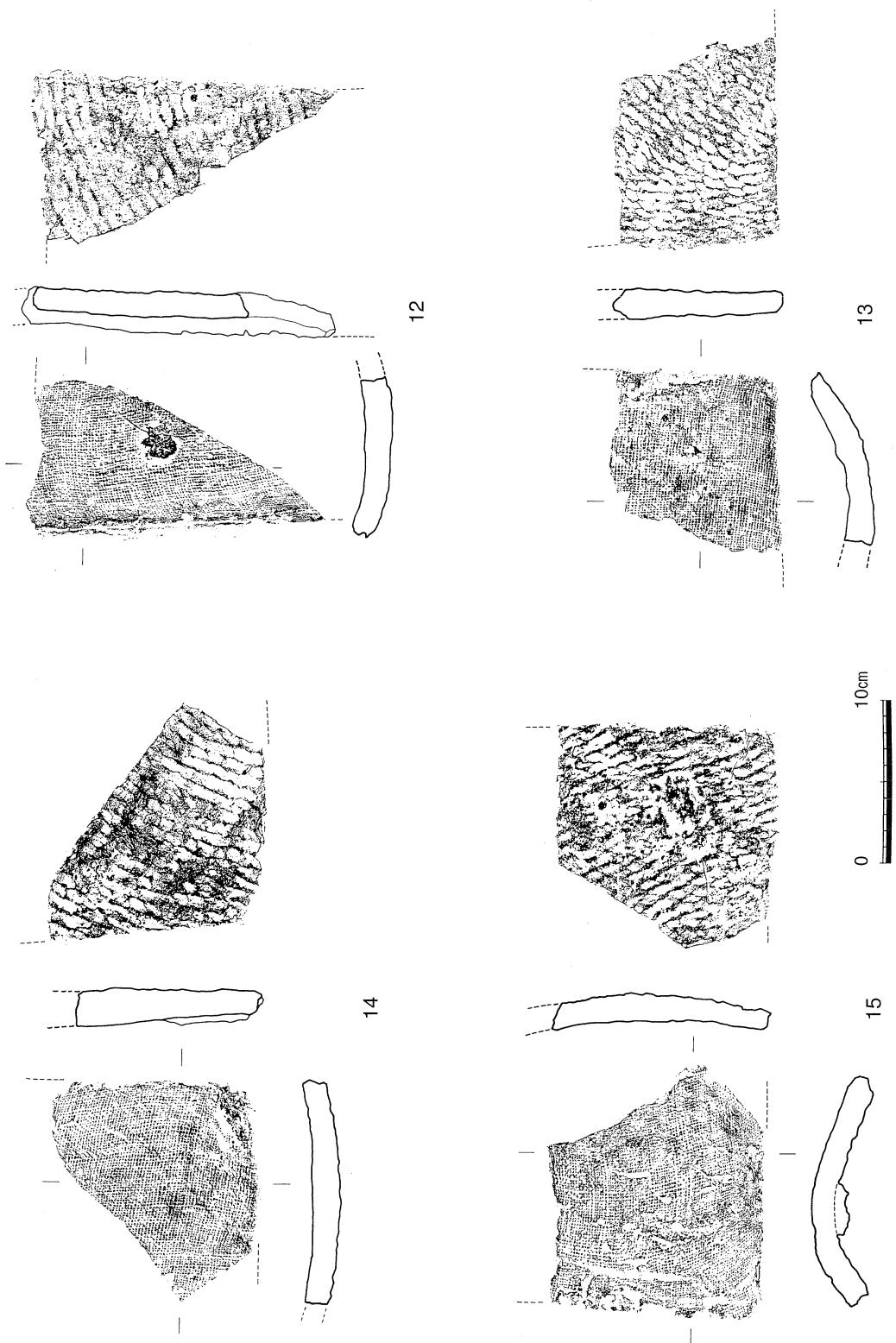
9



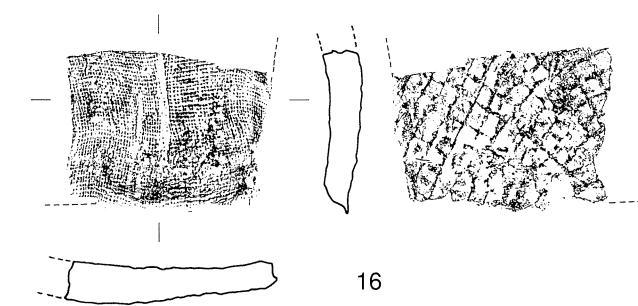
10



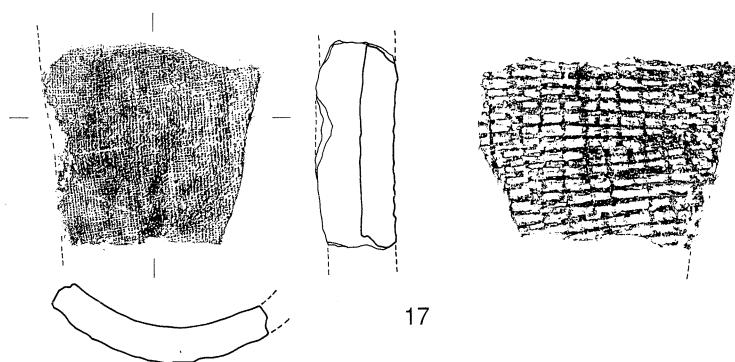
第10図 トレンチ 1 出土遺物 (3)



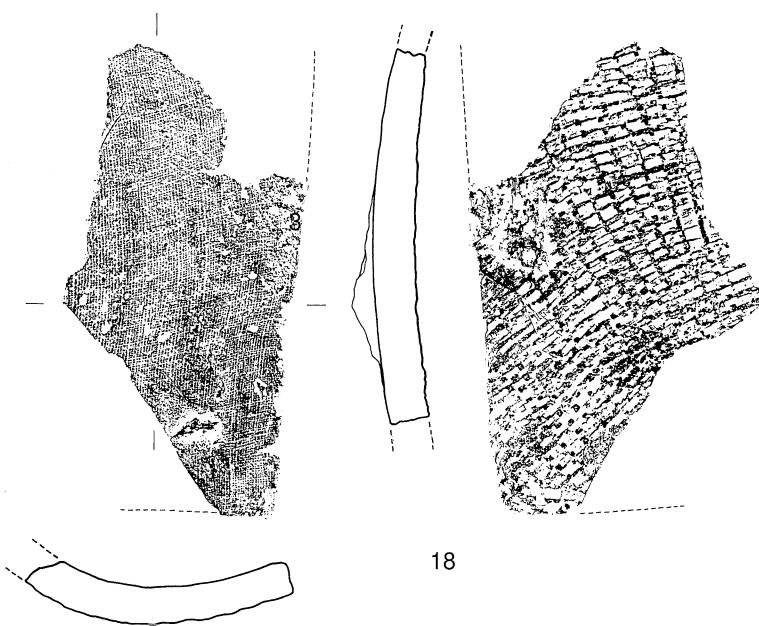
第11図 ブレンチ1出土遺物 (4)



16



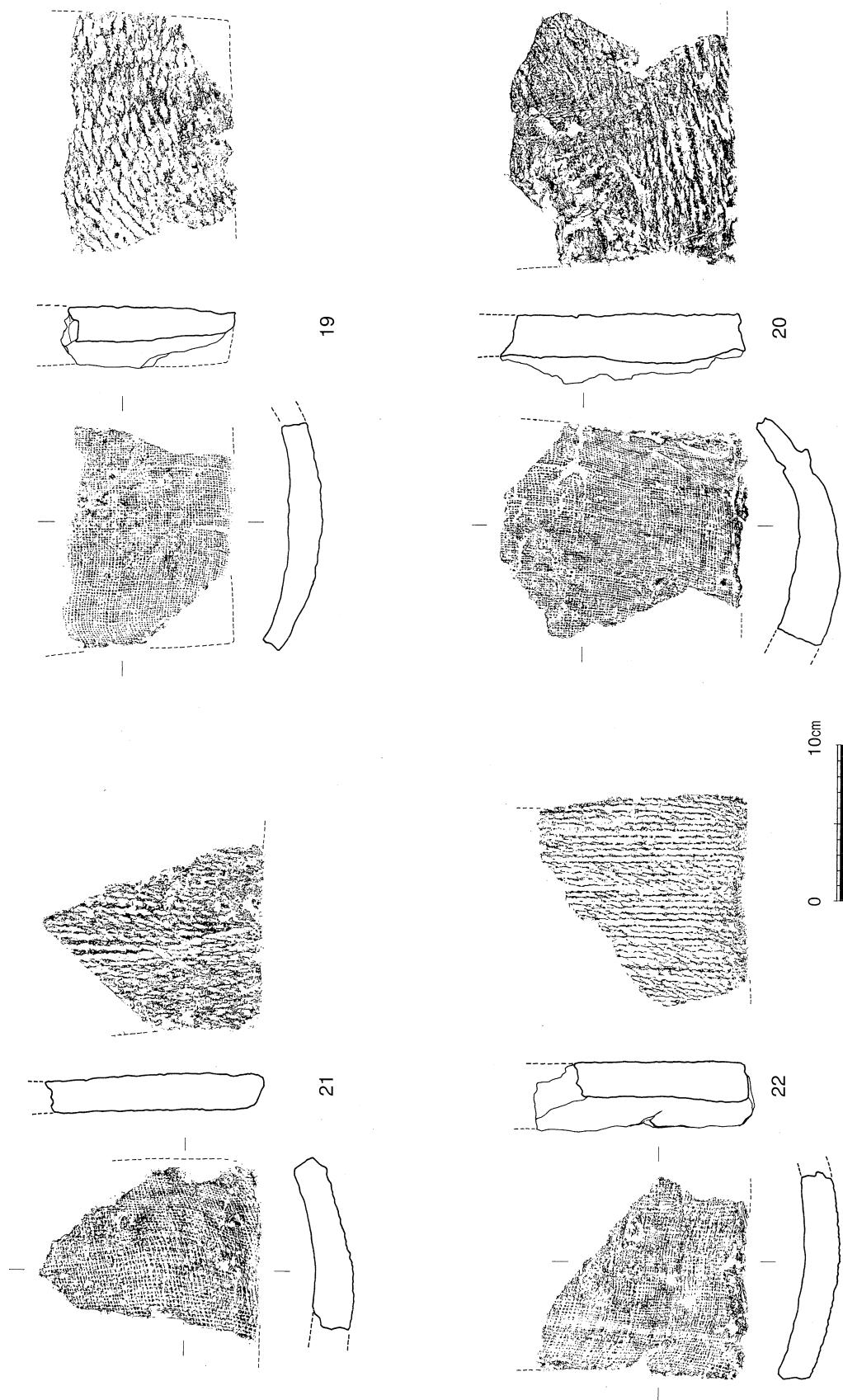
17



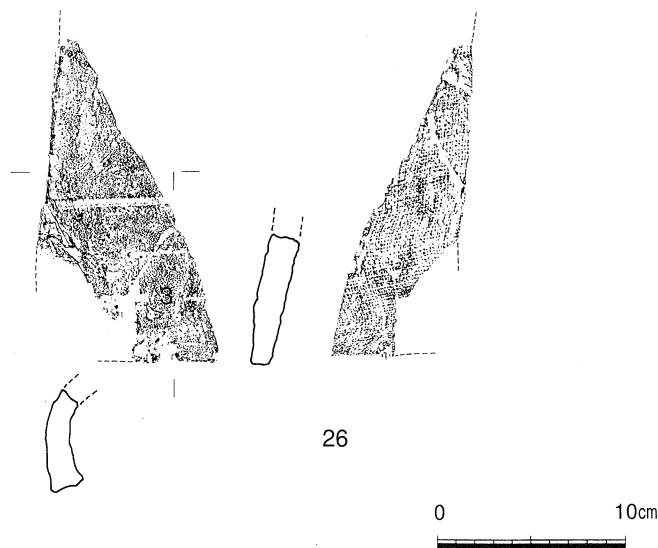
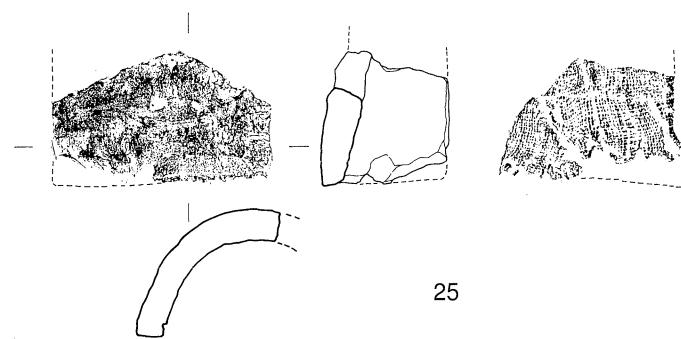
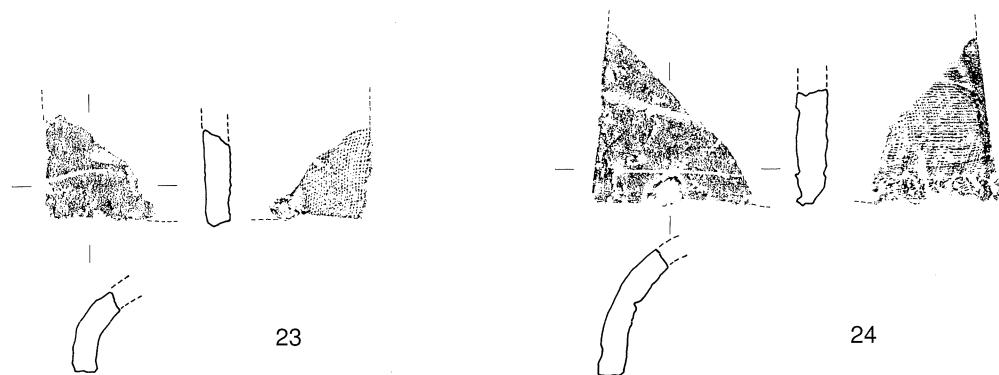
18

0 10cm

第12図 トレンチ1出土遺物(5)



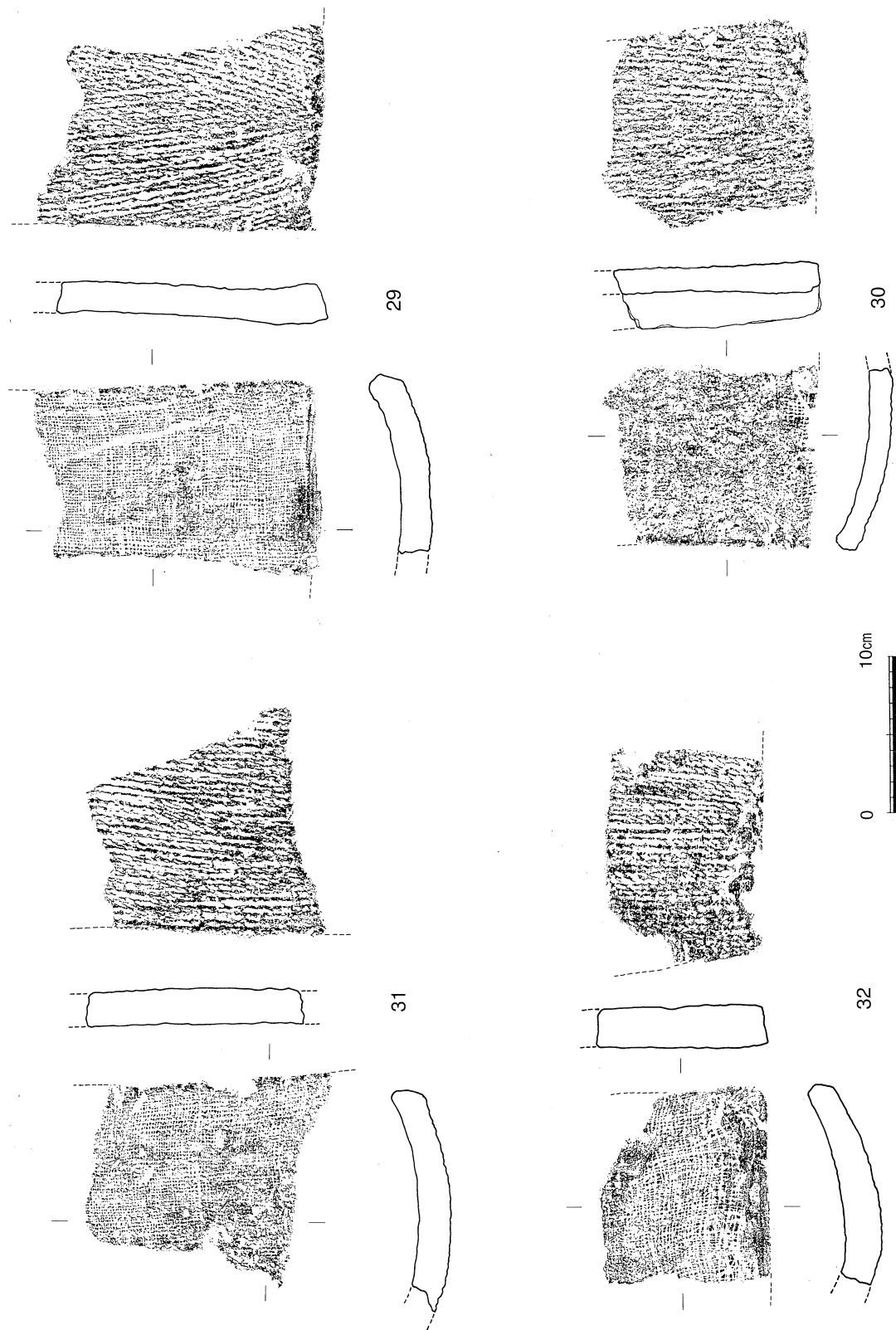
第13図 トレンチ1出土遺物 (6)



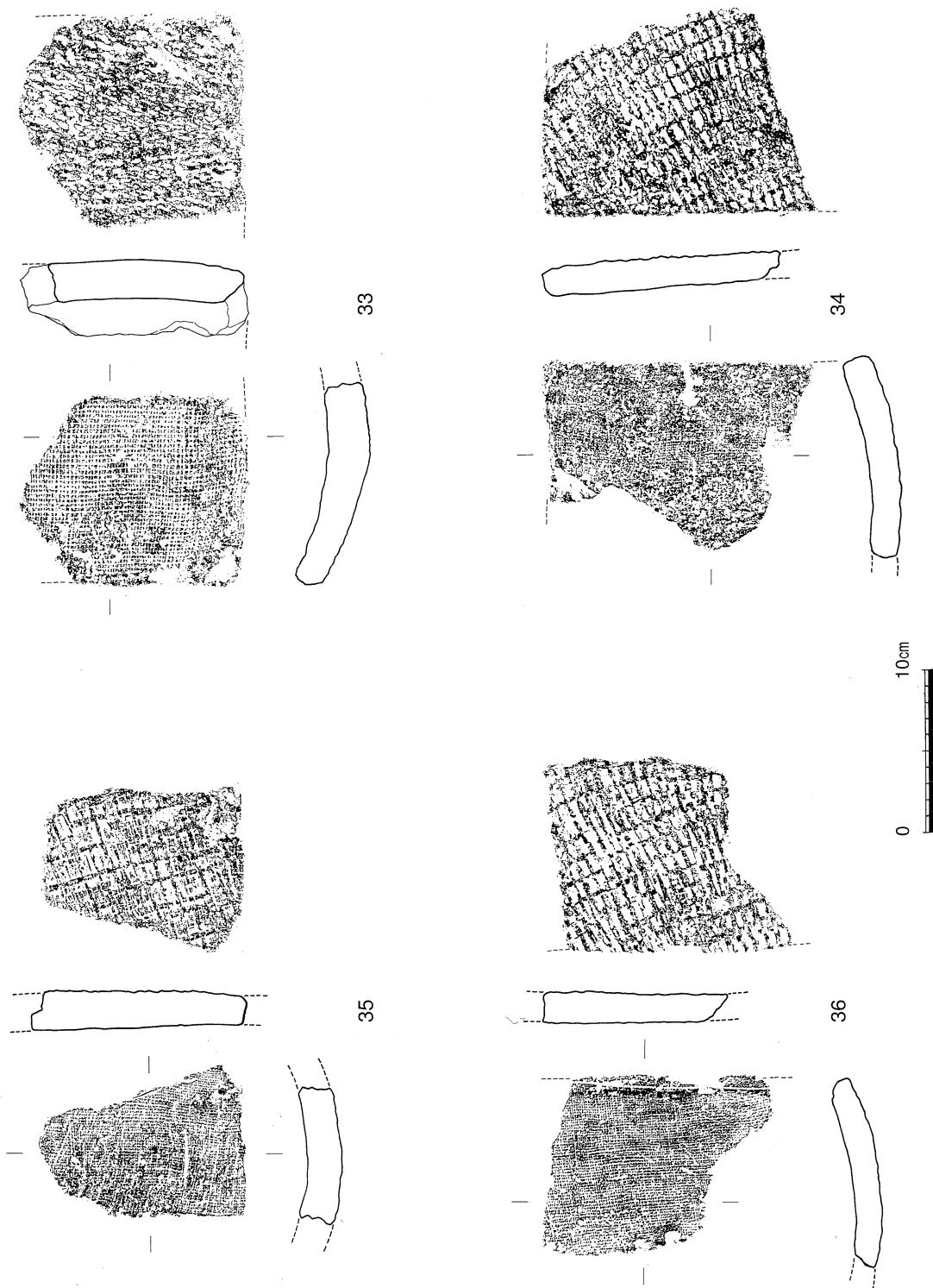
第14図 トレンチ1出土遺物 (7)



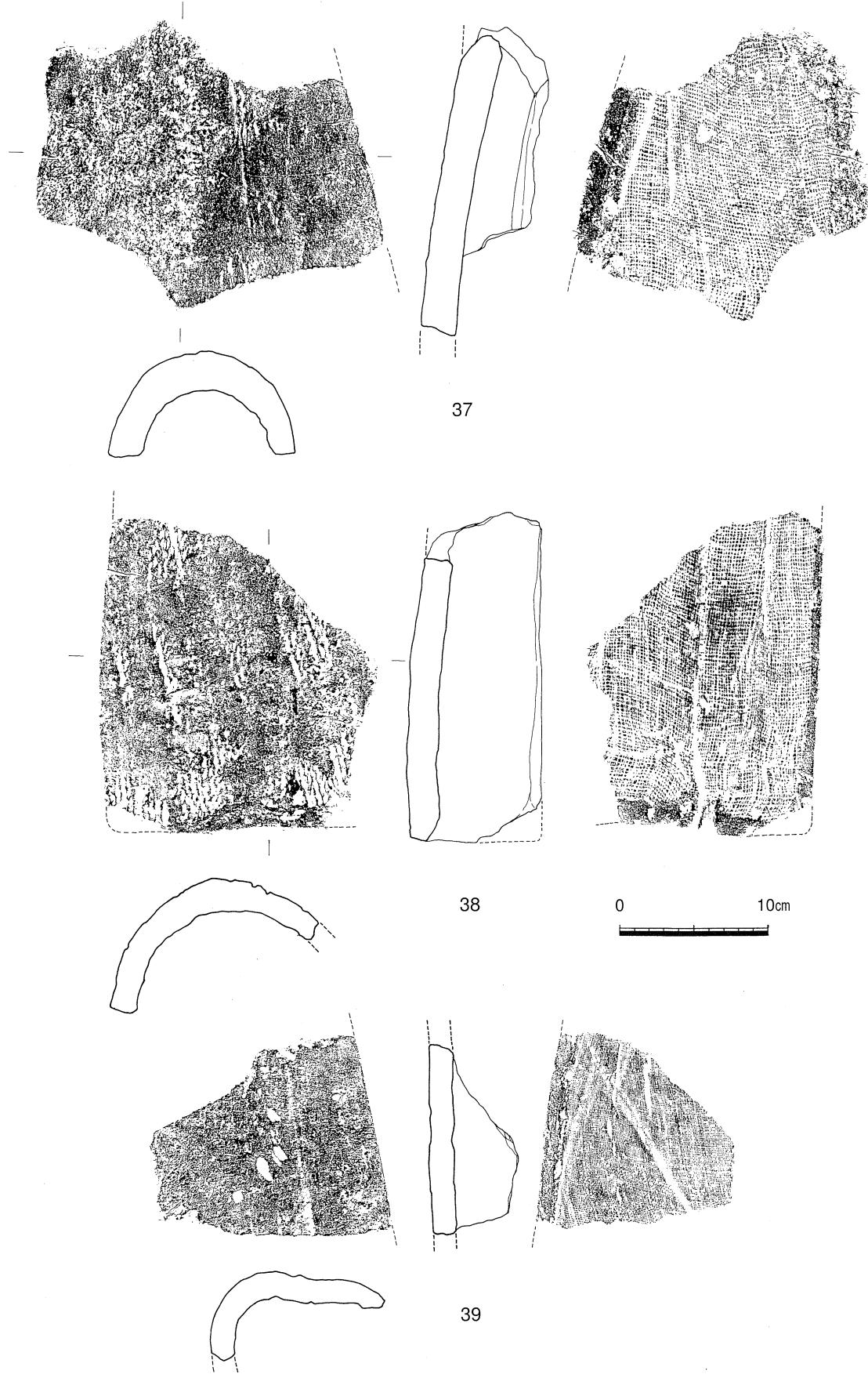
第15図 散布地A出土遺物（1）



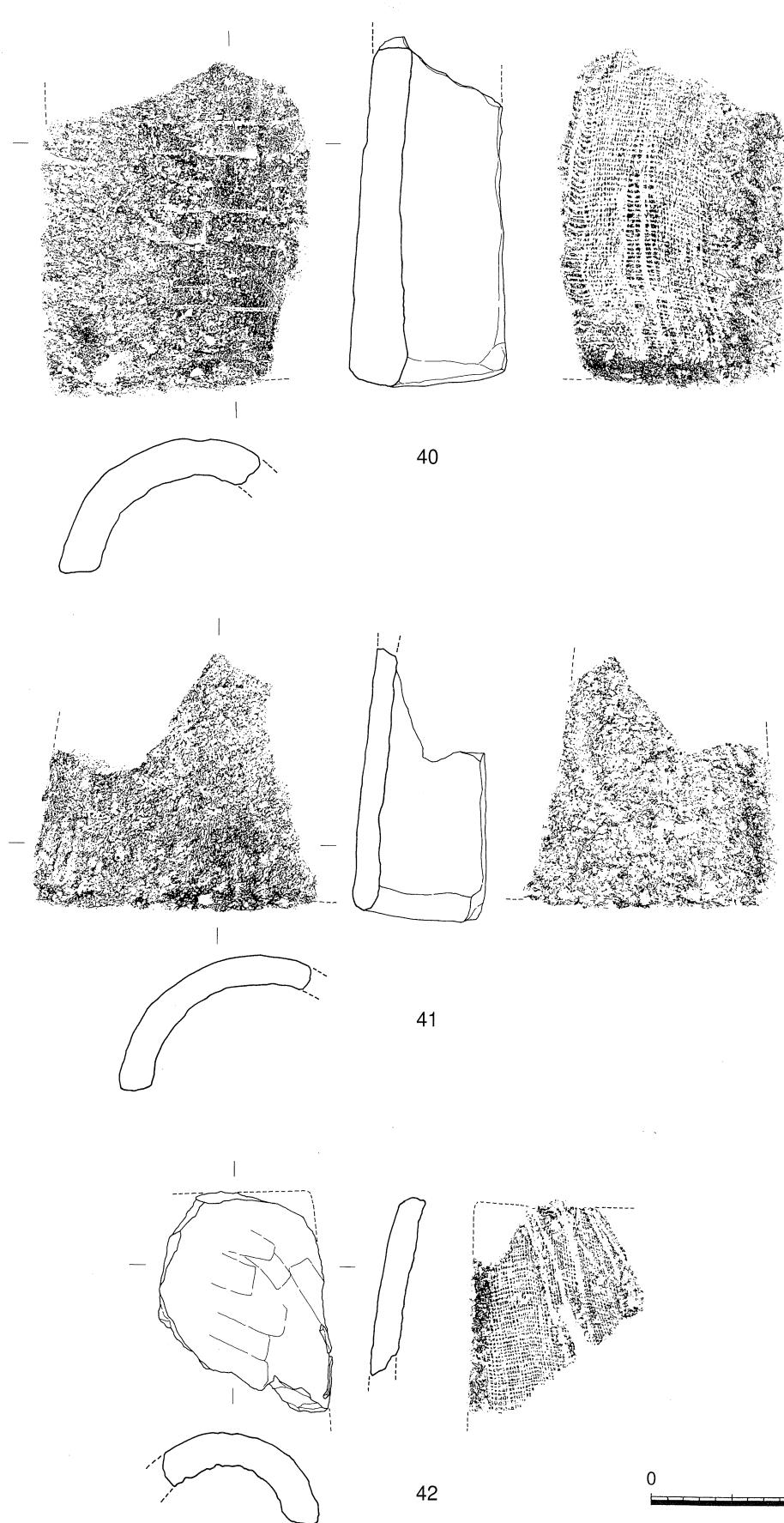
第16図 散布地A出土遺物（2）



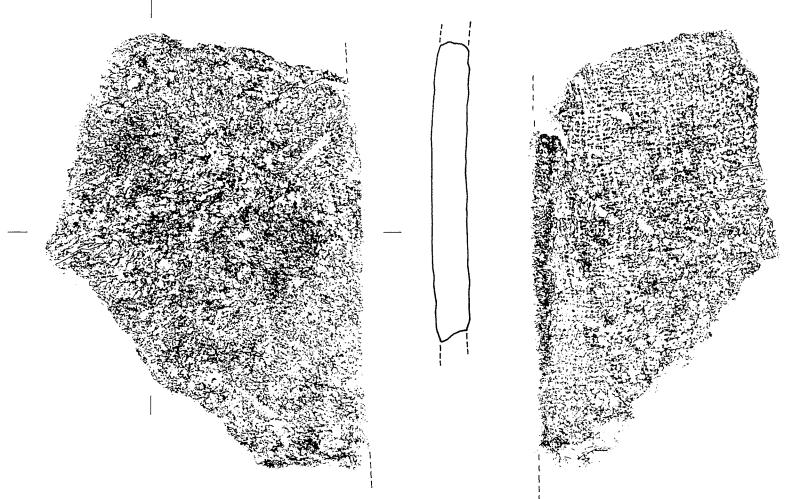
第17図 散布地A出土遺物（3）



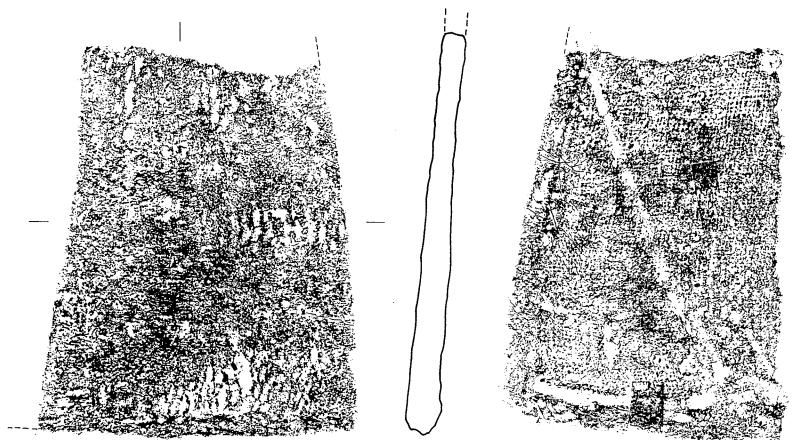
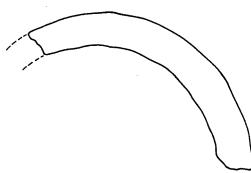
第18図 散布地A出土遺物 (4)



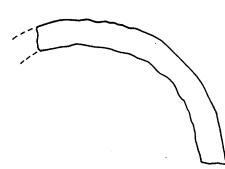
第19図 散布地A出土遺物（5）



43



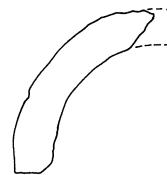
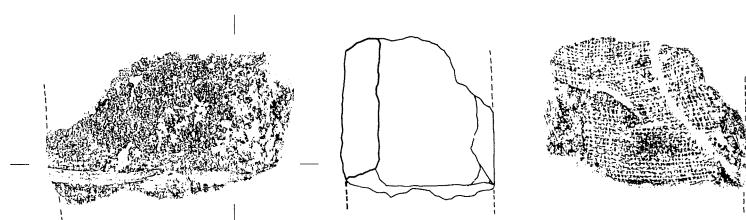
44



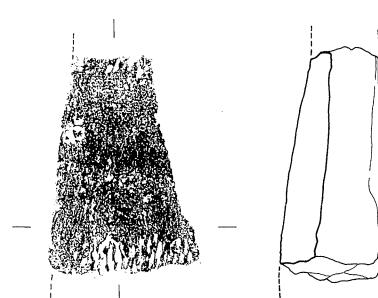
0 10cm

A horizontal scale bar with markings at 0 and 10 cm, indicating the size of the objects shown.

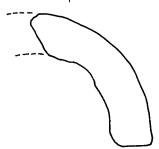
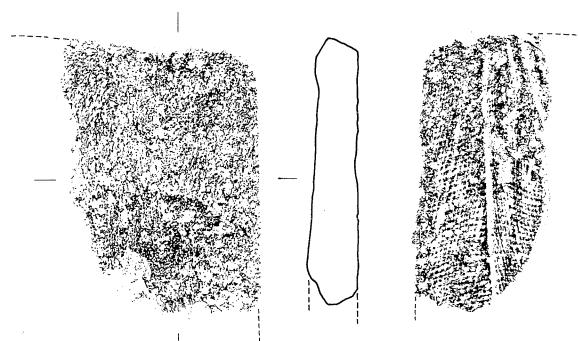
第20図 散布地A出土遺物 (6)



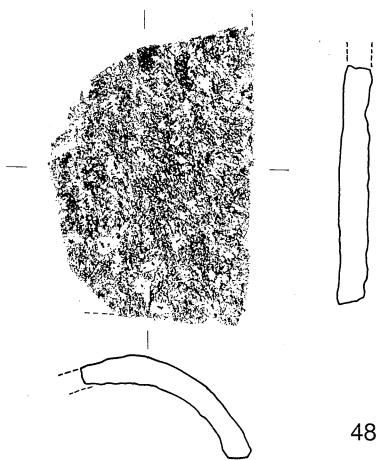
45



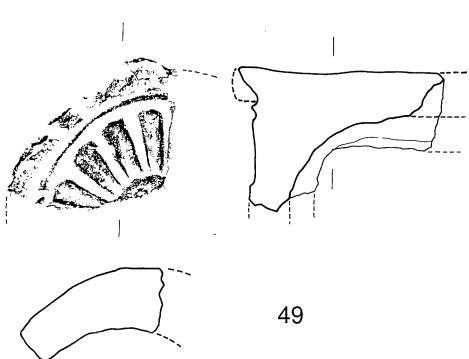
46



47



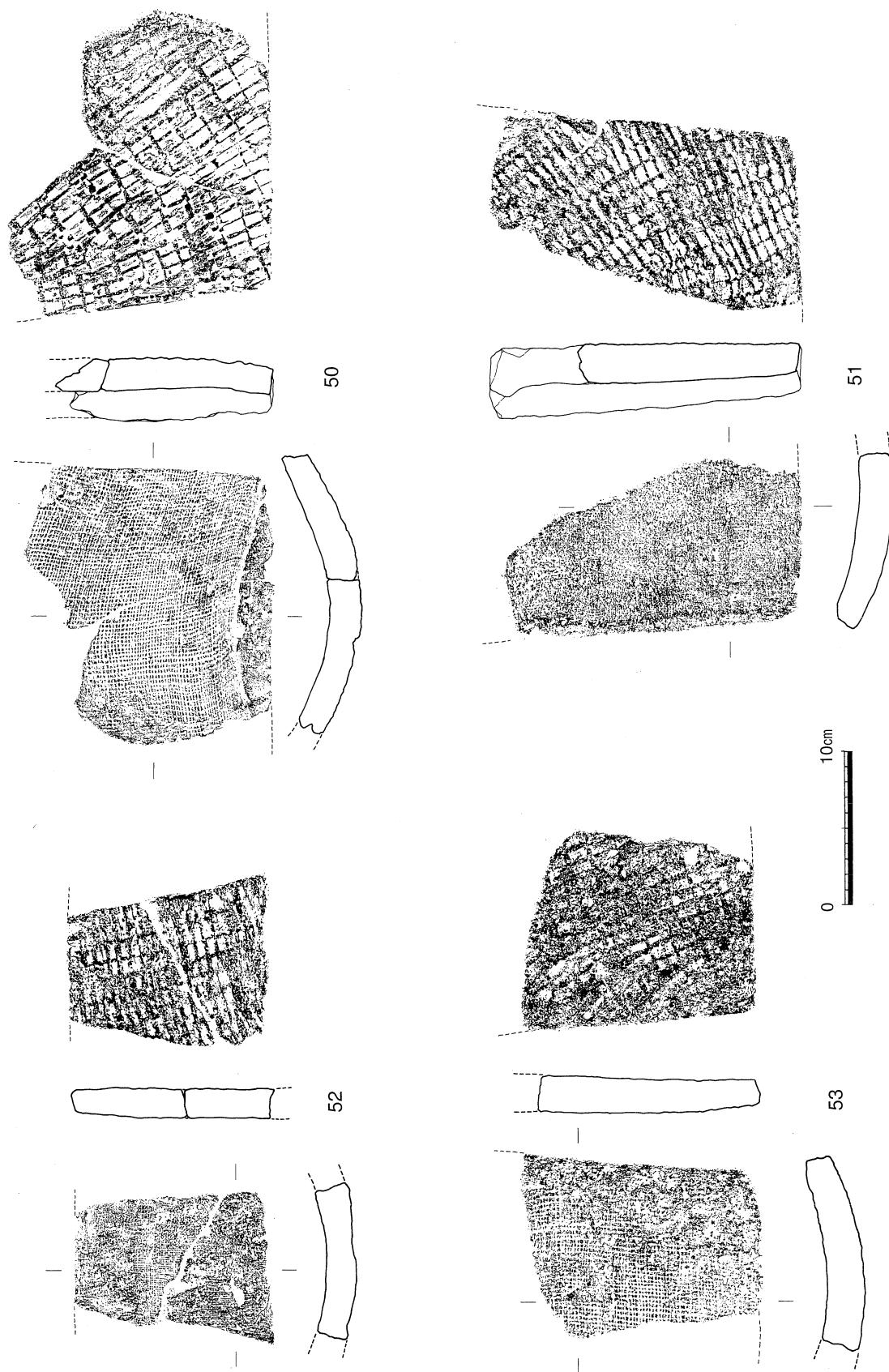
48



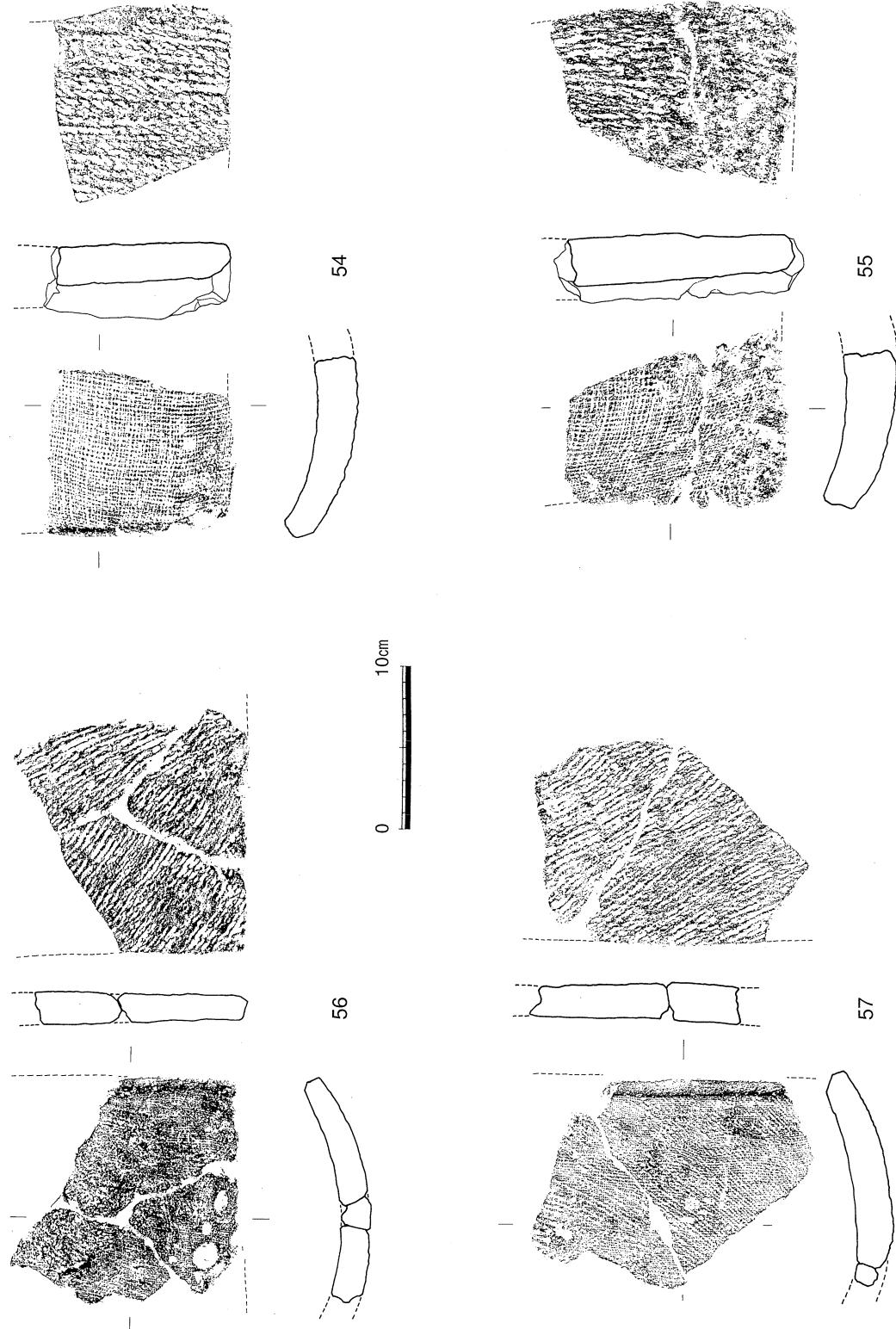
49

0 10cm

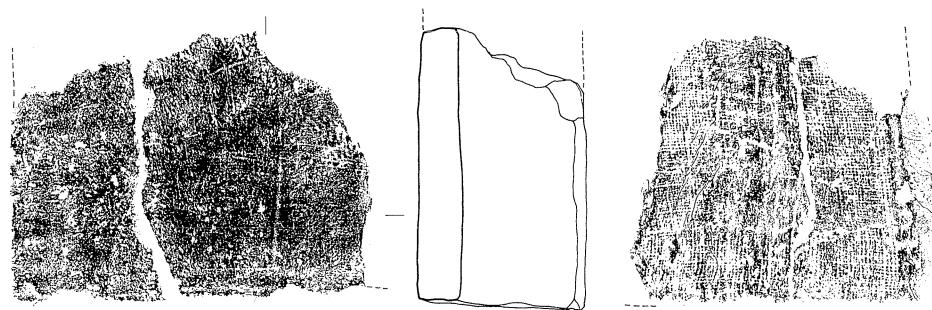
第21図 散布地A出土遺物 (7)



第22図 散布地B出土遺物（1）

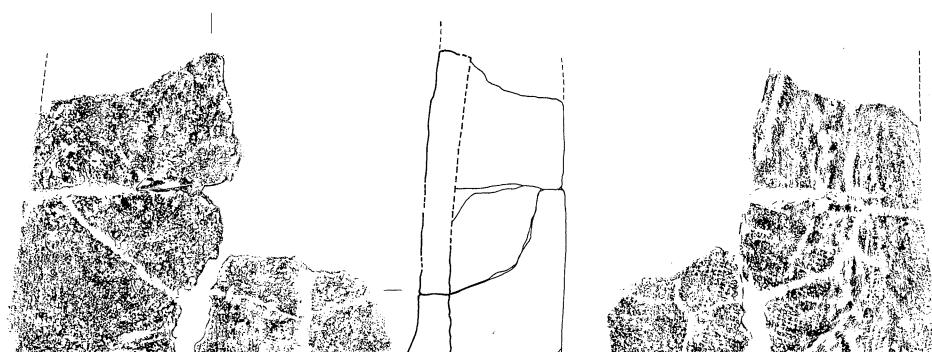


第23図 散布地B出土遺物（2）

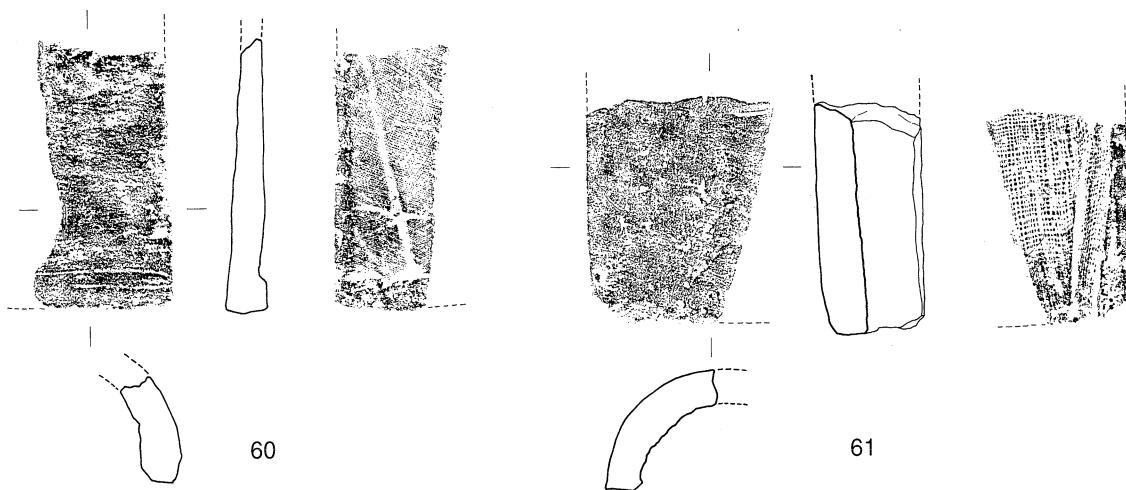


58

0 10cm



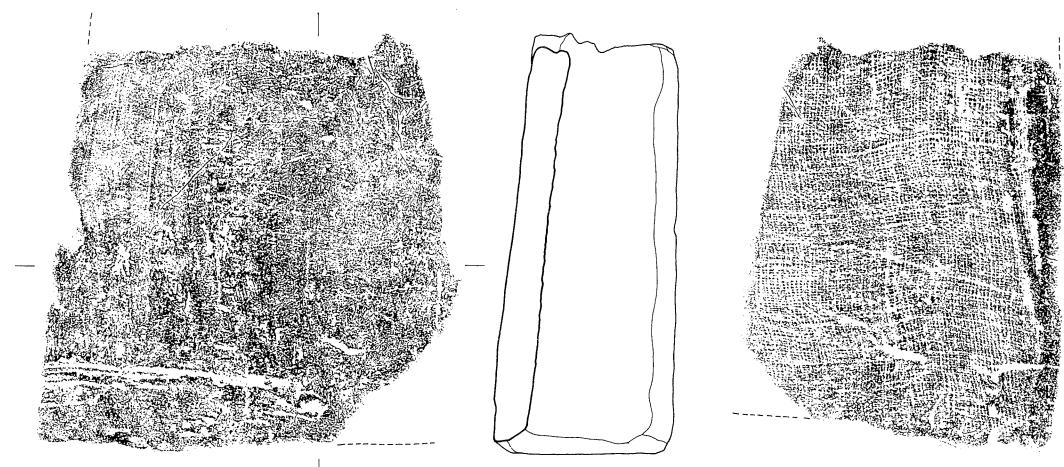
59



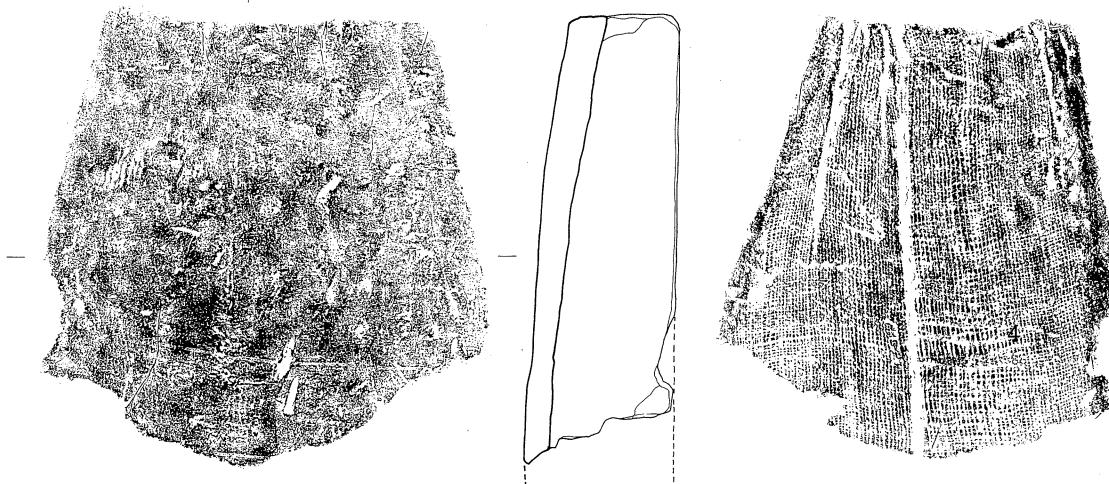
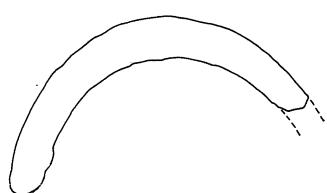
60

61

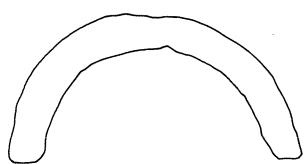
第24図 散布地B出土遺物（3）



62

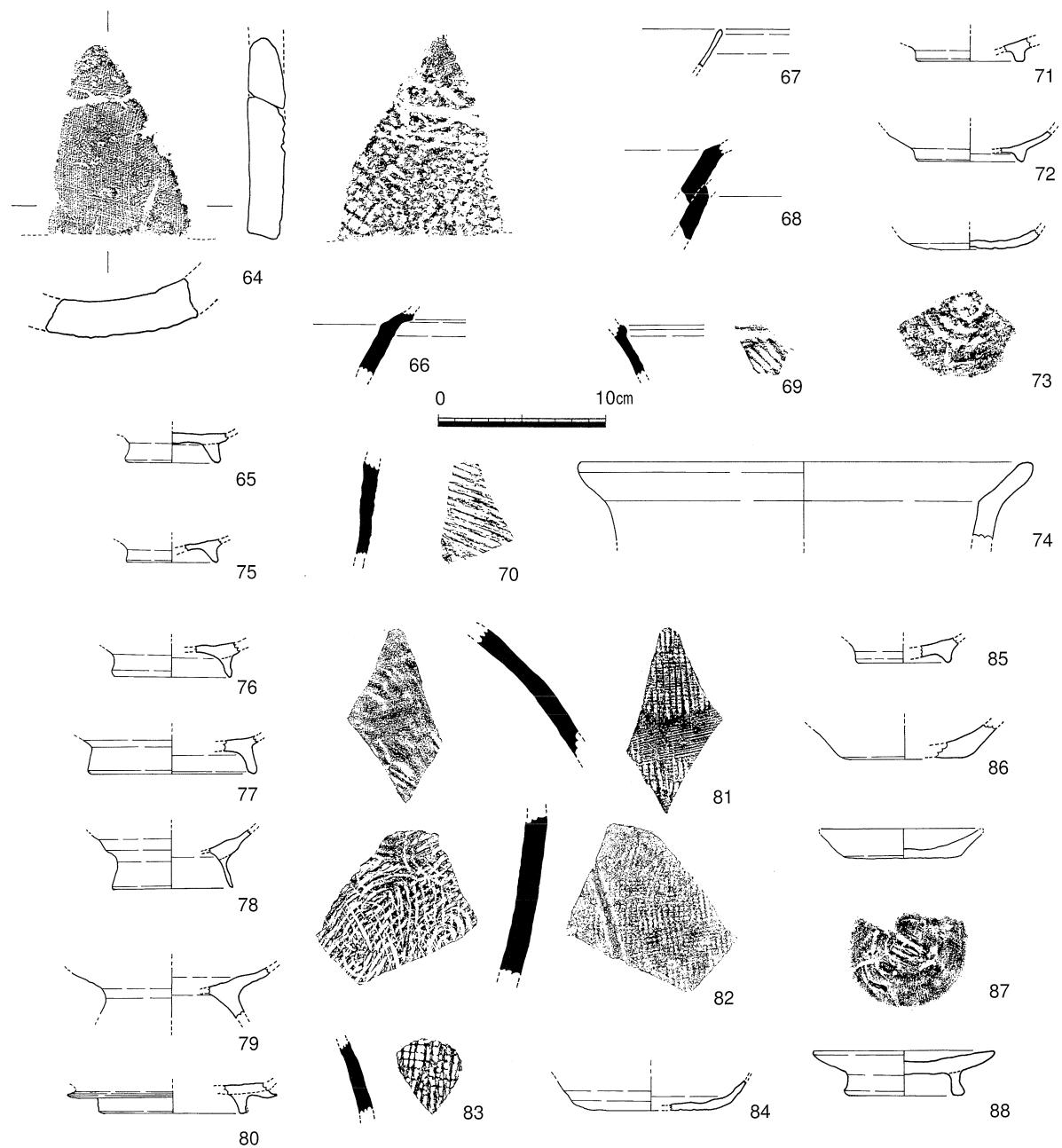


63

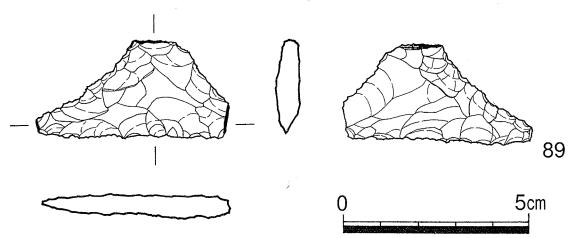


0 10cm

第25図 かつて採集された遺物



第26図 遺構にともなう遺物および他の出土土器



第27図 出土石器（第1次）

第3章 成重遺跡

第1節 はじめに

成重遺跡は白鳥町白鳥字成重に所在する。第1章でふれたように沖積平野に立地する弥生時代中期から古代・中世にかけて営まれた複合集落遺跡である。とくに弥生時代中期後半から古墳時代前半にかけては遺構・遺物において優勢を示し、旧大内郡においては大内町原間遺跡と同様に拠点的集落の一つと考えられる。遺跡の範囲は西は湊川氾濫原より国道318号線を挟んで帰来山系山麓までの、東西約500mで南北は約200mをはかり、周囲の状況からしてさらに南北に広がっていることが想定される。

第2節 経緯と経過

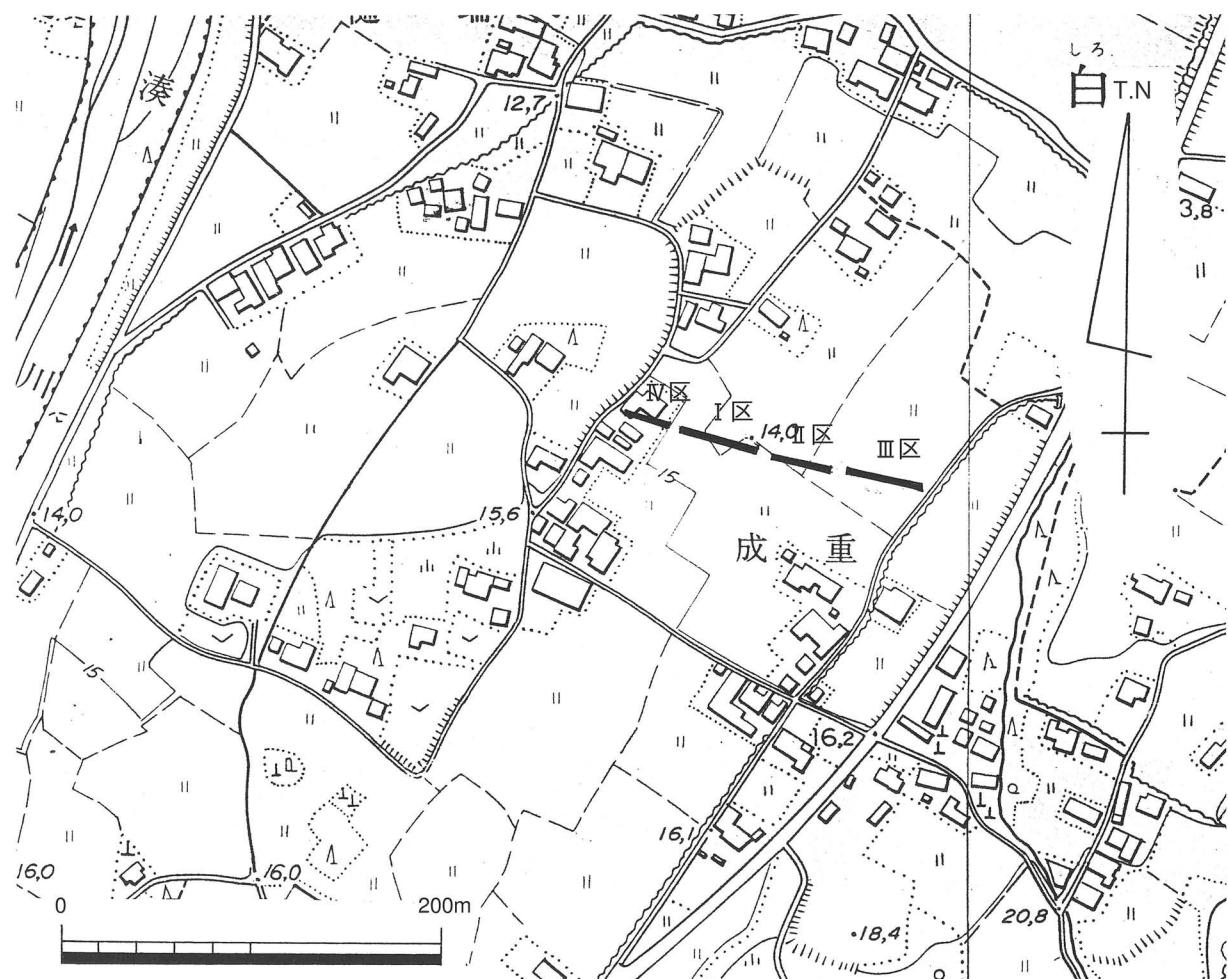
今回の調査は平野部を東西にはしる四国横断自動車道建設に際して行われた、周辺農地の区画整理に伴う幹線用水路建設工事を契機とするものである。これに先立って横断自動車道本体範囲の発掘調査が(財)香川県埋蔵文化財調査センターによって平成9年度より実施されており、埋葬施設をもつものなど集石遺構が多数確認され、一部設計変更が実施されるなどの成果が上げられていた。この結果をうけ予定されている工事範囲が横断道南側に隣接することから遺跡の所在が確実と考えられたため、事前に発掘調査を実施したものである。調査範囲は横断道南側にそって南北3m幅で東西約170mにわたって延びるものである。発掘調査は用地内家屋撤去などの都合上、平成10年度から2カ年にわたって実施した。以下概略を記すと、

平成10年度（第1次調査）は東側約140m²を対象とし1998（平成10）年12月より担当課と協議を行い、平成11年1月21日に現場事務所等を設営し、1月26日より重機による表土掘削を始める。調査は範囲を3区に分け、西側よりとりかかる。遺構面はおおむね上下2面確認し下位弥生時代遺構面では集石遺構・土坑・柱穴を、上位遺構面では古代～中世の土坑群を検出した。現場での調査作業が完了した調査区から順次埋め戻しし、4月13日に最終区を終了し残務整理後の4月26日に発掘調査を終了した。

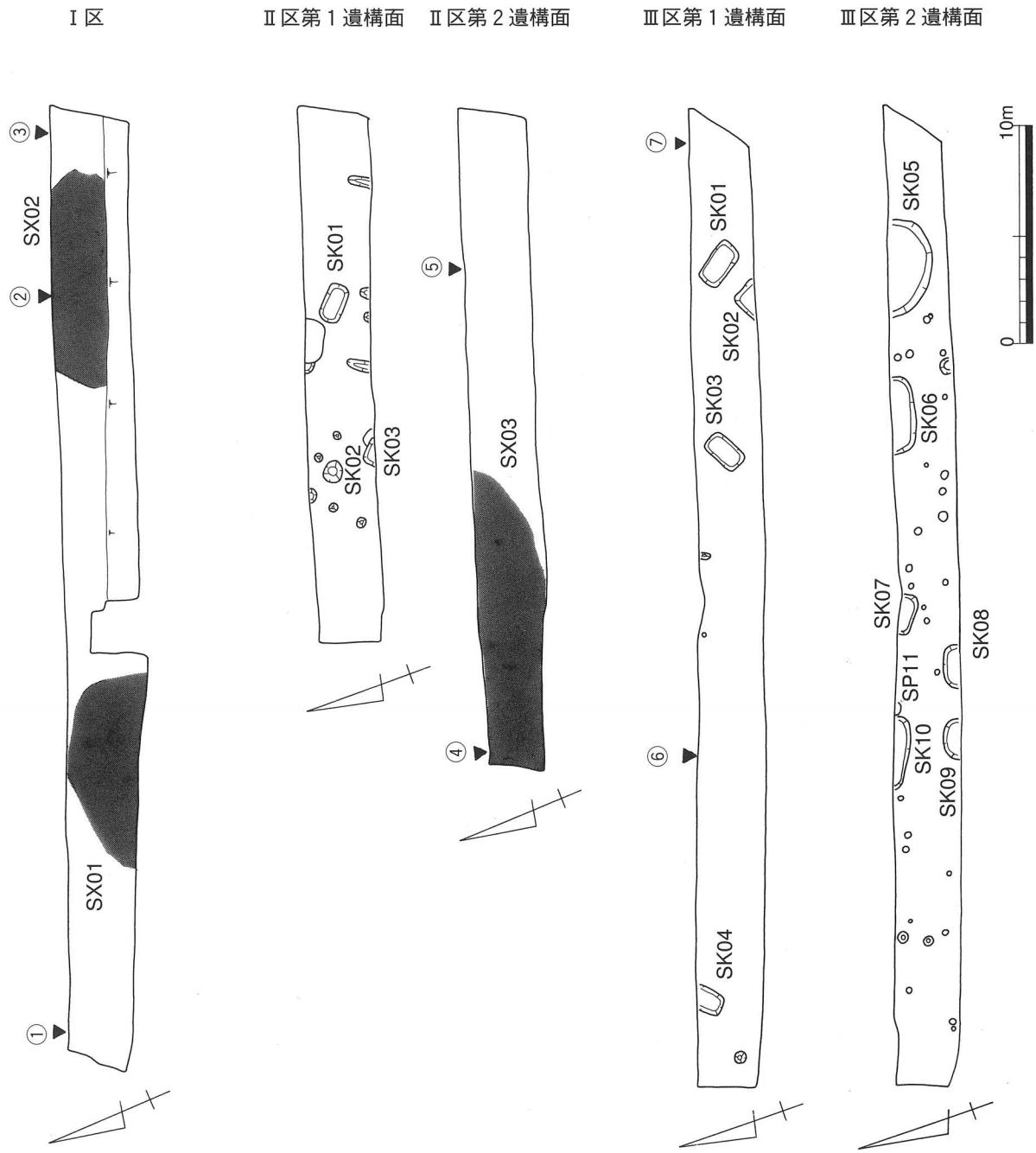
平成11年度（第2次調査）は残り約30mを対象とし、9月16日より隨時行い12月2日にすべての作業を終了した。遺構面は弥生時代と近代の2面を確認したが、遺構・遺物ともに少量であった。

第3節 調査の結果

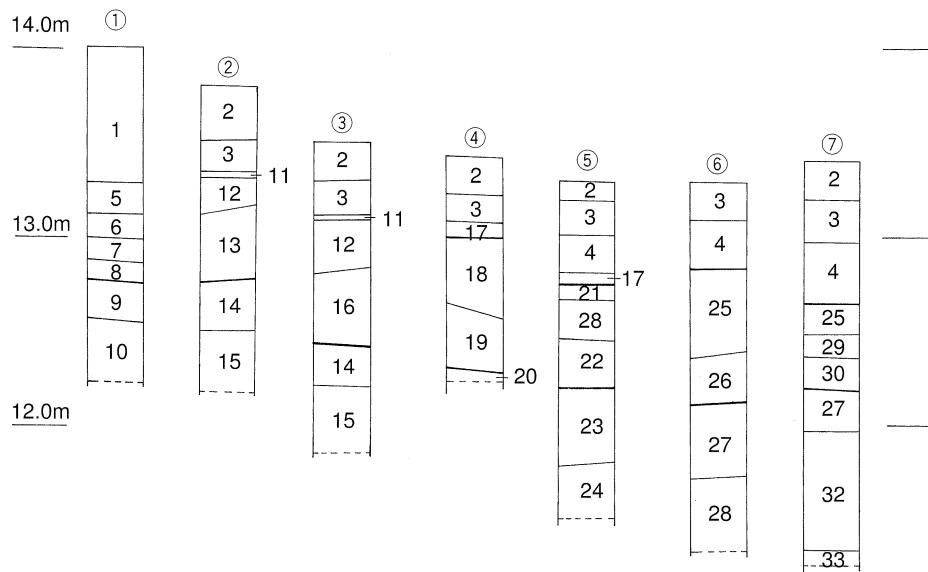
調査区については平成10年度調査範囲を西側より田筆によってI～III区とし、残る平成11年度調査範囲を、IV区とする。以下各調査区ごとに記す。I～III区における遺構番号については集石遺構のみ通し番号とし、他は各調査区ごとに付した。



第28図 調査区位置図



第29図 I～III区遺構配置図



1 カク乱	10 暗灰褐色砂礫混土	19 明青灰色土	28 黄褐色砂礫質土
2 客土	11 明黄橙色土(酸化層)	20 暗褐色礫混土(ベース)	29 明青灰色土
3 耕作土	12 灰褐色礫混土	21 灰色土	30 暗灰黄色土
4 床土	13 暗黄橙色土	22 灰黄色土	31 灰色砂礫混土
5 暗褐色細砂質土	14 暗灰褐色土(ベース)	23 浅黄色土(ベース)	32 黑褐色礫混土
6 明灰黄色土	15 暗橙色土	24 暗灰色土	33 にぶい黄色砂礫質土
7 灰色砂礫質土	16 暗黄褐色細砂礫混土	25 灰褐色土(ベース)	
8 にぶい黄橙色土	17 淡黄色土	26 青灰色砂礫混土	
9 暗茶褐色土(ベース)	18 灰白色土(ベース)	27 灰黄色土(ベース)	

第30図 I～III区土層柱状図

I. I区

I区は東西約44mをはかる。弥生時代の遺構面を1面確認し、集石遺構を2基検出した。土層序を概括すると、遺構は現地表下約120～150cmの褐灰色土をベース土とする。西側から集石遺構2にかけて僅かに微高し、東端にかけて緩やかに下る。集石遺構はベース土上に形成され、黄橙色系土によって包含されていた。これより上層は層厚20～30cmの暗灰褐色土において床土・耕作土となるが、西端より6～8mの範囲は砂礫質土とシルト質土の互層・カク乱となる。ベース土の下層はやや大きめの礫を含む砂礫質土である。

集石遺構1 (SX01)

西側において検出されたもので調査区西端から約10mに位置するものである。検出されたのはおおよそ半分くらいで残存部が調査区南につづくものとおもわれる。石・土器の集積に差はあるものの平面形態がやや不整な長楕円形を呈するもので、規模は東西約9mを測る。検出面において調査区南壁直下付近がもっとも高く、東西及び北側にむかって傾斜していき北端では約40cmほど低くなる。ただ、ベース

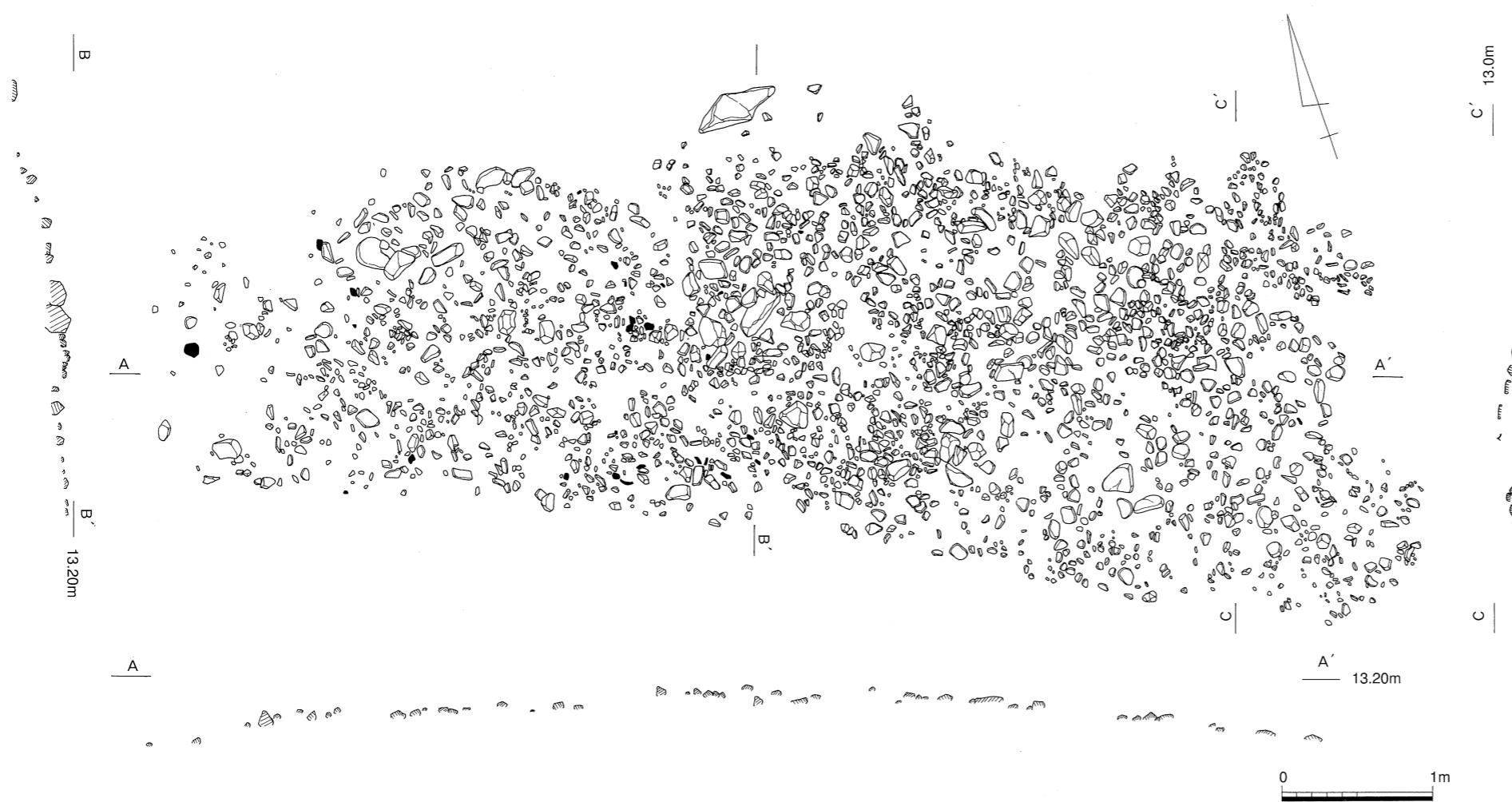
土も傾斜しているため顕著な盛り上がりはみられない。遺構のほとんどが石であるが比較的拳大のものが大半を占め、これより少し大きめの石が含まれる。ただ、北端では一抱えほどもある大きな石があった。出土遺物には土器の他に土製品と石器が各1点ある。土器の出状況は破片ばかりで完形に復元されるものは無かった。

図示した土器のうち1～29は底部で、6は外底部にヘラミガキをほどこす。29はしっかりとした底部から低く横につよく張り出す扁球状の体部につづく。内面はヘラケズリ・ハケ調整で外面には黒斑がみられる。22～37は甕である。22～25は口縁部が頸部から短く水平に近く屈曲し、内面にするどい稜をもち端部は上方に引き出す。26は頸部から端に短く折り返したもので無頸壺にはいるものか。頸部における粘土紐内傾接合痕が残り、その直下までヘラケズリがはいる。27～37は強弱に差はあるが口縁部が頸部からくの字に外反するもので、端部の拡張は顕著でない。38～50は壺である。38は二重口縁壺で、頸部はやや外傾しながら水平に短く屈曲し、直立する口縁端部にいたる。39～46は広口壺で、39～41は直立気味の頸部から口縁部が短く外方に折りひらく。42・43は口縁部が水平状に折りひらく。44は全体に薄づくりでやや外傾気味の頸部から水平近くに屈曲する。口縁端部は上下に拡張し内傾している。内外面ともハケやナデなどの調整がよくのこる。45はやや内傾の頸部から緩やかに折りひらくものである。口縁端部は弱く摘み上げる。また、頸部外面にヘラ記号をもつ。46は体部と頸部のさかいに刻目突帯を付す。47は口縁端部を下方に引き出し端面に刻目をほどこす。48は細頸壺の頸部下半であるが小片のため外傾具合は不明である。オサエ・ハケ目をよく残す。49は在地産のもので小型壺体部であろうか。50は直口壺で口頸部は緩く外反する。51は体部片で半截原体による斜格子文・直線文をほどこす。52～55は高壺で52・53とも壺部口縁は直立気味で端部を短く折りひらく。56・57は台付鉢としておく。ともに外面に刻目突帯を付し、57はさらに棒状浮文を貼り付け、口縁端部内面には円形浮文と格子文をほどこす。内面調整はヘラミガキである。58・59は土製紡錘車、石鎌である。時期についてはこれらの出土土器には、一部に弥生時代中期後半のものが含まれるが弥生時代後期後半頃のものとおもわれる。

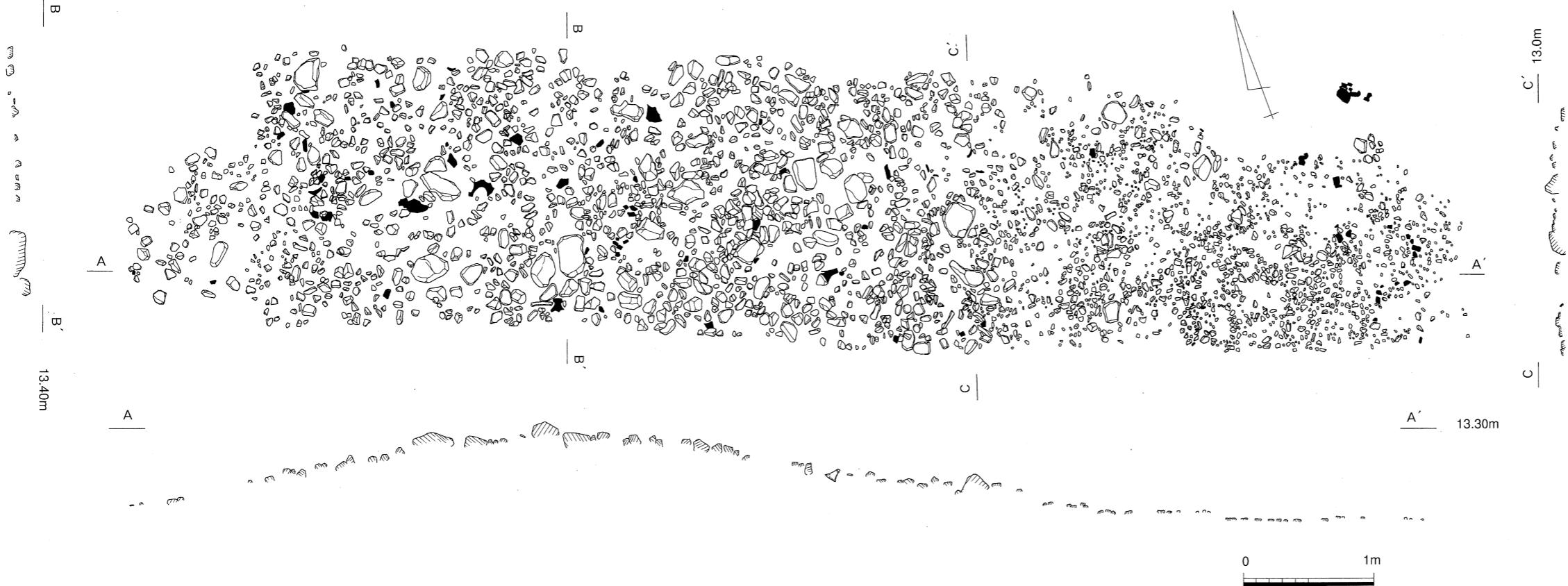
集石遺構2(SX02)

集石遺構1より東へ約13mほどに位置する。検出されたのは調査区に制約があるため半分以下と推定される。このため平面形態などは判別不可能で、残る他の部分については南北に広がっているとおもわれる。上面が現地表下約70cmほどの耕作土直下において検出されたもので、東西幅は約9mを測り中央3m幅ほどが最も盛り上がりをみせ両端との比高差は約5～60cmである。石は集石遺構1とほぼ同様であるがとくに大きな石は確認できず東側ほど小さいものがしめる。出土遺物には土器及び石器があり、土器は時期幅がみられる。土器の出土状況もそうじて破片であるが僅かに完形に復元されるものもある。

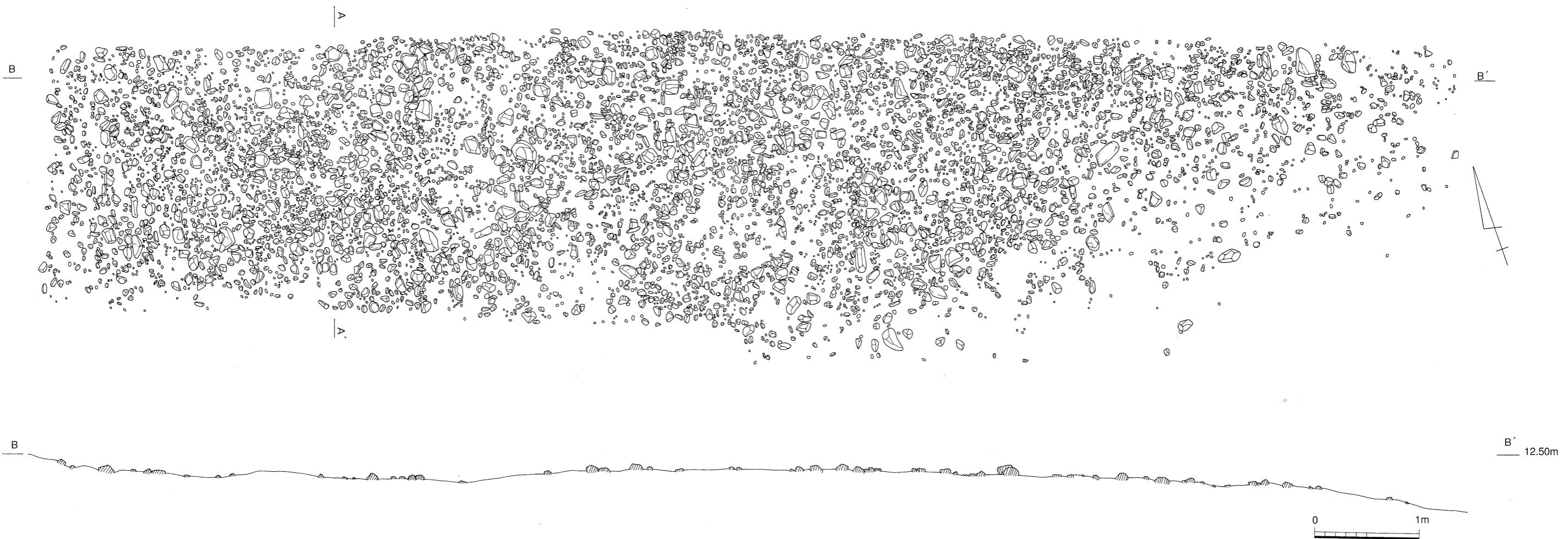
60～86は底部である。64は外底部にヘラミガキをほどこし、70～72は上げ底状を呈する。87・88は底部穿孔土器で、88は狭小な底部から外方に開き体部上半で直立し、口縁端部は水平に裁断したようにおわる。外面全体にはタタキが内面にはヘラケズリ及び口縁内面にはユビオサエが顕著である。89～101は壺で89～92は短い頸部から口縁部が緩やかにひらくもので全体に弧状を呈する。94は直立の頸部から口縁部が短く外反する。95は筒型の頸部から口縁部が斜め上方にひらき、端部をやや下方に引き出す。96・97は壺とした。短い口頸部が体部からつよく折りひらく、端部を拡張させて凹線文をほどこしている。98は緩やかに外反する口頸部で端部は垂下させている。99は体部片で櫛描直線文の上下に格子文を



第31図 SX01 検出状況図



第32図 SX02 検出状況図



第33図 SX03 検出状況図

配する。100は短いラッパ状にひらく口縁部外面には刻目突帯を2条付す。端部は内側に拡張させる。101は口縁部が水平にひらくもので、端部は上下に拡張し外面には凹線文と刻目文をほどこす。また、内面には半截原体による格子文をめぐらす。102～118は甕で体部があまりつよく張り出さず口径程度で、口縁部は長くなく直線的なものが多くみられる。117・118は体部がやや直線的に張り出し口縁部は短く折り返す。端部は上方に摘み上げる。外面ハケ、内面ヘラケズリが体部上半から頸部付近に及ぶ。119は鉢で体部は球状で張り出さず口縁部は短い。120は小型の鉢で体部は直線的に外上方にのびる。121は高壊脚部で円形透かしを5孔穿つ。126はサヌカイト製の石鎌、127は結晶片岩である。時期については弥生時代中期後半の土器も含め集石遺構1と同様とおもわれる。

2. II区

II区は東西約24～30mの調査区で地表から約180cmほど掘り下げ、古代～中世と弥生時代の遺構面2面を確認した。古代～中世とする上位の第1遺構面は耕作土下淡黄色土の直下にて確認され東側が低くなっている。調査区壁面でみると地山となるのは西端よりでは淡黄色土直下に灰黄色土が確認されるが、東に向かって傾斜していき淡黄色土との間に灰白色土をはさむ。水田化にともない上部を削平されたようである。遺構は灰白色土から掘り込むが調査時には灰白色土にて遺構を明確に検出しきれず、地表から約5～60cmほど下げた灰黄色土上面にて確認した。弥生時代とする下位の第2遺構面はだいたい地表下110cmほどにあたる。東半では浅黄色土をベースとするが浅黄色土は中ほどから西にかけて褐灰色砂礫土に置きかわるようにしづみこむ。

第1遺構面

検出された遺構は土坑・溝状遺構・ピットなどで遺構密度は低く、全形がわかるものはなお僅かである。土坑1（SK01）は平面長方形でやや隅丸を呈する。検出面で長径165cm、短径105cm、深さ25cmをはかり主軸は北西～南東にとる。遺物は出土していない。土坑2（SK02）は平面円形で南北側に段を有する。検出面での長径108cm、短径95cm、深さ約40cmを測る。遺物は出土していない。第1遺構面出土遺物128～132の中で遺構にともなうのは、土坑3（SK03）出土の131のみである。土坑3はそのほとんどが調査区外となり全形は不明である。131は須恵器高台付杯で底径8.4cmをはかる。体部は直立にちかく外底部にはヘラ切り痕を残す。時期は8世紀半ば頃であろう。その他128・129は土師器小皿と杯、130は東播系須恵器鉢、132は管状土錘である。

第2遺構面

検出された遺構は集石遺構3（SX03）1基のみである。集石遺構3の平面形は不明であるが、検出された規模は調査区西端から東へ北壁において約13m、南壁で約9mあり東端はやや弧状をなす。ベースとなる褐灰色砂礫土上位に石と青灰色土とで形成され、検出面では西端が高く海拔約12.5mを測り東端は40cm低くなる。縁辺部は10～15cmほどだが西端から3mにかけて盛り上がりをみせ、西壁直下において約40cmほどである。主な出土遺物は133～138の土器である。133は甕で口縁部は小さく折り返す程度である。内面頸部直下までヘラケズリがおよぶ。134も甕で頸部から水平に口縁部が屈曲し端部を摘

み上げる。135～137は壺で頸部から口縁部が水平気味に折り開き、内面に格子文をほどこすものである。端部外面は135が凹線文に棒状浮文を付すが他はナデのみである。138は高坏脚端部で、端部外面に斜格子文をほどこし小円孔の透かしを穿つ。時期については133から弥生時代後期前半頃に下るものとおもわれる。

3. III区

III区は東西約45mの調査区で地表から約200cmほど掘り下げ、II区と同じく古代～中世と弥生時代の遺構面2面を確認した。上位の第1遺構面は床土直下の褐灰色土上面にて確認される。海拔高約12.7～13mに位置し東側ほど低くなっている。弥生時代とする下位の第2遺構面はだいたい地表下110cmほど、海拔高約12m前後にあたる灰黄色土上面にて遺構を確認した。第2遺構面ベース土の下は砂層や砂礫層の互層でかなり層界が乱高下している。III区はほぼII区と同一遺構面を有するものである。

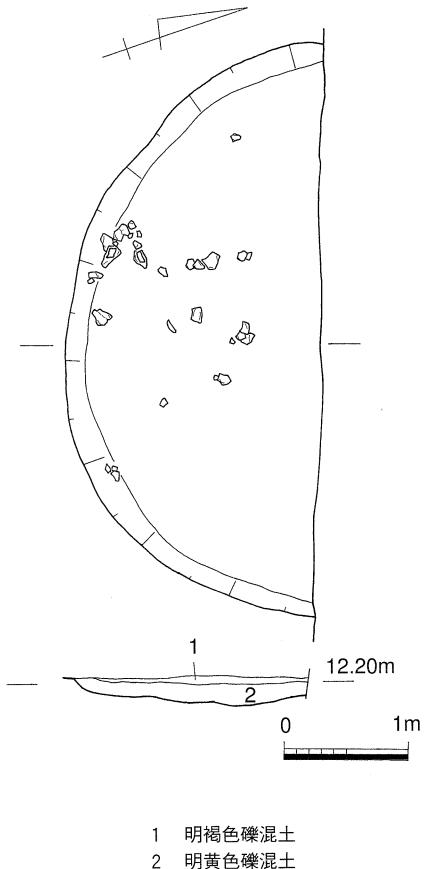
第1遺構面

確認される遺構は土坑にピット・溝状遺構が僅かである。土坑は4基ばかり検出されているが、これまで同様に全形のわかるものは2基のみである。検出状況からは東西2つの小単位にまとめられるが、東側3基でも主軸方向が異なる。土坑は平面形がII区のもとの同じ長方形で、土坑1（SK01）は検出面での長径202cm、短径113cm、深さ約20cmを測る。土坑3（SK03）は長径170cm、短径96cm、深さ約25cmを測る。主軸は土坑1のみ北西—南東にとり他3基は直交するように北東—南西にとる。時期については各土坑を含め遺構から遺物は出土しなかったが、II区とほぼ同様と考える。

第2遺構面

検出された遺構は土坑・ピットなどであるが、土坑においてはすべて壁際の部分的な検出にとどまり全容が判じ得ないことから、一部に住居跡を含むかもしれないがここでは土坑として取り扱う。土坑5（SK05）は調査区東端から西5mに位置するもので、およそ半分ほどが検出された。検出面での平面形は円形、壁下での東西幅は450cm、深さ約20cmを測る。住居跡と考えられたが底面において中央土坑や柱穴などを確認できなかった。

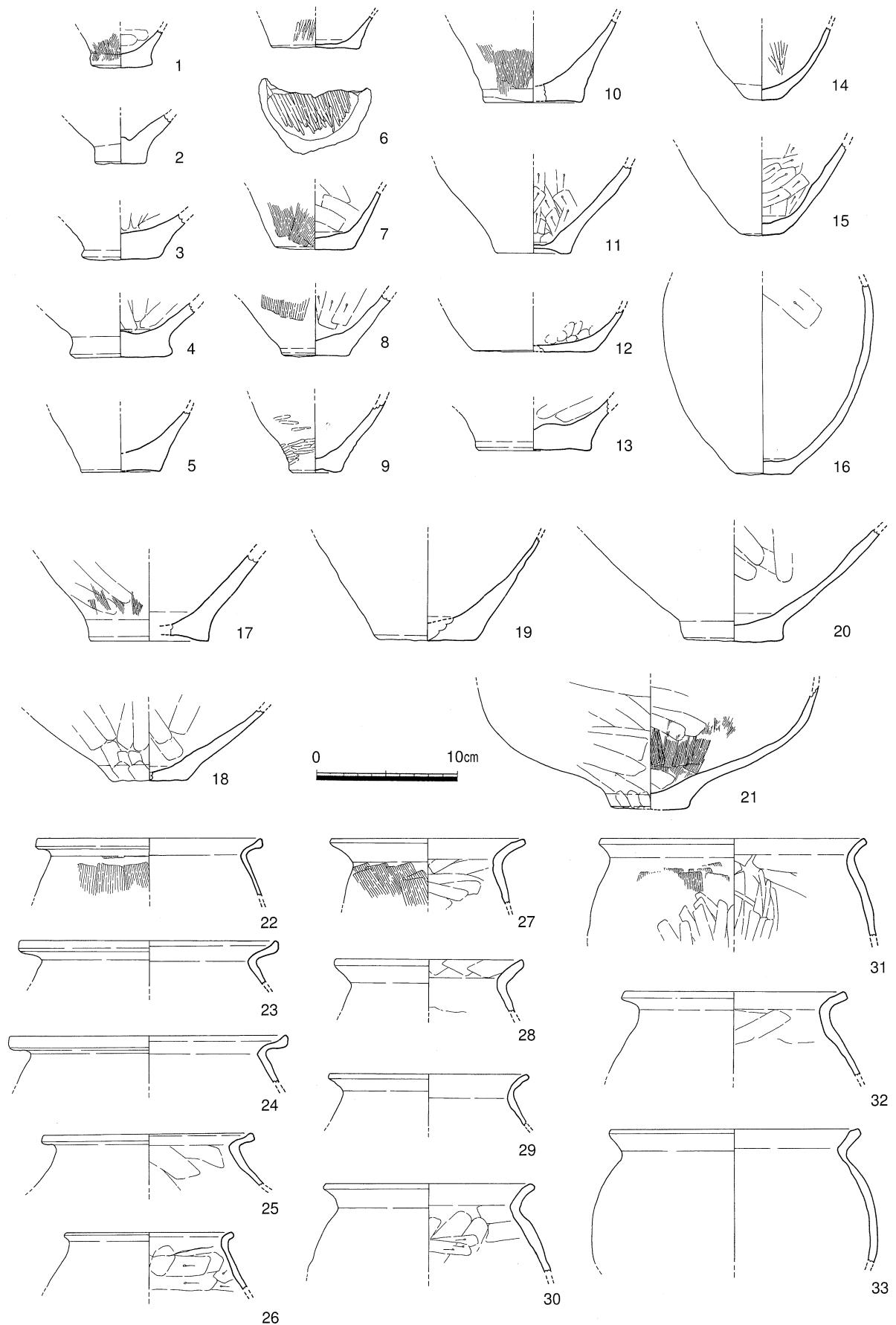
底面からは139～143のような土器や149の石器などの遺物が出土している。139・140は同一個体とおもわれる甕で、口縁部は頸部から鋭く屈曲し端部は上方に摘み上げる。外面上に凹線文はみられない。体部は最大径あたりから底部に



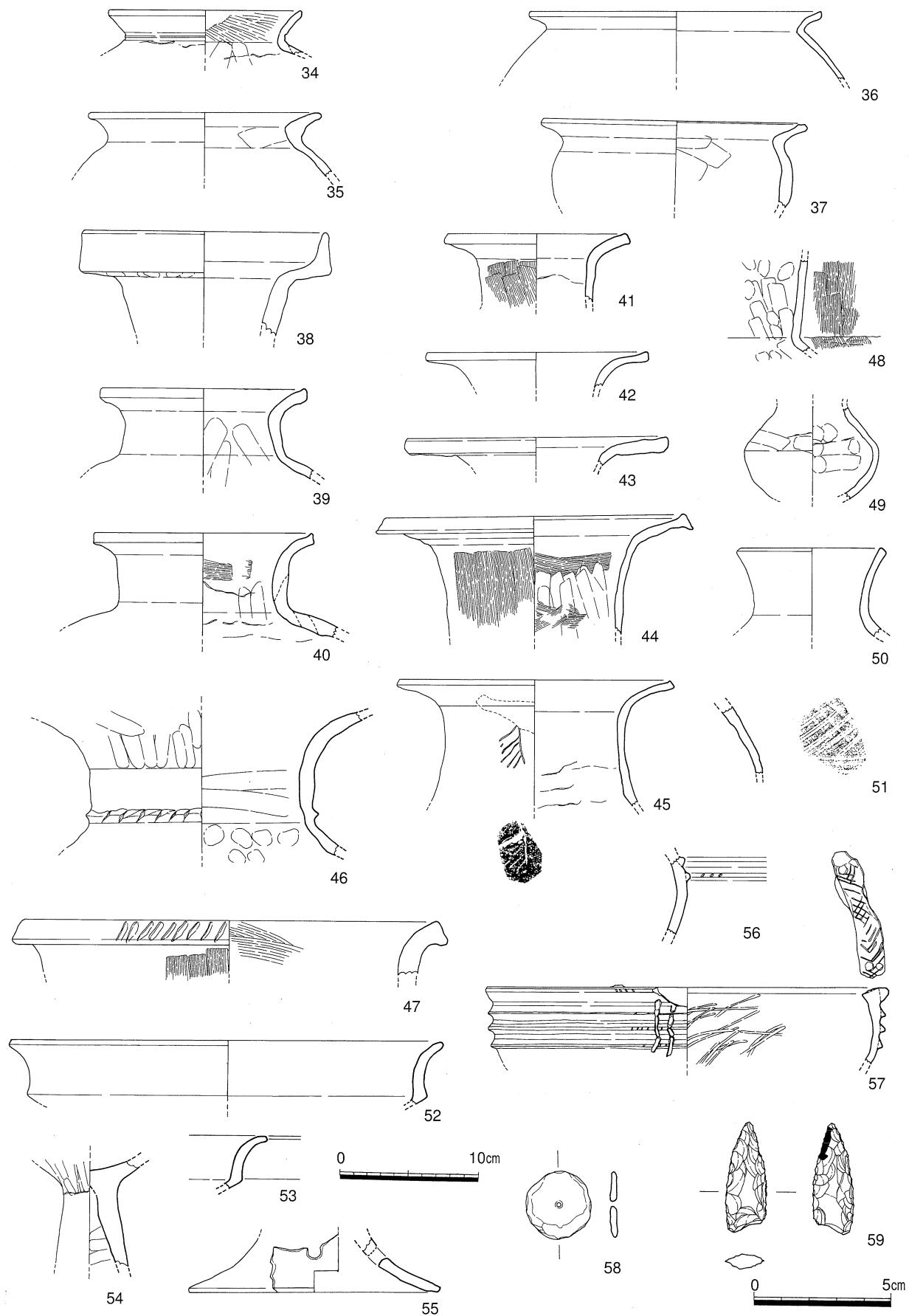
第34図 III区第2遺構面SK-05平・断面図

むけて直線的にすぼまっていく。底部から体部下半外面には縦ヘラミガキを密に、内面にはヘラケズリをほどこす。141～143も甕で口縁部が頸部からやや水平に屈曲し、端部は同様に摘み上げる。143のみ端部外面に凹線文がみられる。149はサヌカイト製の石包丁であろう。

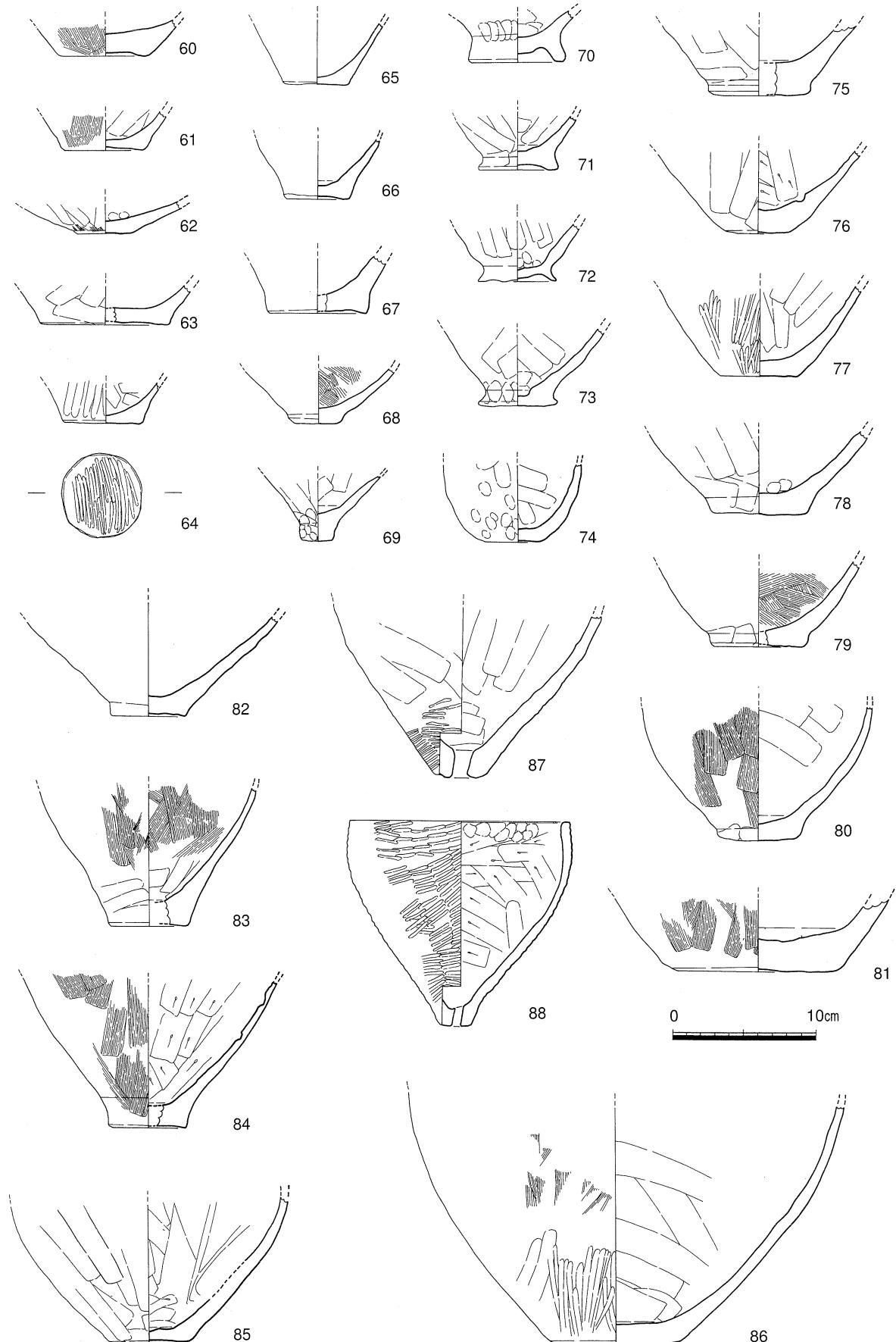
土坑6（SK06）はSK05の西約3mにあり、平面隅丸やや隅丸の長方形を呈する。東西幅約350cm、深さ約15cmである。出土遺物は細片ばかりで図示できない。土坑10（SK10）は調査区西端から東13mに位置し、平面方形を呈しほぼ1辺のみ検出である。東西幅約325cm、深さ約10cmである。遺物は144の鉢口縁部片があり、口縁端部は平坦でヨコナデによって内外に拡張している。その他遺構にともなう遺物で図示できるピット11から出土した145の底部であるが、外面中央から焼成後穿孔による未貫通孔がのこる。ほか、146・147・148は遺構面精査時の出土遺物である。時期については土坑5などの主だった遺構は出土土器から弥生時代中期中葉～後葉頃のものと考えられるが、その他一部の遺構出土土器細片の中にはやや新しいものも含まれている。このことから第2遺構面は弥生時代中期後半から後期前半頃としておく。



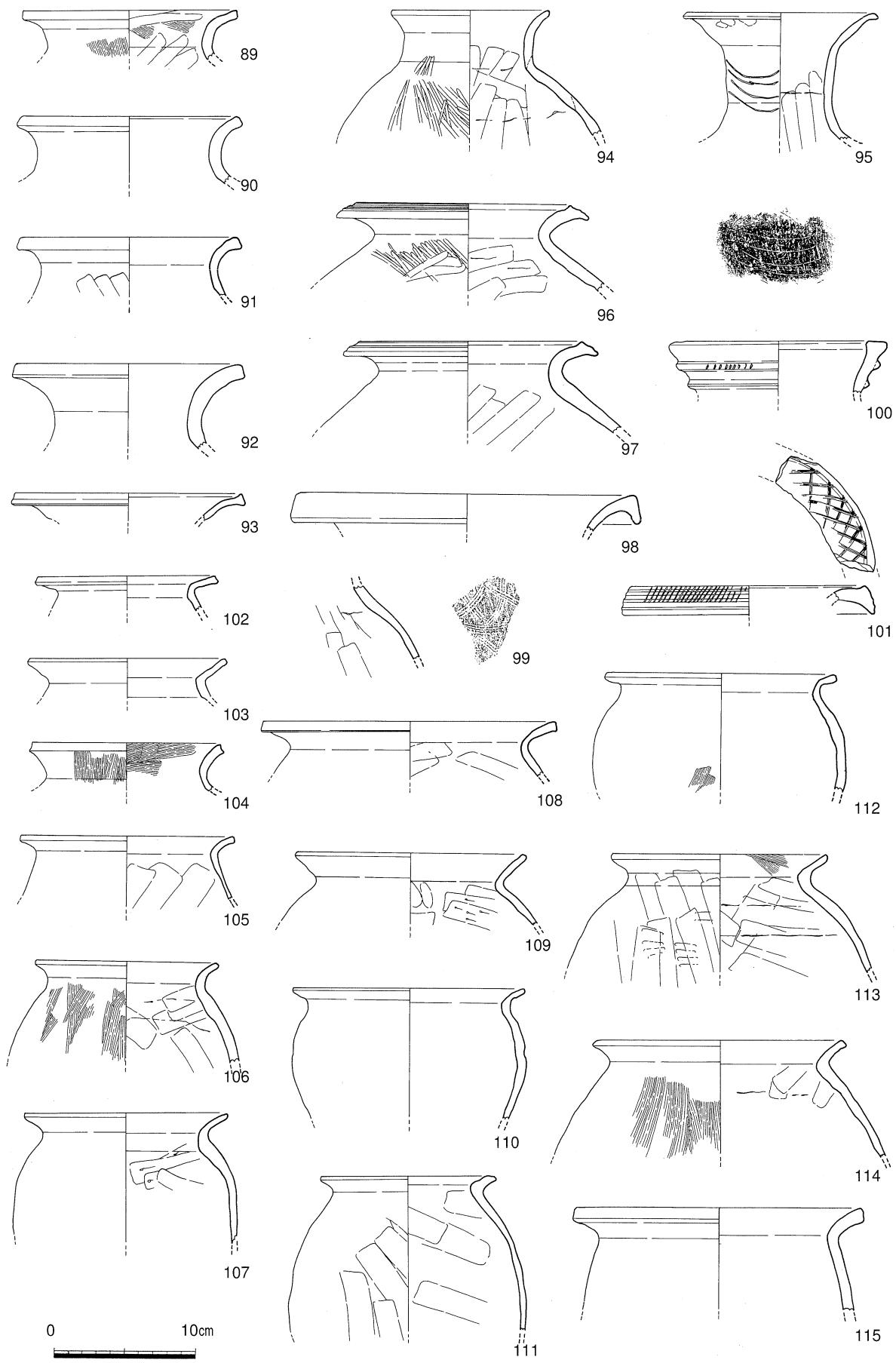
第35図 出土遺物実測図 (1) SX-01



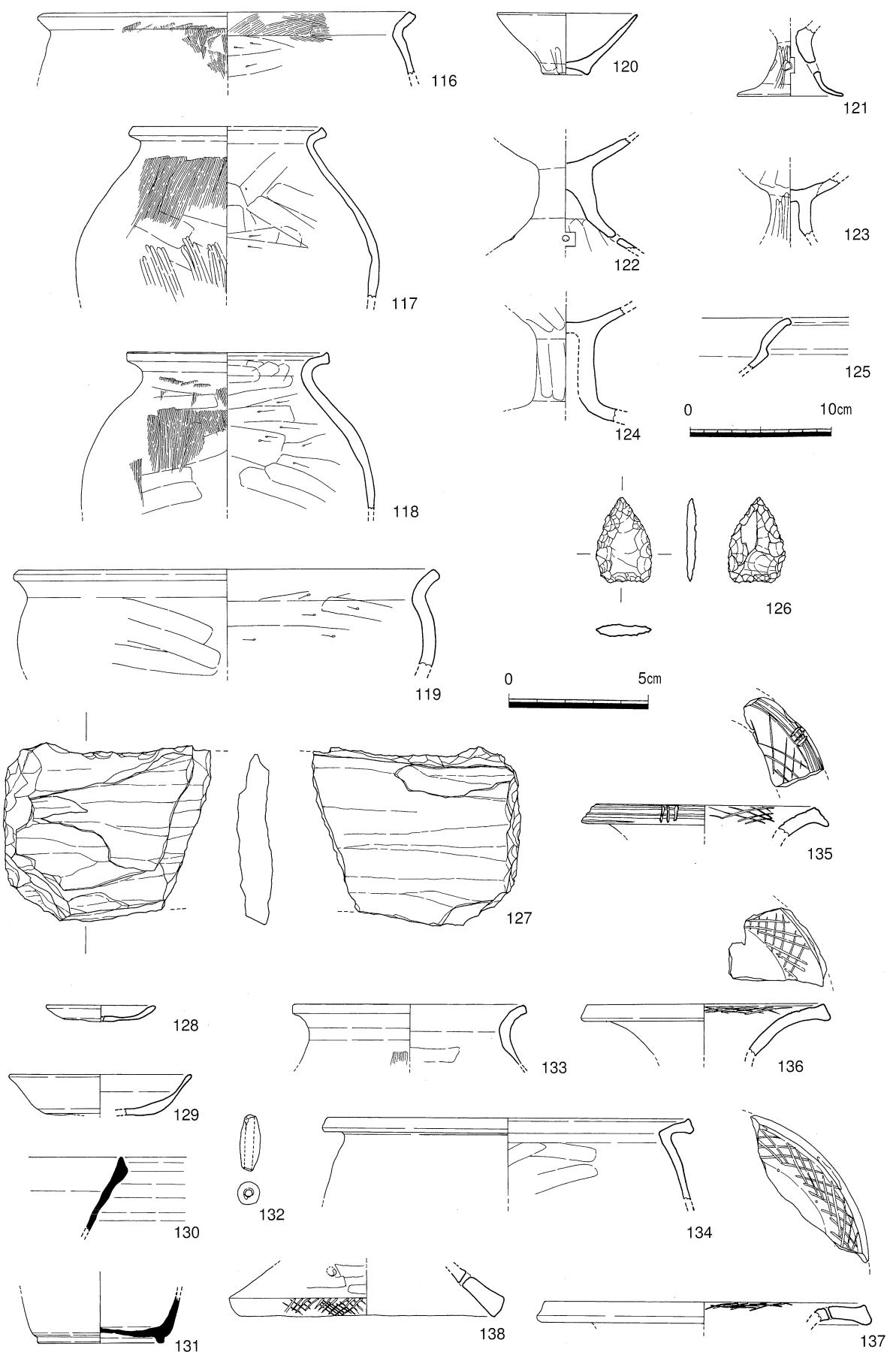
第36図 出土遺物実測図 (2) SX-01



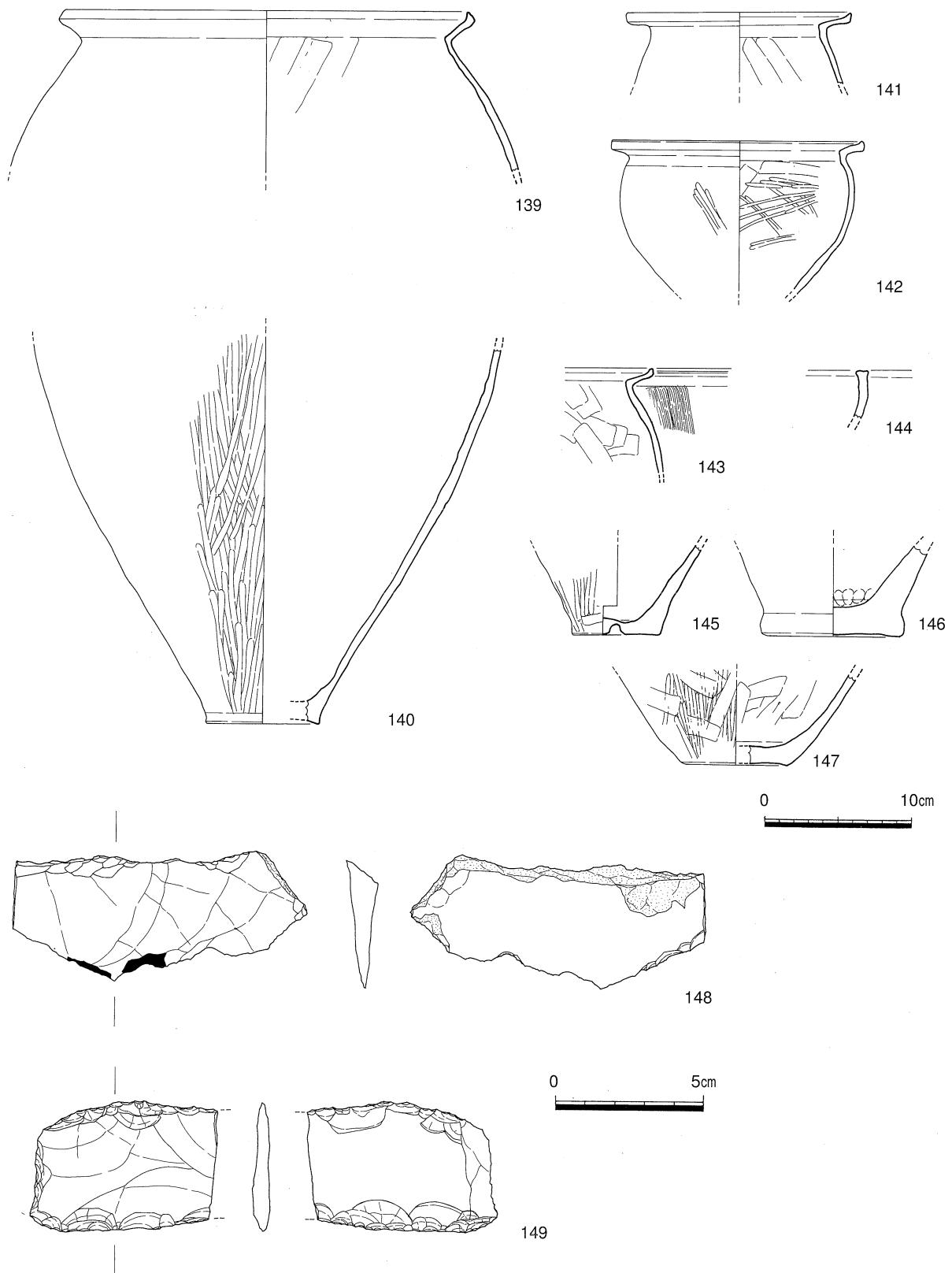
第37図 出土遺物実測図 (3) SX-02



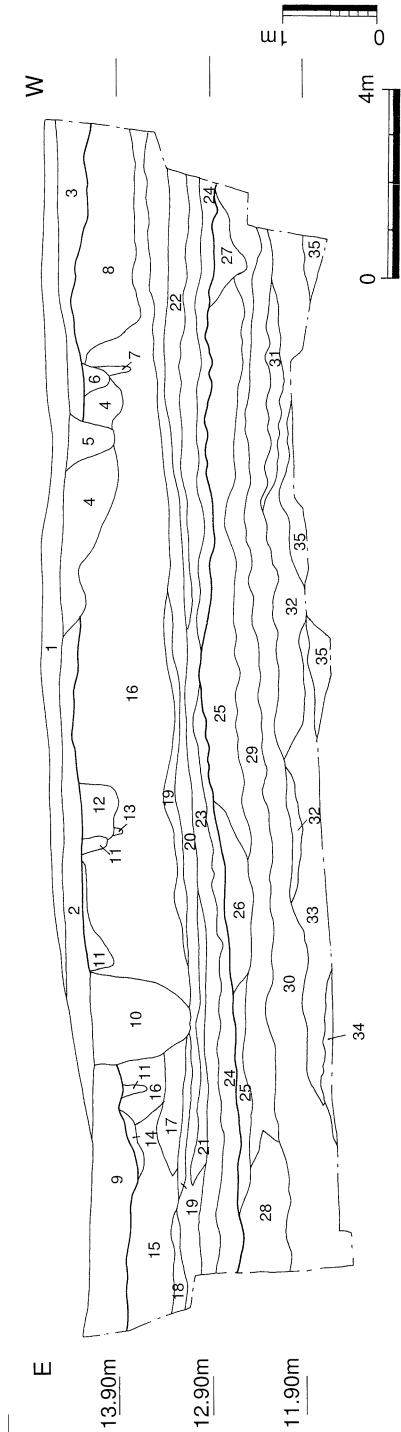
第38図 出土遺物実測図 (4) SX-02



第39図 出土遺物実測図 (5) SX-02 · 03ほか

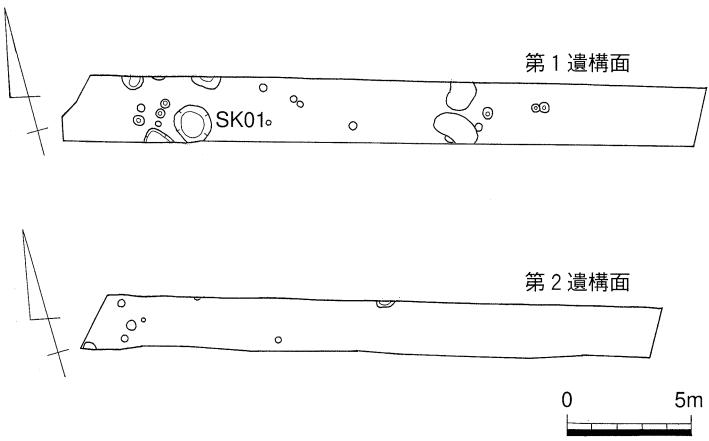


第40図 出土遺物実測図（6）Ⅲ区第2遺構面



- | | | | | | |
|------------|--------------|---------------|--------------|------------|---------------|
| 1 褐色土 | 7 にぶい黄褐色砂礫質土 | 13 にぶい褐色砂礫質土 | 19 暗灰黄色粘質シルト | 25 褐色粘質シルト | 31 オリーブ褐色砂礫質土 |
| 2 暗灰色土 | 8 褐色土 | 14 明灰黄色土 | 20 灰褐色シルト | 26 灰色砂混土 | 32 にぶい黄褐色砂質土 |
| 3 暗オリーブ褐色土 | 9 灰色土 | 15 灰黄褐色土 | 21 灰黄褐色砂質土 | 27 暗灰色砂混土 | 33 灰黄色砂礫質土 |
| 4 にぶい褐色土 | 10 オリーブ褐色土 | 16 にぶい黄橙色細鱗質土 | 22 黄褐色粘質シルト | 28 黄褐色シルト | 34 黄褐色シルト |
| 5 灰褐色砂礫質土 | 11 黒褐色土 | 17 明黄色礫質土 | 23 暗褐色粘質土 | 29 にぶい黄色土 | 35 明黄褐色砂礫質土 |
| 6 暗灰黄色土 | 12 橙色土 | 18 暗灰黄色土 | 24 灰褐色礫混土 | 30 黄褐色シルト | |

第41図 IV区南壁土層図



第42図 IV区遺構配置図

4. IV区

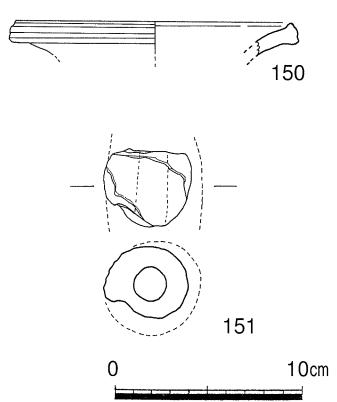
IV区は東西約23mの調査区で遺構面を2面確認した。南壁土層では上位の第1遺構面は現地表下約40～50cmほどで、家屋整地層下にある洪水礫混じり砂層上面にて検出された。この礫混じり砂層は調査区中ほどにて層厚100cmを測り、東西端にかけて傾斜しつつ減していく。これより下約30～40cmはシルトや粘質土が累積している。さらに遺物包含層である褐灰色粘質土層において第2遺構面とした褐色シルト層が形成されている。遺構面上面は海拔高約12.9m前後である。

第1遺構面

近世の遺構面で家屋に伴う整地によって一部削平を受け、近現代の掘り込みもみられた。検出された遺構は土坑・ピットなどが少量で遺物も同じである。土坑1（SK01）は平面がやや不整な円形で長径約150cm、深さ約35cmを測る。礫多数とともに瓦片や土器片が出土している。また遺構面精査時に寛永通宝が1枚のみ出土した。

第2遺構面

検出された遺構は少なくピット数個のみであるが、南壁土層では土坑状の落ちがみられる。ピットは西端付近にまとまりをみせるが、それでも全体からすれば疎といえる。遺構にともなう遺物としてはピットの一つから土器細片が出土するにとどまる。図示したものは遺構にはともなわず、150は包含層出土で壺口縁部である。端部を小さく上下に拡張し外面に凹線文をほどこす。151は大型の管状土錐で剥落が著しい。南壁直下サブトレーナー掘削中に第2遺構面ベース層より下位の砂層より出土したものである。時期については判然としないがおおむね弥生時代後期前半頃としておく。



第43図 IV区出土遺物実測図

第4節　まとめ

今回の調査では個々の遺構の部分的な検出にとどまることになってしまい、全体について充分な確認が行えなかったが、ここでは若干ではあるが弥生時代についてのまとめとする。まず集落としてみると調査区第Ⅱ・Ⅲ区が居住域と考えられる。安定した粘質土をベース土とした弥生時代中期後半以降のものであるが、微視的にはⅢ区東端及びⅡ区西半にみられる砂礫層間の東西約50mの幅に限られるものであろう。一方、Ⅰ区からⅣ区にかけては縁辺域に相当するとおもわれ、とくにⅣ区西側は湊川氾濫原であり、Ⅳ区からⅠ区西端にかけては土層からもその影響を大きく受けていることがうかがえる。次に集石遺構についてであるが、検出した3基の集石遺構の性格について断定できるだけの知見を得るにはいたらなかった。(財)香川県埋蔵文化財調査センターによって調査された30基近くの集石遺構についてもすべてが墓とされるものではなく、時期や形態、遺物や石などの割合・出土状況などによっていくつかの性格の可能性が指摘されている。今回の3基については弥生時代中期後半の土器を含むがおおむね弥生時代後期を下限とし、土器はほとんどが破片で出土したものである。僅かではあるが石鏃など土器以外の遺物も含まれる。石と土で構成され盛り上がりは集石遺構2においてやや指摘できる。集石遺構1にはとくに大きな石がみられる。今後はどのような要素でもってその性格の相違が明確に弁別されるか、これまでの類例を含め検討されべきものである。

参考文献

- 「成重遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9～11年度』 1998～2000 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 薦田耕作・渡部明夫『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 矢ノ塚遺跡』 1987 香川県教育委員会ほか
- 大久保徹也・森格也『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』 1995 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ 下川津遺跡』 1990 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

第4章 横端墳丘墓

第1節 はじめに

横端墳丘墓は白鳥町白鳥字寺前に所在する。第1章において周辺の状況について述べたが、ここでは所在する丘陵周辺に限って記す。横端墳丘墓は南背にそびえる虎丸山系から湊川西岸を北東に延びる丘陵北端にあたる山麓地に所在する。現状では東西を原間池と湊川によって狭窄されるが、原間池は江戸時代前期に小溜池を合改築したもので、旧地形として北側秋葉山系から派生する丘陵南端との間には谷



- | | | | |
|--------------|----------|-----------|-----------|
| 1 (仮) 神越 6号墳 | 5 横端墳丘墓 | 9 横端 3号墳 | 13 原間 2号墳 |
| 2 (仮) 神越 5号墳 | 6 神越 1号墳 | 10 神越遺跡 | 14 原間 5号墳 |
| 3 (仮) 神越 4号墳 | 7 神越 2号墳 | 11 横端 1号墳 | 15 原間 6号墳 |
| 4 横端北遺跡 | 8 横端遺跡 | 12 横端 2号墳 | |

第44図 横端墳丘墓周囲遺跡位置図

地形が復元される。上空からみた丘陵はV字状を呈し、それぞれ先端と交点に3つの頂部がみられ細い尾根によってつながっている。古墳や墳墓群などはこれら頂部とそれを中心とする斜面に形成されている。まず(財)香川県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査がおこなわれた南半では、調査範囲外ではあるが南東頂部において神越1号墳（古墳時代中期）が知られ、この南斜面には神越2号墳（古墳時代後期）が所在する。また、同斜面および四国横断自動車道を挟んだ丘陵北斜面にかけてが樋端遺跡で、弥生時代後期～終末期の計50基をこえる土壙墓・土器棺墓からなる墳墓群である。また、その南端ピークには神越3号墳（古墳時代中期）が所在する。

一方、北東側はこれまで不明であったが、近年の分布調査によって頂部および北西に派生する尾根先端付近には古墳（前者は推定竪穴系埋葬施設・後者は横穴式石室）が所在し、北東斜面には少ないながらも弥生時代後期段階とおもわれる土壙墓群や土器棺墓などが数基ほど確認された。また、北に向かって原間池堤防北岸にも横穴式石室墳が1基みられる。なお、遺構の分布からは北東頂部から南東頂部にかけての湊川沿いにまとまるようであるが、今回調査の樋端墳丘墓が北西頂部に位置するように丘陵全体が墓域として選択され、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて墳墓が営まれたものである。隣接する古墳（群）などとあわせ考えると、個々の内容にとどまらずより広域的通時的な動態をうかがい知ることができるものである。

第2節 経緯と経過

今回の調査は民間土地造成（地下げ）工事に際し発見された遺跡（墳丘墓）の、記録保存を目的とした発掘調査である。調査は2000（平成12）年12月に実施したもので以下調査日誌をもとに概略を記す。

2000（平成12）年12月20日 すでに南側より工事が始まっている。残る工事範囲内の埋蔵文化財有無確認のため、頂部・北側稜線に重機によるトレーニングを設定する。この結果、頂部において竪穴式石室を検出する。

12月21日～22日 白鳥町教育委員会および地権者・事業者と協議。事業内容・進捗状況から現状での保存は困難なことから記録保存とし、早急に実施することとする。

12月25日 発掘調査を開始する。竪穴式石室上面精査および表土剥ぎ。墳丘にサブトレーニングを設定。26日に竪穴式石室上面礫堆を精査する。東側サブトレーニングにて土器棺墓を検出するとともに周溝を確認する。また、墳丘地形測量図作



第45図 調査区配置図

成にとりかかり、南西斜面において第2埋葬施設を確認する。新年になり豊穴式石槨掘下げ、床面状況確認。8日に床面地山検出、小口溝・鉄器を確認する。

2001（平成13）年1月12日～2月1日 豊穴式石槨側壁等測図・写真撮影。豊穴式石槨完掘。

2月2日～2月8日 現場撤収作業。調査終了。

第3節 調査の結果

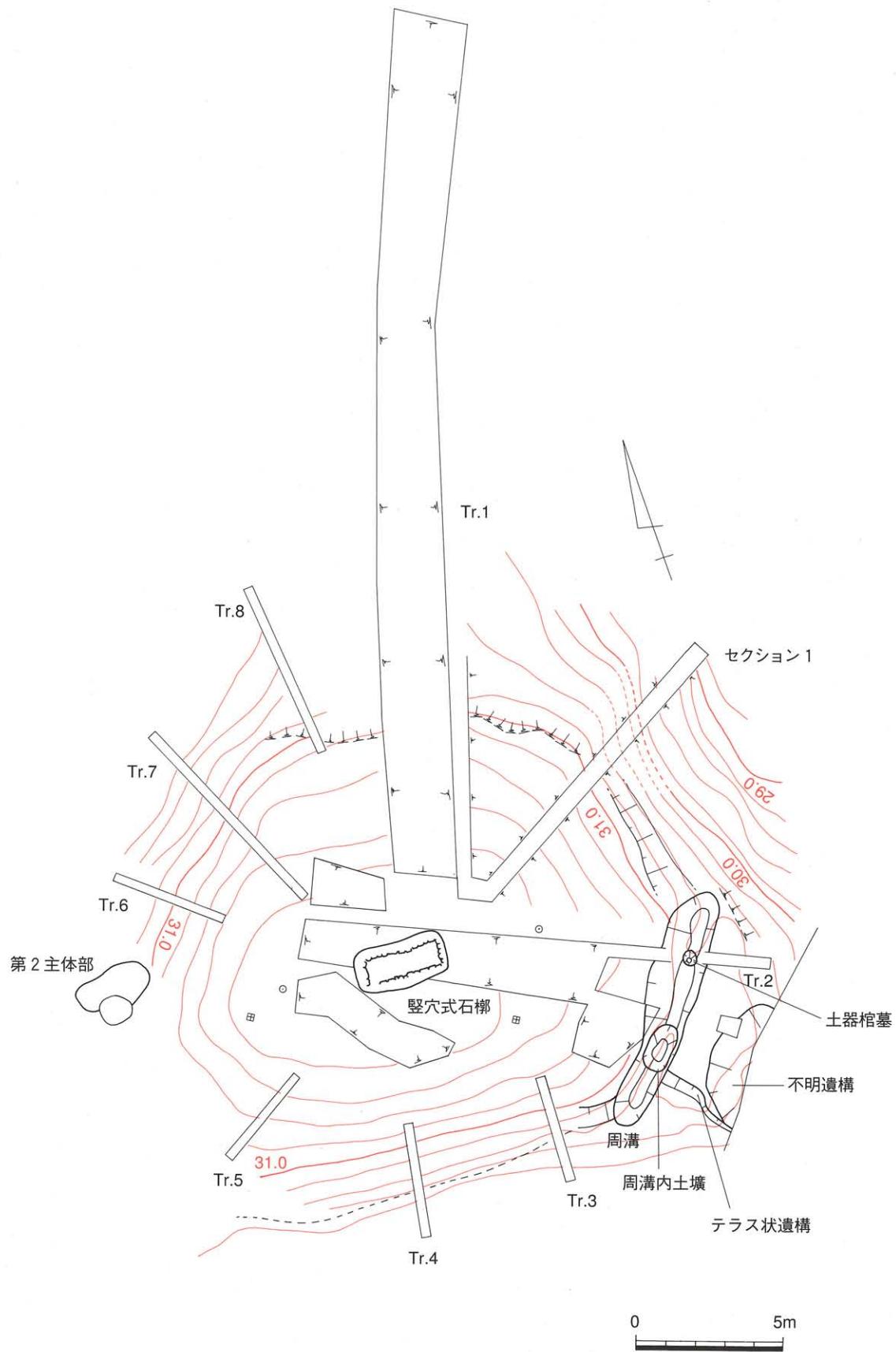
この樋端墳丘墓は第1節に記したような立地にある。頂部は標高約32mを測り、ややなだらかな平坦な面が広がる。頂部からは原間池汀線に向かって稜線が北と南西に向かって傾斜している。東は南東頂部につづく細い鞍部で谷地形が入り込む。丘陵南背はこの谷地形の右岸にあたるためかなり急な傾斜面となっており、北側は開墾による段地掘削の痕跡が認められる。また、調査開始時にはすでに南および西側より工事が着手されており、南西稜線のほとんどが削られさらに頂部に迫ってくる状況であった。このため調査時も西側斜面は立ち入りが制限されるものであった。

1. 墳丘

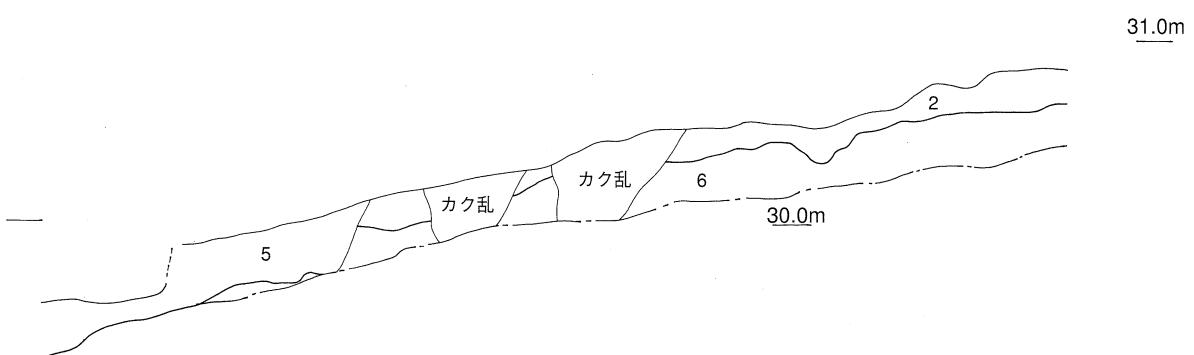
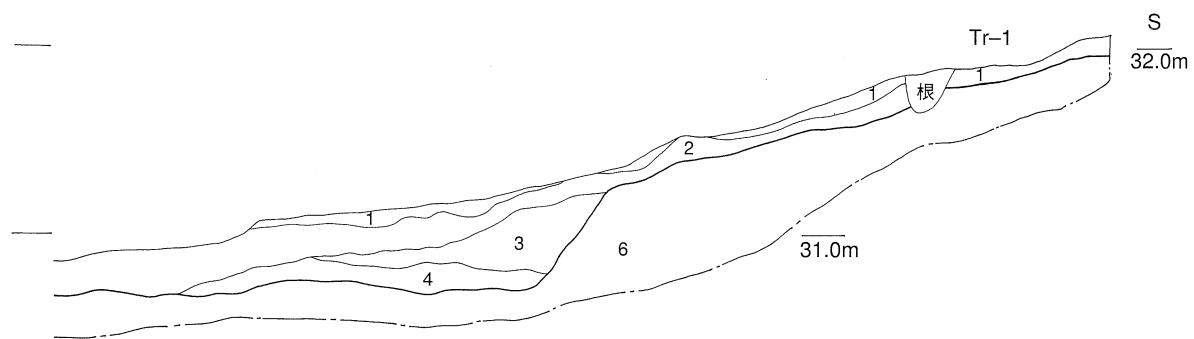
本墳丘墓の墳丘は丘陵頂部の自然地形を最大限に利用することによって築造されたものとおもわれる。したがって墳丘は周囲との区画を主とする周溝の掘削や地山を削り出した段によって表示されるもので、斜面地山面は若干の凸凹を残し墳丘築造のための大きな地山加工や整地・盛土はみられず、おおむね2次的流失土が薄く覆い、傾斜がきついところは表土直下が地山となっている。東につづく鞍部にはこれを断ち切るように掘削された周溝が位置する。墳丘の東から南東側にかけて幅約1.0～1.8mの溝が長さ約8.2mほど直線的に掘り込まれている。この周溝の南北両端は墳丘を回り込みますにそのまま収束するが墳裾の地山整形がつづいていく。だいたい中ほどの横断面は逆台形状を呈し、底面は標高約30.7mで墳丘側掘方より約55cm低く立ち上がりは約30°を測る。墳丘頂部とは約130cmくらいの比高差がある。周溝内の埋土はおおよそ2層に分けられ、上層からは礫のほかに土器片が少量出土している。なお、この周溝は周辺埋葬の場としても利用されており下層堆積後に土器棺墓が、また構築時期は不明だが土壙墓が1基ずつ設けられている。その配置は周溝を等分するものと意識的なものと考えられる。

墳丘では地山整形による段がセクション1およびトレンチ3・4の土層断面においてみられ、周溝北端からセクション1までの北東側斜面と周溝南端からトレンチ3まではとくに明確に段を認めることができた。他方、北稜線と南西稜線およびこの間の斜面においては開墾や工事の影響もあり、地山整形や区画施設などは確認されなかつたが、埋葬施設である第2主体部がその位置関係から墳丘端と推定される。なお、トレンチ7の土層断面において浅黄橙色粘質土がみられたが明確な盛土であるとの判断はつかなかった。墳丘の形状は確認された周溝や整形した段を墳裾とし推定復元すると、傾斜の急な南斜面などはやや直線的で墳丘北側などはやや崩れをみせるが不整な橢円形とおもわれ、その規模は直径16～18m前後である。墳裾の標高はだいたい31mであるが南側斜面がやや低いため、平坦な墳頂部までの高さも南側墳裾からの約1.8mを最大とし、おおむね1mぐらい残すものである。

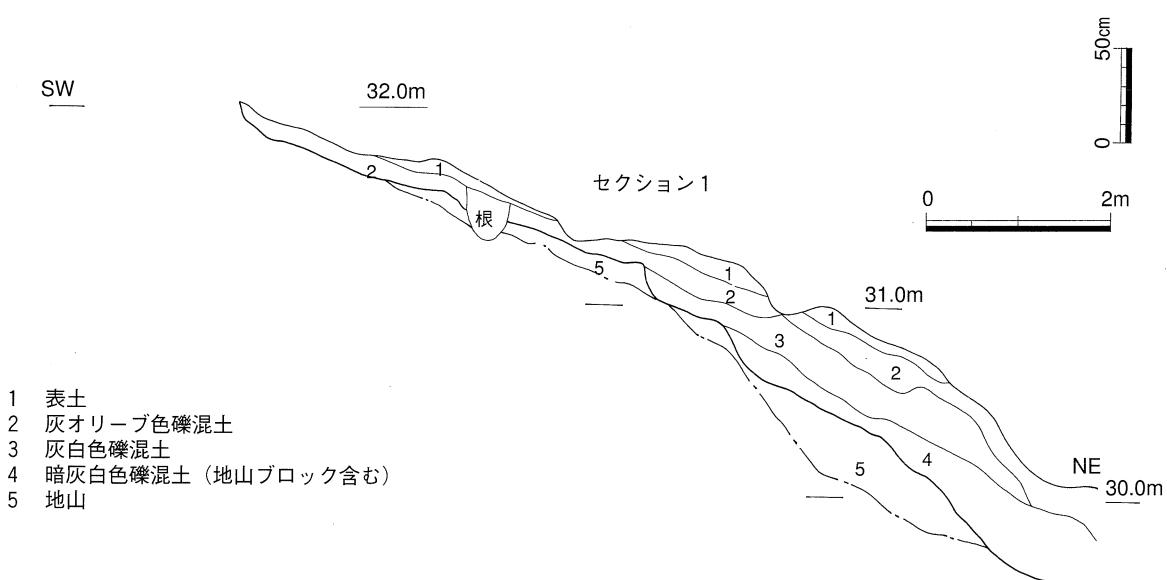
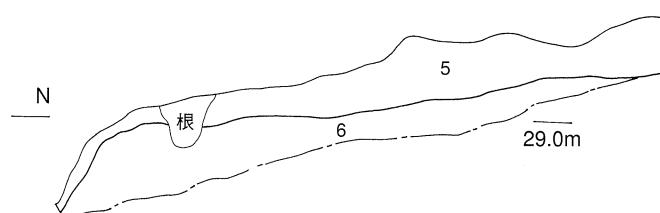
埋葬施設については一部ふれたが墳丘内に設けられたものは墳頂部のほぼ中心にあたる豊穴式石槨1



第46図 墳丘測量図（調査後）

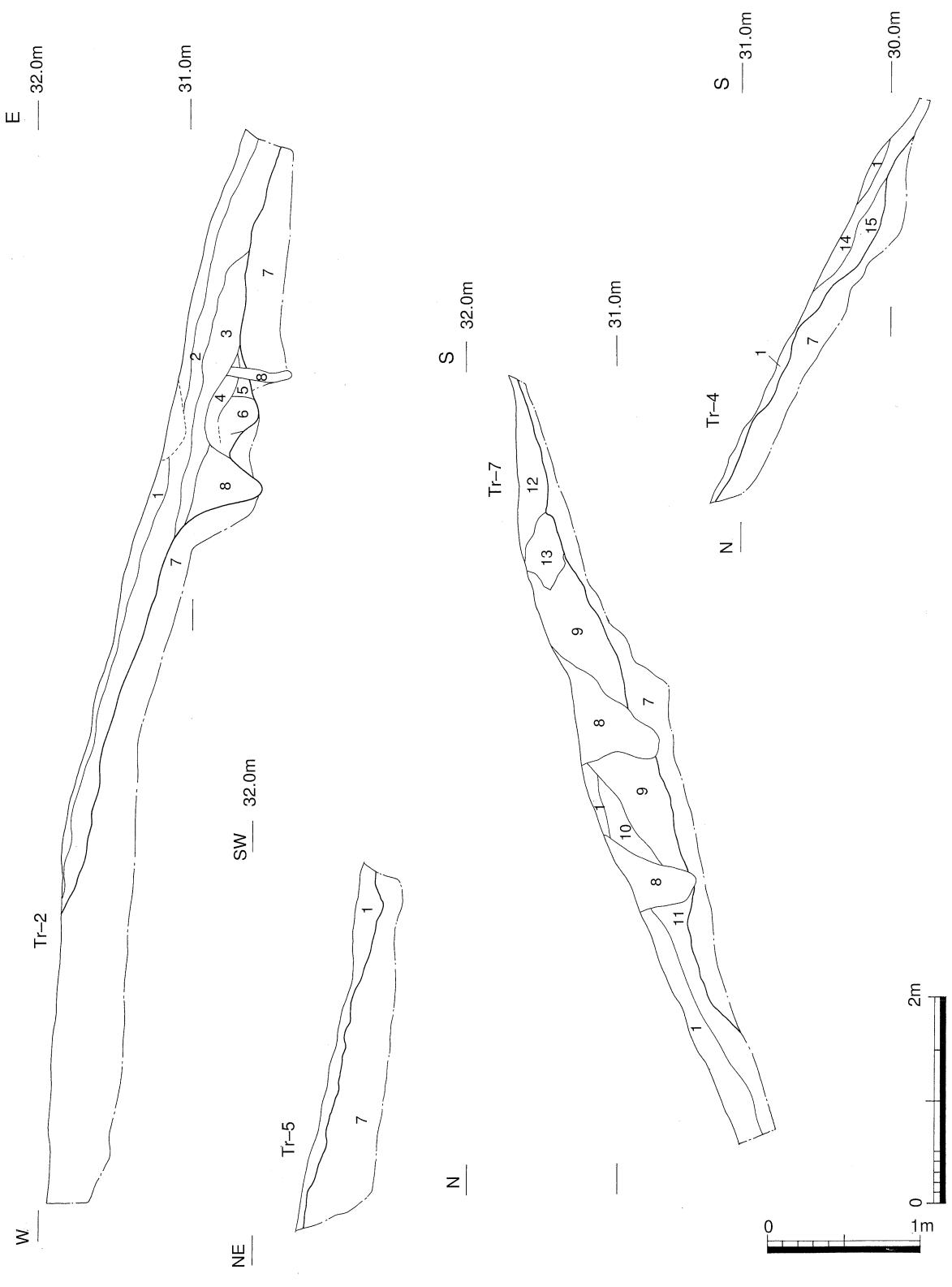


- 1 表土
2 黄灰色礫混土（しまらない）
3 暗黄灰色礫混土（地山ブロック含む）
4 灰白礫混土
5 にぶい黄色細礫混土（地山ブロック含む）
6 地山



- 1 表土
2 灰オリーブ色礫混土
3 灰白色礫混土
4 暗灰白色礫混土（地山ブロック含む）
5 地山

第47図 各トレーンチ土層断面図（1）



- | | | |
|---------------------|----------------|-----------------------|
| 1 表土 | 6 にぶい黄橙色砂礫混土 | 11 灰黄色粘質土 |
| 2 にぶい黄色細礫混土（川原石含む） | 7 地山 | 12 灰黄色土（バイラン土・カク乱） |
| 3 浅黄色土（土器片含む） | 8 根痕 | 12 花崗岩堅質土 |
| 4 灰白色土（土器片含む） | 9 浅黄橙色粘質土（しまる） | 13 明黄褐色土（地山ブロック含む） |
| 5 淡黄色細礫混土（明褐灰色土はいる） | 10 淡黄色土（しまる） | 14 浅黄色土（しまる・地山ブロック含む） |

第48図 各トレーンチ土層断面図 (2)

基のみである。これを取り囲んで南西側墳裾付近に第2主体部があり、ほか周溝内に土器棺墓と土壙墓が各1基所在しており埋葬施設は総計4基となる。

2. 埋葬施設

豊穴式石槨

墳丘頂部の中央付近にて確認された豊穴式石槨である。石槨は東側鞍部からつづく尾根筋に斜行するようにあり、主軸方位はN86°Wとほぼ東西方向を指示している。その規模は検出面で長さ約310cm以上、幅約155cmを測る。すでに盗掘を受け一部石材が抜き取られてはいたものの残存状況は良好とおもわれるが、試掘調査トレンチによって南東隅から北西隅にかけての以北を損壊させるに及んだ。とくに石槨壁体は東・北壁は基底石を含め2段を残すのみで、南壁の東よりは最上段を欠く。

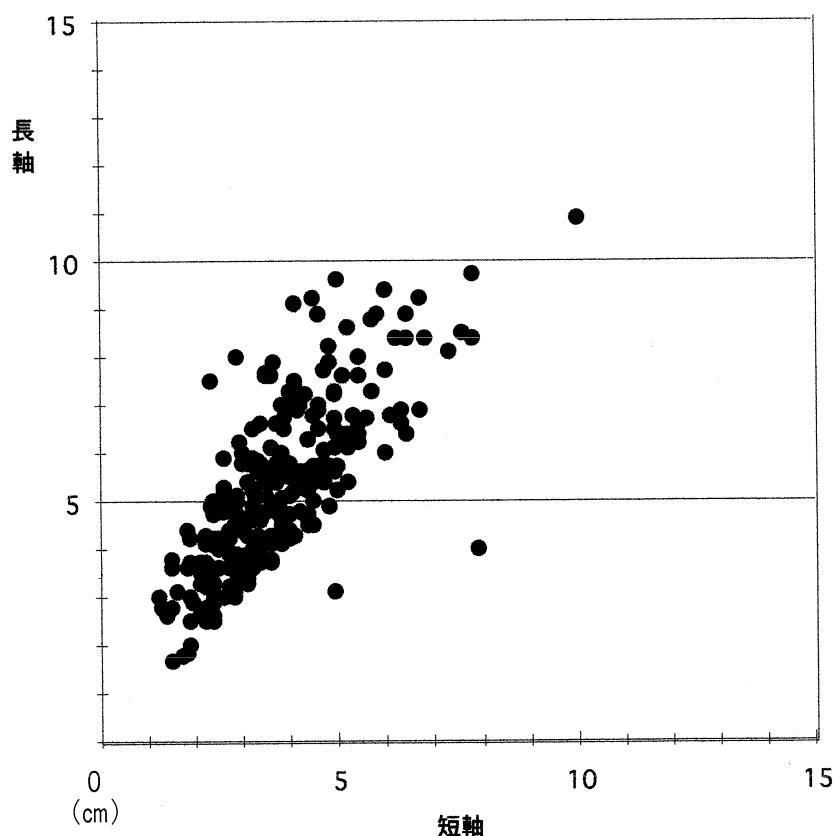
石槨上部の構造

石槨内には流入土が充满するとともに、丘陵頂部では踏査段階から表土をのぞいた状況で多数の礫がみとめられた。礫はとくに集積するでもなく頂部に広く散乱しているもので南側斜面に転落しているものもあった。図示したものは石槨上面精査後ものでおおむね墓壙内に及ぶものといえるが、これらの大部分もトレンチによるカク乱によって旧状を示すものは南西隅の一部にとどまるものである。検出面の高さは標高約32mで土層断面からみると埋土最上層、よくしまった粘質土である第2層に比較的まとまって含まれている。礫のほとんどが拳大かそれより一回り大きいぐらいの川原石の円礫である。また、カク乱範囲内より礫に混じって細頸壺が出土しているほか、後述するようこれら礫のなかには石杵が1点含まれていた。

確認される石槨内の流入土は南東隅にうがたれた石材盗掘坑埋土を除けば、礫を多く含む第2層をあわせ4層に分けられる。第3層は下層のくぼみを埋めるよう横断面凹状にあるもので、礫のいくつかはもっとも下位、標高約31.6mまで落ち込んでいる。棺床構造直上を覆うのは砂礫質土である。



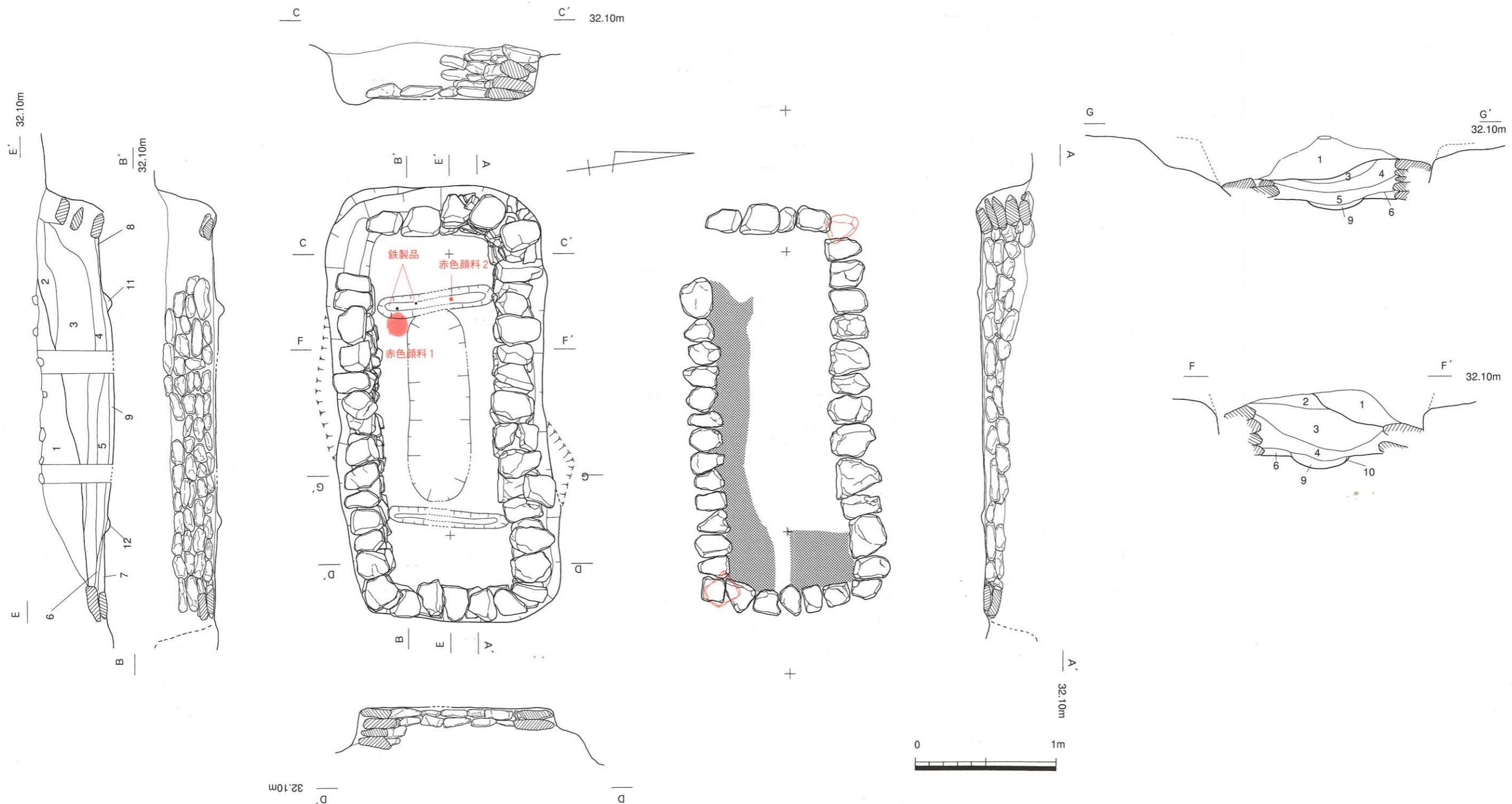
第49図 豊穴式石槨上面礫堆検出状況図



第50図 磯堆円礫法量グラフ

石櫛壁体の構造

石櫛の構築は先ず花崗岩質土の地山を墳頂部上面から掘り下げ、床面で長さ約288cm、幅130cm前後、深さは約45cm前後を測る四壁が逆台形状の墓壙を作成し、一部墓壙底石櫛壁体下を溝状に掘りくぼめたあと墓壙壁にそって石材を積み上げていく。このため石櫛も墓壙と同じく上方に向かって外開きする形態的特徴を有する。石櫛の規模は基底石内法で長さ約250cm、幅約80cm前後で高さは最も残っているところで4～5段あり約35～40cmで最高位は標高約31.9mを測る。用いられている石材は人頭大ほどの砂岩および花崗岩の川原石で、そのほとんどを砂岩でしめる。壁体積み方であるがおおむね小口積みで、壁体と墓壙壁との間に控え積みはもたないが北西隅にみられるように上面近くでは小礫を詰めている。個別の特徴としては基底石の平面配置をみると、北壁の石材はそうじて大きいものである。また、東側は三辺とも石材で連続しておりコの字状を呈するが、西北隅ではちょうどコーナーに配されていない。2段目の配置をみると西北と南東コーナーは斜めにまたいで懸架しているが、北東コーナーでは細長の石材を基底石と同様に配している。次に立面を観察可能な範囲でみると西北と南東コーナーはともに2段目よりカーブするように配している。また、南壁では残る基底石西から4石目の列は、同じくらいの幅の石材を5段重なるように配しており垂直方向に目地がとおる。また、これより東側の各段ごとにレベルが比較的揃うのに対し、西側では石材も積み方も乱雑になっている。とくに真横にある唯一縦位に置いた石材は、2・3段目の高さが揃うように隙間を埋めたものとおもわれる。これらの特徴は詳解できないが壁体構築に関する作業工程や単位を示していると考えられる。



- 1 暗黄色砂混粘質土（試掘トレンチによるカク乱・炭化物あり）
- 2 にぶい黄色土（しまる）
- 3 黄褐色細礫混土
- 4 灰オリーブ色細礫混シルト質土
- 5 灰黄色砂礫質土
- 6 灰白色粘質土（上面にて部分的に赤色顔料）
- 7 灰白色砂礫質土
- 8 淡黄色砂礫混土
- 9 浅黄色細礫混粘質土
- 10 浅黄色粘質土
- 11 浅黄色礫混粘質土
- 12 にぶい黄色礫混粘質土

第51図 積穴式石槻平面図・断面図・壁体図

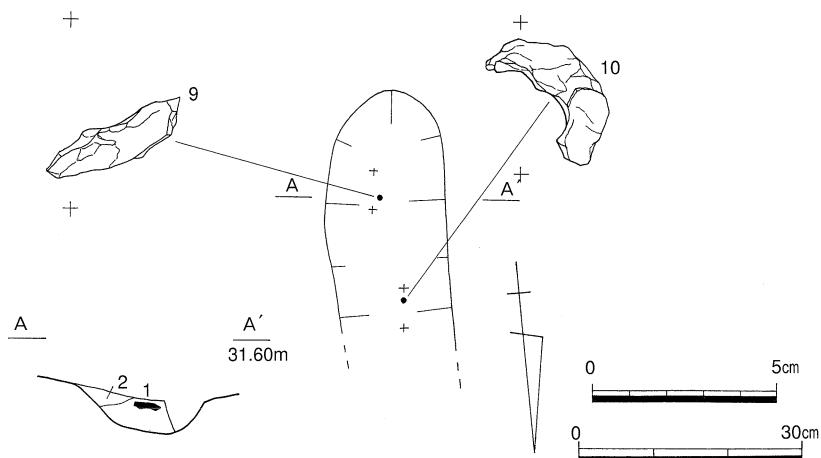
床面と木棺の構造

墓壙底は地山をおおむね31.55cm前後の高さで平坦面とし、石槨床面内法は上記したように長さ約250cm、幅約80cmである。石槨内床面の構造であるがまず中央には主軸にそって長さ約130cm、幅約40~45cm、深さは6~10cmほどの平面長楕円形（東側端部はやや細長）の掘り込みがみられる。また、この東西両端には南北方向に幅10cm前後、深さは東側が3~4cmで西側が約6~8cmとやや西側が深く低い溝が接するようにうがたれしており、西側が若干深くなっている。溝はほぼ基底石内法短軸でおさまるもので、墓壙外に延伸はしていない。つぎにこれらの周縁には地山基底面上から基底石をおおう程度に層厚3~8cmほどの灰白色粘質土が存在している。断面でみるとこの粘質土は壁体下部まで及ぶものではなく石槨内のみで、東縁部では砂礫質土上に薄くおかれている。この灰白色粘質土の平面分布は東・南側周縁だけであり、残る南西隅から北西隅さらに北側にかけては認められず調査前のカク乱の影響が考えられる。灰白色粘質土と中央掘り込み・溝の上下関係であるが、灰白色粘質土がみとめられた南縁部では溝の粘土を除いた地山面にて溝の掘方を検出することができた。これは粘土がなかった北縁部も同様である。中央掘り込みを埋めるのは黄色粘質土で、上面検出時には溝の外側を若干はあるがこえる範囲で確認されたことから、溝が最も下位にあたるものといえる。溝の機能については充分ではないが排水溝とはおもわれず、棺構造に関係するものであろうか。

木棺はすでに腐朽しており木質は全く遺存しておらず、その痕跡とおもわれる土層がわずかにみられたが板材の立ち上がりや厚さなど、詳細な構造を明らかにできなかった。棺床構造は灰白色粘質土との境を含め中央掘り込みの横断面がやや緩いU字形のカーブをまた縦断面でも両端においてやや曲率に差はあるが緩い弧状を呈するものである。このことから、木棺の底面形はいわゆる断面正円形状の割竹形木棺ではなく舟形木棺の形態に近いものが想定されるが、棺小口部分の形状については不明確さが残る。棺の横断面径は約40cmでいくぶん扁平に復元しても棺上方の空間はさほどないものである。また、上記の中央掘り込みを埋める黄色

粘質土の広がりが木棺の範囲を示すものとすれば、棺長は約170cmをこえるものとおもわれる。

ほか、床面検出の過程で2カ所において赤色顔料が検出されてた。分析ではとともに水銀朱の結果が得られている（付章）。赤色顔料1は南側周縁部の灰白色粘質土上面にてブロック状にみられたもので、上面だけでなく層中にも及んでいる。赤色顔料2は顆粒状の水銀朱が僅かに検出されたものである。

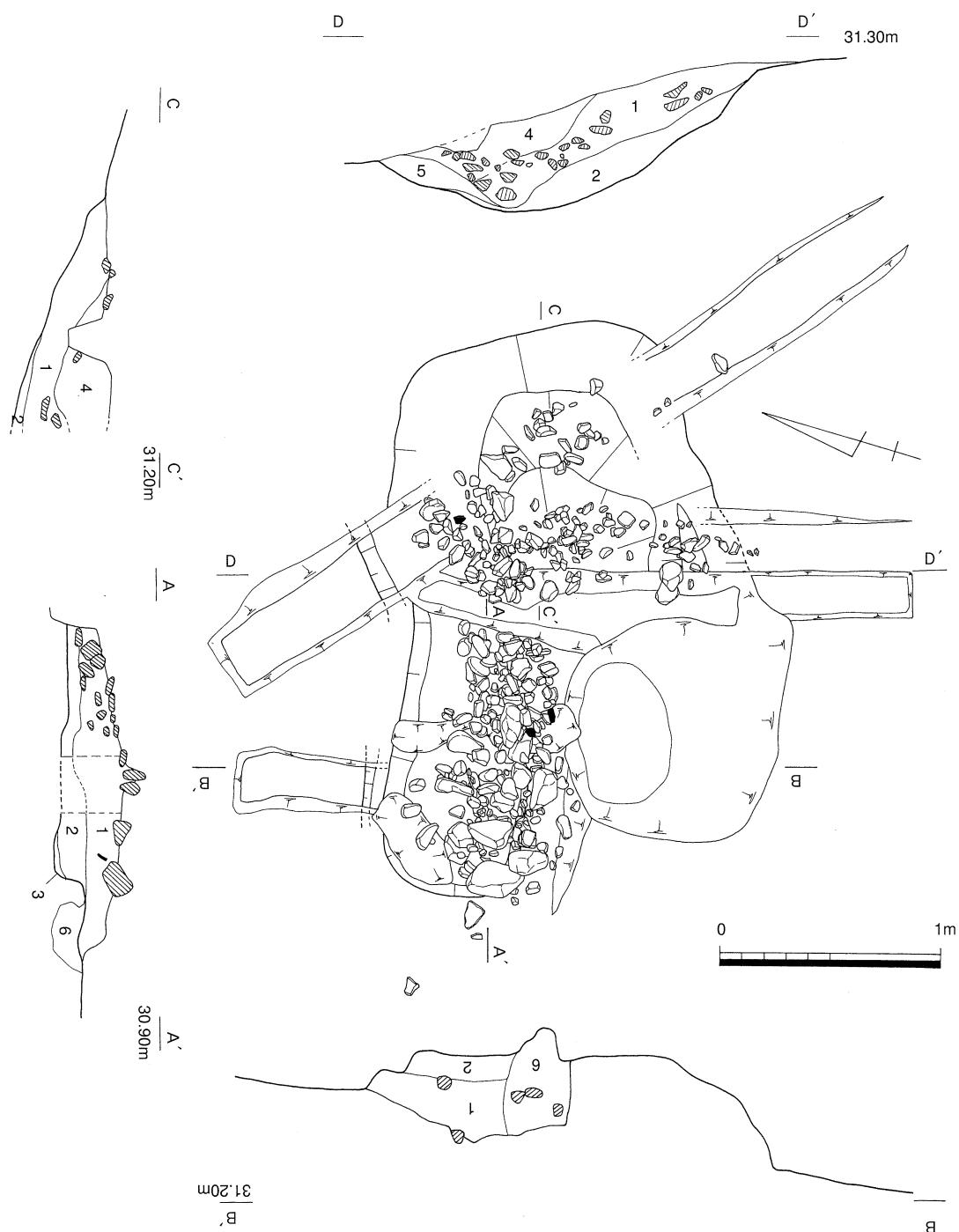


1 浅黄色細礫混粘質土
2 灰白色粘質土（赤色顔料含む）

第52図 鉄製品出土状況図

副葬品の出土状況

副葬品はきわめて少ない。おそらく棺外副葬とおもわれる鉄製品2点が掘り込み西端溝より出土したのみである。これらはおそらく同一個体であろう鏟である。南よりにて出土したのが刃部、ほか一つが身部で約15cmほど離れている。ともに溝埋土中からの出土で、刃部の出土位置では上位の灰白色粘質土



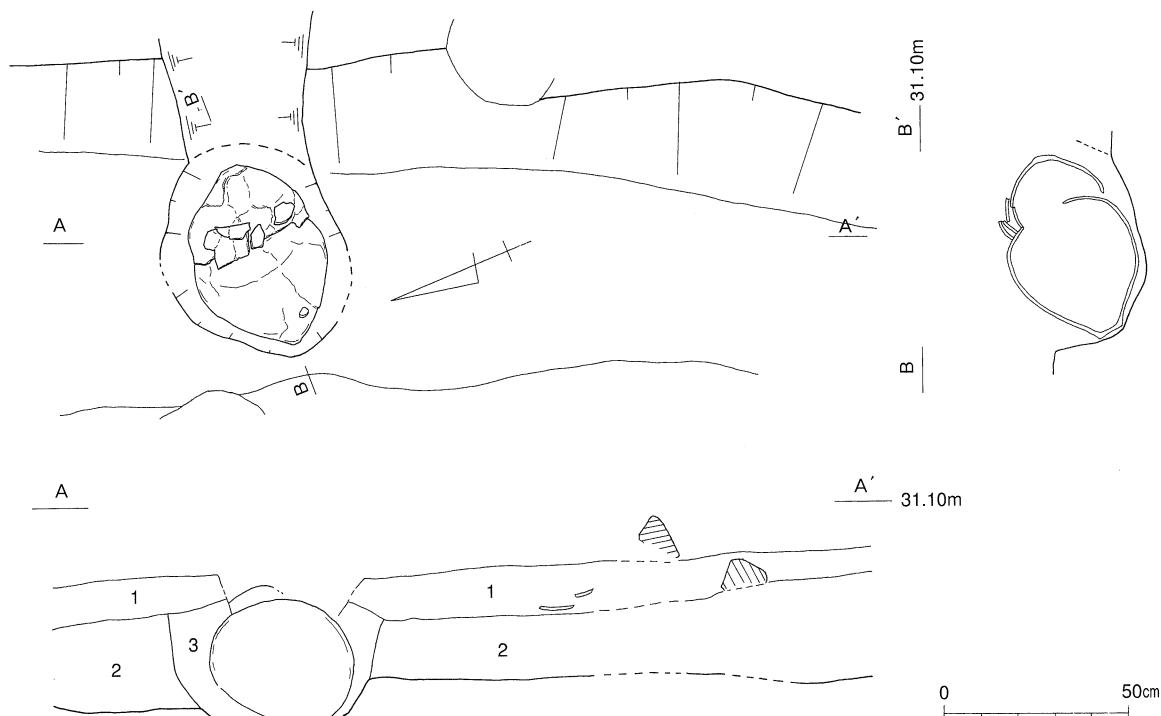
- 1 灰オリーブ色土（土器片・川原石含む）
- 2 灰黄色土
- 3 暗灰黄色粘質土
- 4 淡黄色土（しまる・川原石含む）
- 5 灰白色土
- 6 根痕

第53図 第2主体部平・断面図

が一部溝内に落ち込むようにあった。破碎されていたとおもわれる。身部は折り曲げられており、出土状況からすると破碎された可能性もうかがわれる。

第2主体部

墳丘西側にあたり、丘陵北西斜面が南西稜線に移行しようとする変化点付近に位置する。豊穴式石槨中心から約8mのところでちょうど推定墳裾に接するようにある。検出時に礫がまとまって認められ、土器片を伴っていたことから埋葬施設と判断した。墓壙の主軸はN93°Wのほぼ東西で、等高線に対しやや斜行するようある。墓壙は根株によるカク乱などによる損壊が著しくとくに西半は大きく被っている。墓壙は一部2段状を呈し、検出面での掘方は長軸250cm以上、短軸で約165cmを測り平面形は不整な長方形を呈する。斜面上にあるため長軸両端で30~40cm、短軸両端で40~50cmの比高差があり、また墓壙底までの深さも南側が約60cmであるのに対し北から西側にかけては約10cm前後となっている。なお、墓壙底との比高差が小さい北西側において2段墓壙が明確に認められる。他方、斜面に対して大きく掘り込んで緩斜面を呈する東半掘方は、墓壙底からの立ち上がりや段が緩慢であるといえる。下部掘方は長軸約165cm、短軸推定約80cmほどとおもわれる。墓壙底は標高約30.6mを測るが、東西端付近にて僅かに下がっている。検出時に確認された礫を掘り下げると、おおむね下部掘方長軸にそって帯状のまとまりをみせる。礫は比較的小振りなものであるが20cmをこえるものあり西側に多い。土層ではそのほとんどが墓壙底直上ではなくその上にあたる第2層に包含されている。また、東側横断面では第2層は陥



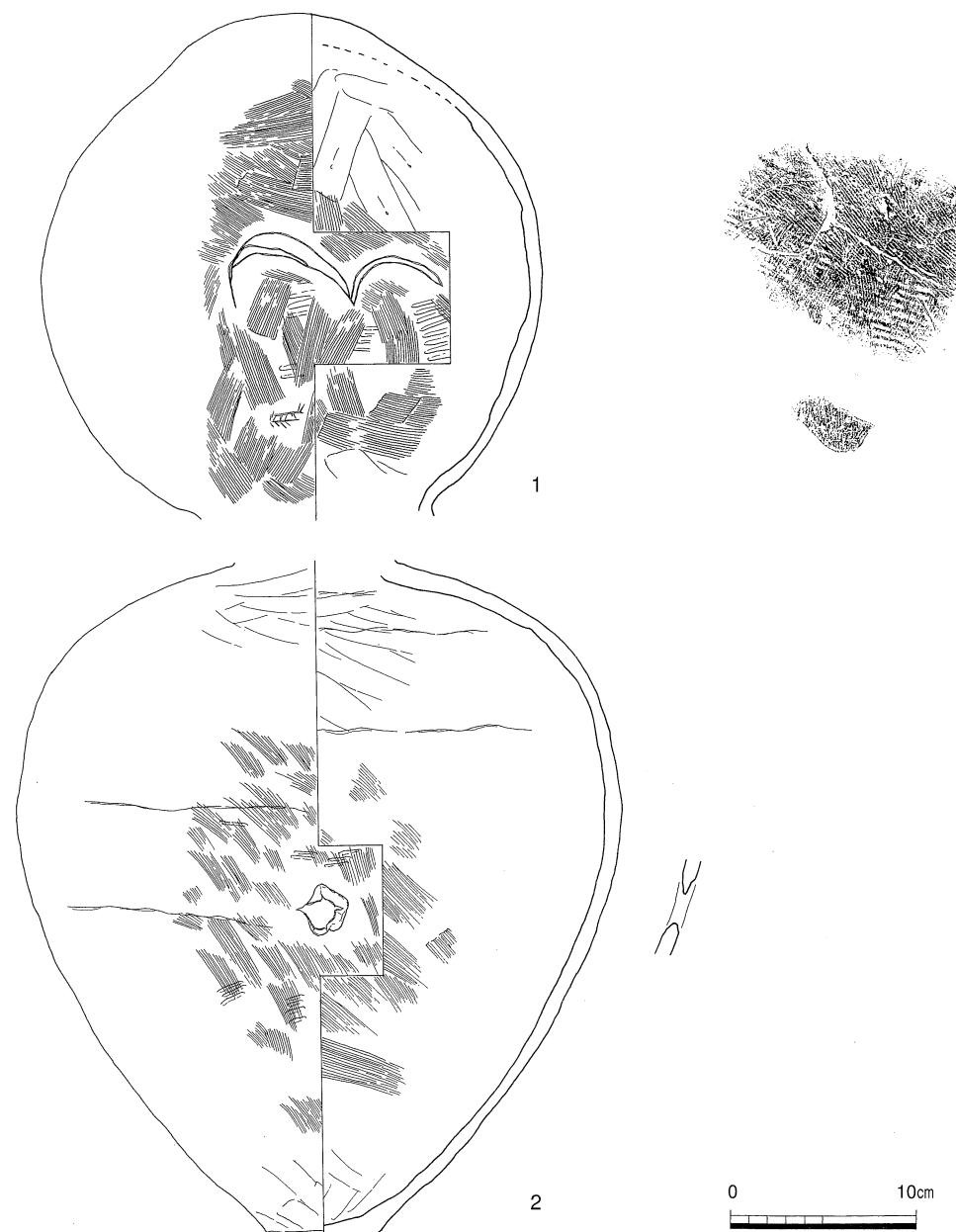
- 1 灰白色土（土器片含む・周溝流入土）
- 2 淡黄色細礫混土（周溝埋土）
- 3 にぶい黄橙色砂礫質土（土器棺壙方埋土）

第54図 土器棺墓平・断面図

没したかのような落ち込みをみせ、構造物の腐朽によるものとおもわれる。これらの状況から痕跡は検出されなかったが箱形木棺を使用し、設置後上面には竪穴式石槨と同じように礫堆を配していたことがうかがわれる。なお、この木棺墓は墳丘墓に関連する遺構であるが、出土遺物には礫堆より出土した土器細片が数点出土のみで、厳密な時期比定はおこなえない。

土器棺墓

周溝内に配されたものでトレンチ設定時に検出された。周溝北端から南約2mに位置する。土層断面からすると周溝内に淡黄色土が流入した後にこの上面から掘り込んで埋置されている。掘方は平面橢円形で長径約60cm、短径約50cm、深さ約30cmを測り、底面は周溝底の地山を若干ではあるがさらに掘り込んでいる。土器棺墓は棺身と棺蓋2個体の土器からなり、それぞれ壺を体部上半もしくは頸部から上を



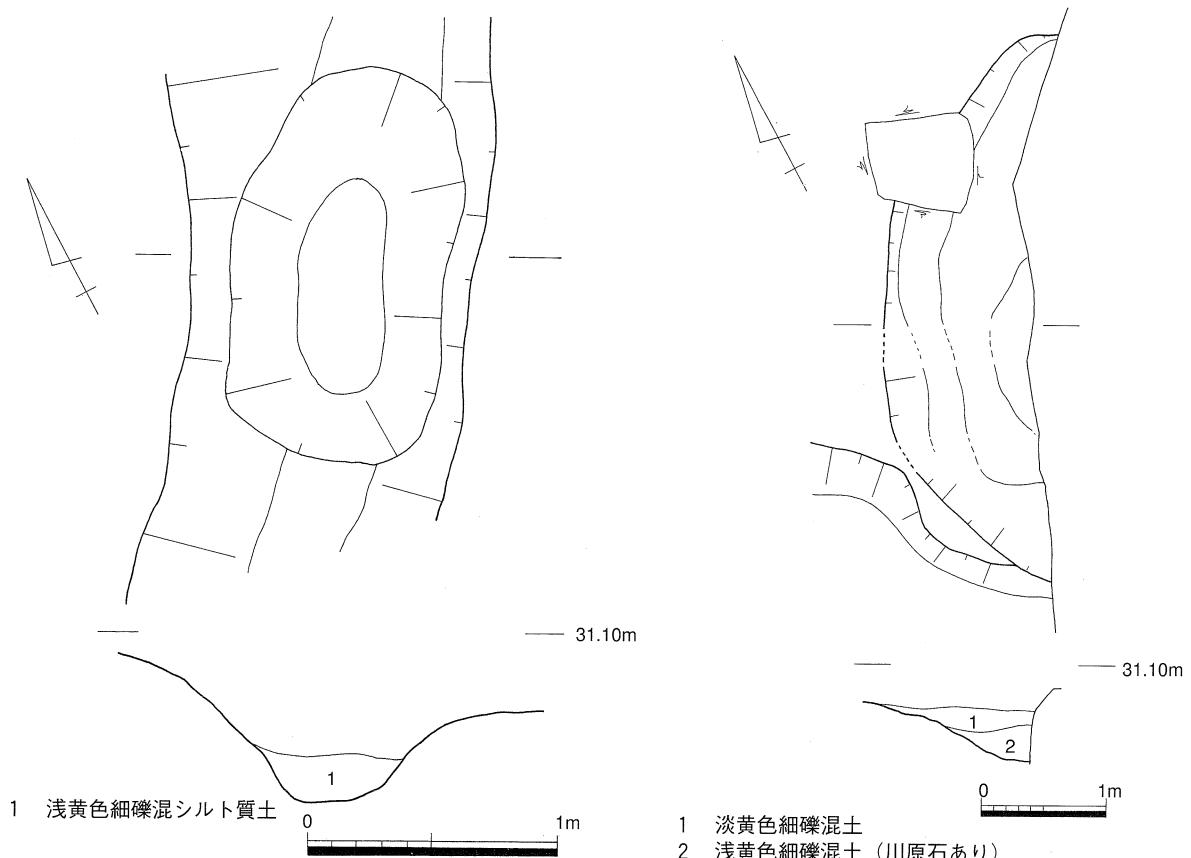
第55図 土器棺棺蓋・棺身実測図

打ち欠き合わせて使用している。主軸はほぼ東西で棺身底部を西下にしてややねかせ気味の斜位に埋置している。なお、棺身の体部やや下半には1カ所の焼成後穿孔があり、検出時において確認できたよう上方に向いている。

棺身は頸部付け根から上を打ち欠く。肩部は張り気味で体部の最大径をやや上位にもち、底部にはやや直線的にしほまりついたる。底部は明確な屈曲を有する平底である。内外面ともに粘土紐の継目がみられ、外面は頸部および底部付近にナデ、中位にはタタキ後ハケをほどこす。内面には上位にはナデ、中位にはハケが、底部にはヘラケズリをほどこす。また、上述したように最大径のやや下位に径2cmほどの焼成後穿孔を1孔あける。棺蓋は体部上半から頸部にかけてを打ち欠いて棺身に被せていた。体部は長胴で最大径がやや下位にありやや下ぶくれ状を呈し、底部は明確な屈曲を有さず丸底傾向にある。体部外面にはタタキとハケをほどこし、底部近くに黒斑がある。内面には上位から中位にはナデ・ハケ、下位にはヘラケズリをほどこす。また、外面にはヘラ記号もち中位に重弧文を2個左右連結させ、さらに上位にも羽状文をほどこしている。なお、副葬品や人骨などは出土しなかった。

土壙墓

いわゆる周溝内土坑で、その位置的関係から埋葬施設として取扱った。周溝南端から約2mに位置する。周溝掘下げ時に落ちを認めたもので、土層による掘り込み面の確認は行えなず周溝底での検出となった。平面はやや不整の長方形で長さ約156cm、幅約86cmを測る。底面は標高約30.45mで、南北端の周溝底より20~25cmほど地山を掘り込んでいる。遺物は出土しなかった。



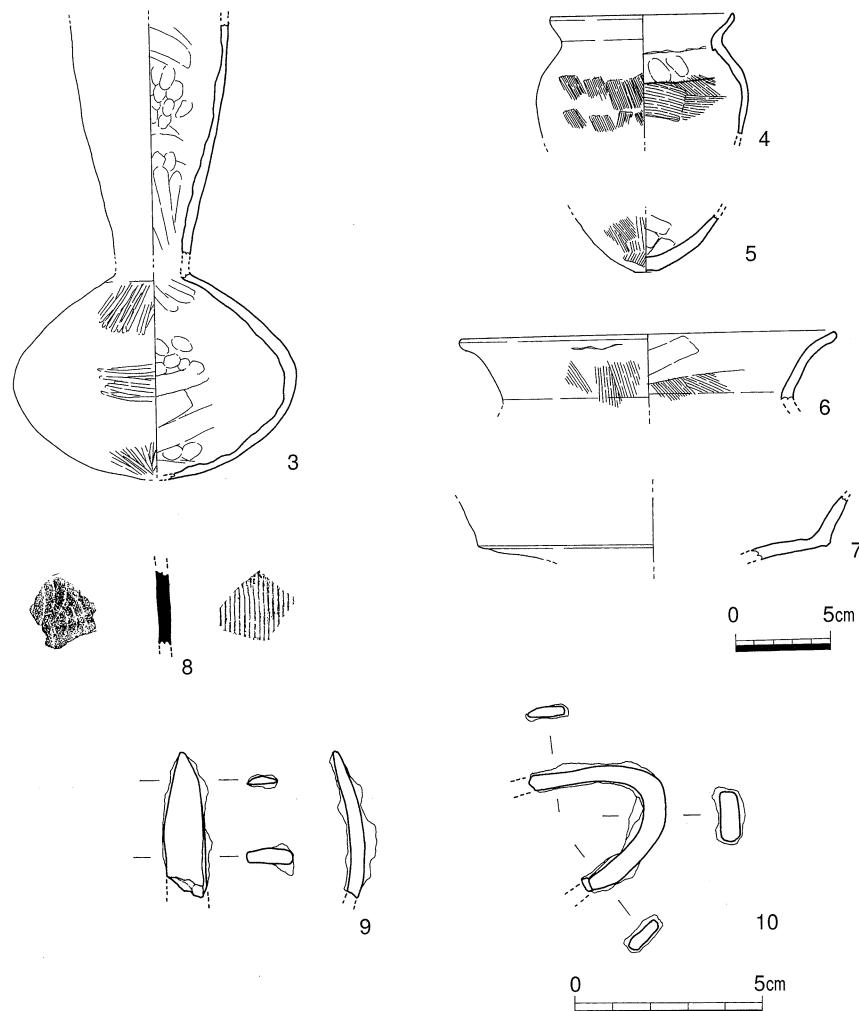
3. その他の遺構

不明遺構

調査区の東端にて検出された鞍部上にある性格不明の落ち込みで、周溝東縁からの距離は約1mである。調査区の関係で部分的な検出にとどまり全形は不明であるが、鞍部稜線と直交し掘方は半円状、南側において段差とつながる。遺構は地山から掘り込まれており壁際での長径約440cmを測る。鞍部中ほどでの底面は標高約30.35mで深さは約45cmを測り、底面まで凹凸をもって傾斜していく。埋土には僅かな礫がみられた他に出土遺物はなく時期比定が行えない。また、このために墳丘墓に関連する遺構かどうかを含め性格については不詳である。なお、調査区外の鞍部東側において現状で視認できるマウンドなどはみられなかった。

テラス状遺構

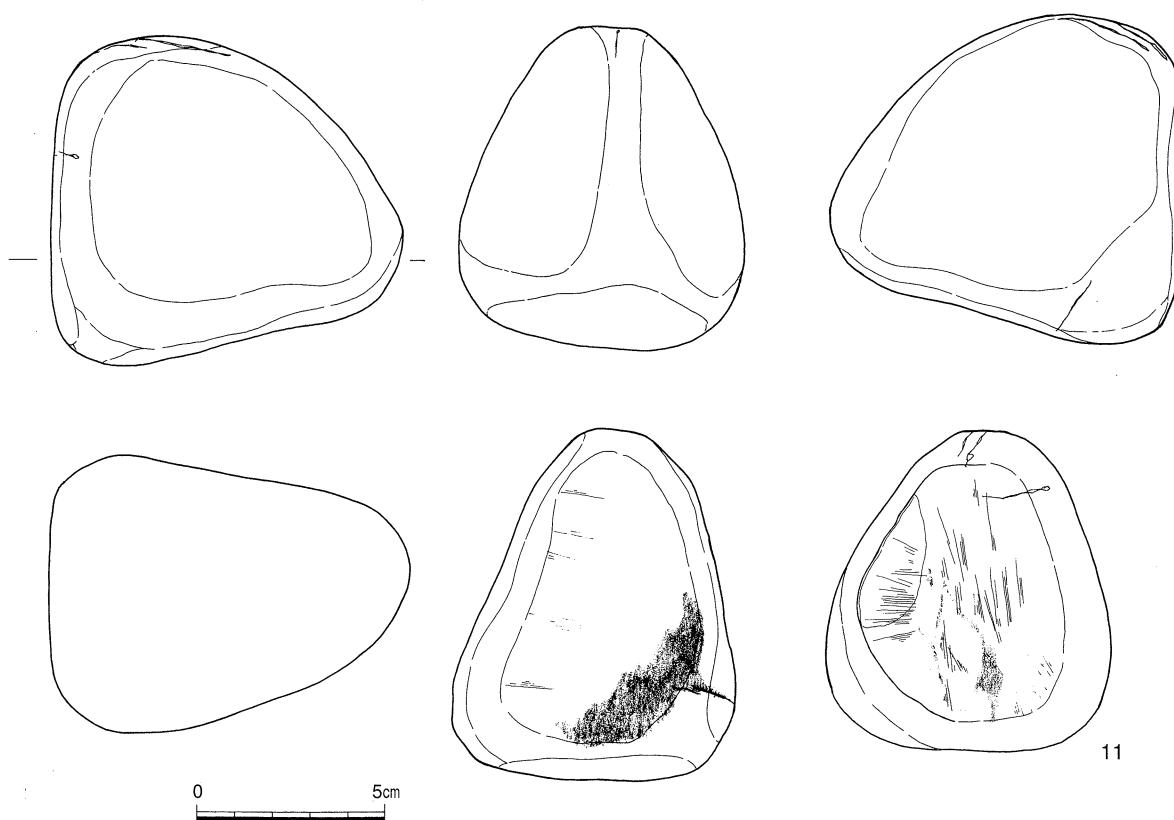
上記の不明遺構とした落ち込みと周溝の間の稜線上はほぼ平坦な面を有する。この平坦面の南側、おおむね鞍部幅員端のところに地山を削りだした段がみられる。この段は周溝東縁から不明落ち込み南縁にかけて、クランク状に屈曲してとりつき段差幅約20~40cmで高低差は約10~15cmを測る。これと同様なものは反対側では検出されなかった。



第58図 出土遺物実測図（1）

4.出土遺物

樋端墳丘墓から出土した遺物は少量である。まず堅穴式石槨であるが礫堆からは礫に混じって細頸壺3がほぼ1個体分出土している。これはいわゆる下川津B類土器で角閃石を含み色調はにぶい褐色を呈する。体部はやや算盤玉状の偏球形で最大径から上下方にむかってはややシャープさに欠けようか。調整は外面はヘラミガキが内面は下半がヘラケズリ、上半はオサエが顕著である。口頸部は端部付近を欠くが体部から外上方に延びたあと中位ほどにて緩やかに内湾する。内面にはナデ・オサエなどが顕著である。また、礫堆からは石槨内水銀朱の精製に用いたと考えられる石杵が1点出土している。これは調査終了後に持ち帰った礫堆の礫石の中から確認されたもので、出土位置を特定はできないが礫堆内に存在していたものといえる。流紋岩の自然石をそのまま用いたもので加工や整形は施されておらず、形状は三角錐状を呈し重さは780gである。使用面は2面でそれぞれ赤色顔料が付着し磨面や擦痕がみられる。また、保持した面は表裏にあたり摩耗によるへこみがややみられる。副葬品の鉈刃部9は鋒のため細部不明であるが反りをもち逆V字形を呈し身部につづく。身部10は断面は矩形を呈しU字形に折り曲げられている特徴を有する。4～7は周溝から出土したもので図示したものは第52図1層からのものである。4と5は同一個体とおもわれる甕で、4は赤褐色を呈し復元口径約9.4cmを測る。口縁部は頸部から短く斜め外方に屈曲し、体部最大径は口径ほどで張らない。底部の5は灰赤色を呈し丸底傾向にある。6は口縁部でにぶい黄橙色を呈し、端部はややまるみをもっておさまり外面にはハケメが残る。土器棺蓋と同一個体の可能性がある。7は二重口縁壺もしくは高坏の口縁部でにぶい橙色を呈する。8はトレンチ2において周溝の東側を掘り下げ中に表土直下層から出土した須恵器片である。外面には細筋のタタキが残るが内面はナデ消していることが特徴で、5世紀後半頃と考えられる。



第59図 出土遺物実測図（2）

第4節　まとめ

今回の樋端墳丘墓の発掘調査では、弥生時代終末期首長墓についての新たな資料を得ることができた。ただ、全体的・個別的な様相を含め墳丘墓にかかわる埋葬される人物の死や墳丘の築造からその完了までの過程については、確認された資料による想定となってしまう。以下、中心主体である竪穴式石槨を中心としてこれらを簡単にまとめ、他と比較することで本例の位置づけをみてみる。

1. 樋端墳丘墓の築造時期

出土した遺物は多くはないが、時期をうかがうことのできる遺物は本墳丘墓の中心主体である竪穴式石槨礫堆と周溝からの土器に分けられ、ここではより確度の高い前者を主とする。礫堆出土土器は上述したように下川津B類土器の細頸壺で、その看取できる口頸部の内湾傾向や体部の縮小・ゆるみ気味な特徴は下川津V式段階に下るものであろう（1）。墳丘墓の築造時期はおおむね弥生時代終末期半ば頃とおもわれる。また、周溝内埋葬の土器棺墓は層位的に後出するものであるが、これに近い頃に埋置されたと考えられる。

2. 埋葬行為の諸要素について

I. 竪穴式石槨の構造と特徴

主軸方位

石槨主軸はほぼ東西方向を指示し、丘陵主軸とは斜行する。当該地域の伝統とされるものである。

石槨規模と石材

石槨は基底石内法で長さ約250cm、幅は東小口で約88cm、西小口で約81cmを測る。県内他例は長さが2m前後から3m未満か、一回り以上小さくなる1.5m前後に分けられるが、本例は前者に含まれよう。壁体石材に川原石（砂岩・花崗岩）を使用している。

床面構造

床面は断面が緩やかな弧状の掘り込みを地山面からうがっており、周縁に置いた粘土とともに棺底形を反映した棺床構造とおもわれる。また、石槨床面短軸には壁体にとりつくようにある溝をあわせもつ構造は県内に例がないものである。

壁体構造

壁体は石材を5段ほど積んで構築する。現状の高さは35cm程度だが中央掘り込みの底からすれば最大で10cm増しになる。上方外開きに小口積みで丁寧に構築している。基本的に同様の形状をした墓壙壁にそわすため控え積みはない。また、棺痕跡と壁体までは基底石でも約20cmの空間が残っている。

蓋および上部構造

カク乱を受けたとはいえる石槨上部に蓋石となるべきような石材の存在は確認されず、上面に形成された礫堆の存在や円礫を含む第3層の落ち込んだ状況は木蓋の使用が考えられる。本墳丘墓では第2主体

部・木棺墓の上部にも同様に礫堆が設けられており、より明らかな陥没状況がみられた。

赤色顔料の使用

木棺に相当する位置ではなくその周縁にて、量的には僅かながらも赤色顔料（水銀朱）の使用が確認される。県内では使用開始期の一例である（2）。

構築過程と棺の搬入

石槨構築および棺安置を含めた過程についてみると、①墓壙掘削後壁体の構築。②墓壙底に中央掘り込みと溝を掘削し、棺床の形成。③木棺の搬入、周縁に粘土を置き水銀朱塗布。木蓋の架設。④礫堆の敷設と祭具供献によって完成、となる。壁体構築と棺搬入の前後関係についてであるが、一般的に本例のような堅穴式石槨では壁体構築が先行するとされるものである。本例も棺痕跡と壁体までには空間があり同様でも棺の搬入は難しくないと考えられる。盜掘を受け西側から西壁にかけてのつづきが不明な現状ではすることは危険であろう。ただ、南壁西よりで一部みられる石積みの乱れや向きの相違はたんなる再構築の急造ともいえるが、粘土敷設のためすでに置かれていた基底石をのぞいて、完成までの段階的時間差を表す可能性が考えられる。

樋端墳丘墓の堅穴式石槨は墳丘中心に単独にて存在し、上方外開きの壁体とその上部に敷設された礫堆および床面棺床構造を特徴として指摘できる。県内当該期の類例では壁体構造については、寒川町奥10・11号墓や大川町大井遺跡C地区など香川県東部雨滝山周辺においてみられるのであるが（3）、石材に川原石を使用したことについては環境的要因だけによるものかどうか検討を要する（4）。礫堆は奥10号墓や綾歌町石塚山2号墳などにみられる。棺床構造から割竹形もしくは舟形木棺の使用をうかがえる例はあるが、同様の範疇とできる棺床構造をもつものはなくバラエティーな棺床構造の中の一例といえる（5）。

II. 墓上祭祀について

本墳丘墓では上述したように堅穴式石槨と第2主体部の上部には、拳大ほどの川原石からなる礫を集積した礫堆が存在し、少量ながら土器が出土するとともに前者からは赤色顔料関連遺物が確認されている。礫堆は木蓋などの腐朽により内部に落ち込んだり流出してはいるが、本来は墓壙上にある程度積み上げるように形成されていたものとおもわれる。

本例のような礫堆は岡山市矢藤治山墳丘墓における大谷晃二氏の上部礫構造の分類では、礫の使用量からによる比較は難しいが、いずれにしろA類もしくはB類とできよう。礫堆の初相は岡山県倉敷市楯築墳丘墓木槨墓上にみられ、瀬戸内を中心とした地域に偏在するものとされる（6）。他方、堅穴式石槨礫堆からは石槨内に用いられた水銀朱を精製したと考えられる石杵が1点出土している。このような例は赤色顔料と石杵・石臼の関係を検討された北條芳隆氏の分類では、②とする「埋葬施設には赤色顔料がもちいられ、それを精製したとみられる石杵のみが副葬ないし埋置される事例」に相当し、葬送儀礼における赤色顔料の摺り合わせ行為を想定される（7）。ただ、②とする当該期の例の多くは島根県西谷3号墓第1主体部など、山陰地方の四隅突出墳丘墓などを中心とした日本海側地域にみられる。これらは先の大谷氏の分類によればC類にふくまれ、石杵などの石製品もしくは礫を数個立てたり置いたりしているものである。具体的な内容は不明だが、そのものが儀礼行為の重要な祭具とされる。

上部礫構造A・B類とC類とではその本質的な性格は相違するものである。本墳丘墓例は楯築墳丘墓

などと同様に、棺槨閉塞後の土器などの供獻儀礼行為の演出装置的なものとして位置づけられる。赤色顔料が付着した石杵については、その出土状況が不明のため偶然性を排除することはできない。豊穴式石槨における埋葬時の水銀朱摺り合わせ行為は指摘できようが、礫構造C類と同様に扱われたとはいえない。ただ、注目すべき点として徳島県鳴門市萩原1号墓では墳裾の土器棺墓に棒状石杵が供獻されていたとする（8）。萩原1号墓は上部礫構造A類をもち、豊穴式石槨内にも赤色顔料の使用が認められるもので、本例とあわせ上部礫構造A・B類における石杵と赤色顔料の関連をうかがい知ることのできるものといえよう。

III. 副葬品について

この時期の副葬品は少種少量であるが、豊穴式石槨からの出土は鉄製工具鉗1点のみである（9）。ただ、この鉗は折り曲げられていることを特徴とし、破碎の可能性もうかがわれる。工具折り曲げ副葬は中西部瀬戸内地域においては一般的とされる（10）。ちかい類例では寒川町奥3号墳箱形石棺のほか、兵庫県白鷺山箱式石棺・養久山1号墳第6主体（箱式石棺）などにみられる。

IV. 土器棺墓の記号文について

周溝内の土器棺墓棺蓋にはヘラ状工具による沈線によって描出された記号文がみられる。ヘラ記号をもつ土器は弥生時代前期後半からみられるが増加をみるのは後期以降である。出土するのは集落遺跡からであり、土器棺墓に用いられたものについては県内において類例をみない（11）。県内において記号等によって葬送儀礼を示すものとしては素材が異なるが、普通寺市仙遊遺跡における弥生時代後期後葉頃の箱式石棺墓石材にみられる人面文および不明文の線刻画ぐらいであろう（12）。

記号は体部中ほどに二重弧線を並列させ、頸部付近に羽状文らしきものをもつ。本例については埋葬時の儀礼行為に伴うものかどうかをふくめ、記号文としてどのようにコミュニケーションされていたかなどについてはおよびつかない。今回報告する成重遺跡においても集石遺構から記号文土器片が出土しており、母集落においてもそれらが使用されていたことはいえる。今後、集落内の使用状況による体系的な把握ができるかどうかの検討が必要である。

3. 結語

上記の要素および周辺の状況の概観による本墳丘墓の位置づけについて簡単にまとめると

①弥生時代終末期前半頃に築造された豊穴式石槨の被葬者を主とする首長墓である。中心主体の特化がみられるが周辺埋葬を含み家族墓的な様相を残す。

②雨滝山周辺、とくに時期的に先行する奥10号墓を範型とするような祭式を基層とするが、同時に充実化と新たな特性を組み込んで祭式の多様化がみられる。

これらは本地域における前方後円墳の成立によって表象される社会へといたる過程、地域社会内の集団構成要素における対内・対外的変化の生成と発展の相互作用によってしめされる全体的動態の一様相と

いえる。また、現状の資料において雨滝山周辺を含む旧寒川郡と比較した場合、本墳丘墓に後続するような首長墓および系列がみられないことも本墳丘墓の位置づけにとって重要であるといえる（13）。

今日、不明であるとされた本地域、旧大内郡の状況が四国横断自動車道建設工事などに伴う大規模調査によって明らかにされつつある。今後、墓制に限らずその生産基盤である集落の全体的個別的様相をふくめた比較検討をより広域的におこなうとともに、そのさらなる深化がのぞまれる。

註

- (1)大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』1990 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- (2)広義の赤色顔料の使用はいくらかみられるが、科学的分析によって同定された例はなお少ない。
大久保徹也「讃岐地方における朱関連資料」『考古学ジャーナル』394 1995
片桐節子『極楽寺墳墓群』寒川町教育委員会 1998
- (3)このほかに大川町富田中所在の森清墳丘墓（古墳）竪穴式石槨が該当するとされる。
細川伸晃『森清墳丘墓発掘中間概報』大川・寒川・津田町教育委員会 1984
- (4)川原石積み竪穴式石槨の多くは長尾町塚原地区に集中し、古墳時代前期初頭の丸井古墳以降みられる。
大山真充「河原石積みの竪穴式石室について」『考古学ジャーナル』225 1983
- (5)国木健司「讃岐における弥生時代終末期から古墳時代前期の埋葬施設」『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会 1993
- (6)大谷晃二「弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995
- (7)北條芳隆「葬送儀礼における朱と石臼」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団 1992
- (8)菅原康夫「萩原墳丘墓をめぐる諸問題（発表要旨）」『前方後円墳を考える』古代学協会四国支部第14回大会 2000
- (9)岡村秀典氏の分類でB類に該当する。
岡村秀典「鉄製工具」『弥生文化の研究5』雄山閣出版 1989（再版）
- (10)北條芳隆「四国地域の前期古墳と鏡（発表要旨）」『倭人と鏡』第36回埋蔵文化財研究集会 1994
- (11)藤田三郎氏は畿外での葬送儀礼における記号文土器の使用を想定される。
藤田三郎「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ。 1982
- (12)笹川龍一『仙遊遺跡発掘調査報告書』善通寺市教育委員会 1986
なお、高松市林・坊城遺跡では周溝墓の可能性が考慮される「円形周溝状遺構S X03」周溝より記号文土器とおもわれるものが出土している。
- 宮崎哲治『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡』1993 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- (13)旧寒川郡では弥生時代後半以降に各水系ごとに拠点となるような集落がまとまりをみせるようになる。墓制については階層構造の検討が充分におこなわれなければならないが、集落に隣接し円形周溝墓や土壙墓・土器棺墓などで墓域を形成するものと、近接する周辺山麓地の丘陵や尾根に墳丘墓もしくは台状墓・箱式石棺墓・土壙墓・土器棺墓などからなる墳墓群を形成するものがみられる。

参考文献

- 『大川町史』大川町史編集委員会 1978
- 『寒川町史』寒川町史編集委員会 1985
- 『白鳥町史』白鳥町史編集委員会 1985
- 『大内町史』大内町史編纂委員会 1985
- 国木健司『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会 1993
- 片桐節子『極楽寺墳墓群』寒川町教育委員会 1998
- 渡部明夫・藤井雄三『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会 1983
- 山元敏裕「諏訪神社遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成2年度』香川県教育委員会 1991
- 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992
- 菅原康夫『萩原墳墓群』徳島県教育委員会 1983
- 『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 1995
- 山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第36冊 金比羅山遺跡I・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』
2000 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9~11年度』1998~2000 香川県教育委員会・(財)香川県埋
蔵文化財調査センターほか
- 『季刊考古学第52号』雄山閣出版 1995
- 『季刊考古学第67号』雄山閣出版 1999
- 岩松保「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 1992
- 本田光子「石杵考」『古代』第90号 早稲田大学考古学会 1990
- 大久保徹也「四国北東部地域における首長層の政治的結集(発表要旨)」「前方後円墳を考える」古代学協会四国支部
第14回大会 2000
- 藏本晋司「四国北東部における前方後円墳創出期の諸様相(発表要旨)」「前方後円墳を考える」古代学協会四国支部
第14回大会 2000
- 『定型化する古墳以前の墓制』第24回 埋蔵文化財研究集会 1988

付章 樋端墳丘墓出土赤色顔料関係遺物の蛍光X線分析

徳島県立博物館 魚 島 純 一

1. 分析資料

香川県大川郡白鳥町樋端墳丘墓出土赤色顔料関係遺物	合計 3 点
豊穴式石槨床面出土赤色顔料	2 点
豊穴式石槨上部礫堆出土石杵	1 点

2. 分析方法

徳島県立博物館に設置されたエネルギー分散型蛍光X線分析装置（テクノス製 T R E X 6 3 0 L）を用いて、次の条件で被破壊の定性分析をおこなった。

X線管：M o （モリブデン）
X線管電圧：50 K V
X線管電流：0.1～0.2 m A
検出器：電子冷却式 S i (L i)
分析範囲：直径 2 mm
測定時間：100秒
測定雰囲気：大気

（この装置は測定雰囲気が大気に限定されるため、原子番号16（硫黄、S）以下の軽元素は検出できない。）

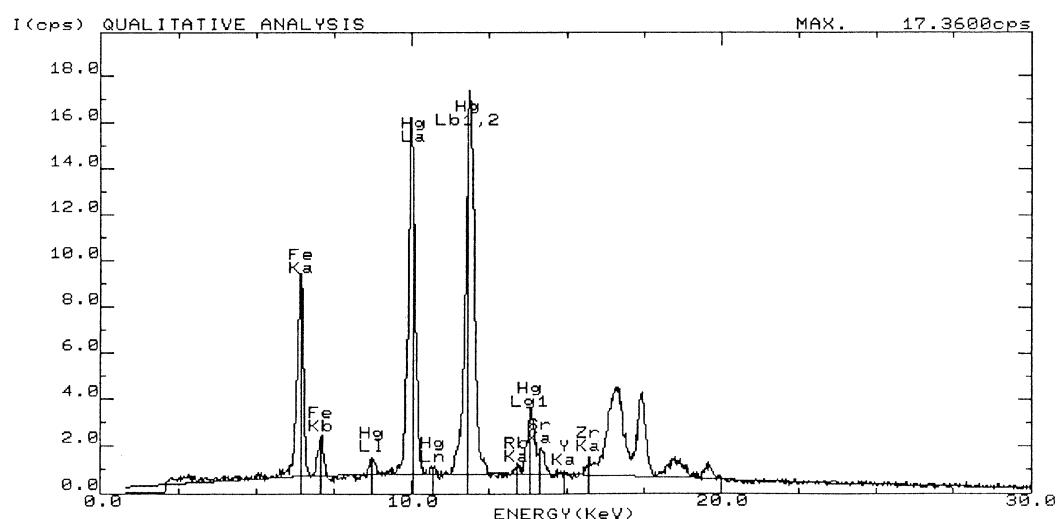
3. 結果

分析の結果、豊穴式石槨床面の2カ所において出土した赤色顔料からはH g（水銀）が検出された（図1・2）。一方、石杵の赤色顔料が付着しているとおもわれる部分の一部にはH g（水銀）の痕跡が若干みられるものの（図3）、明確に検出することはできなかった。

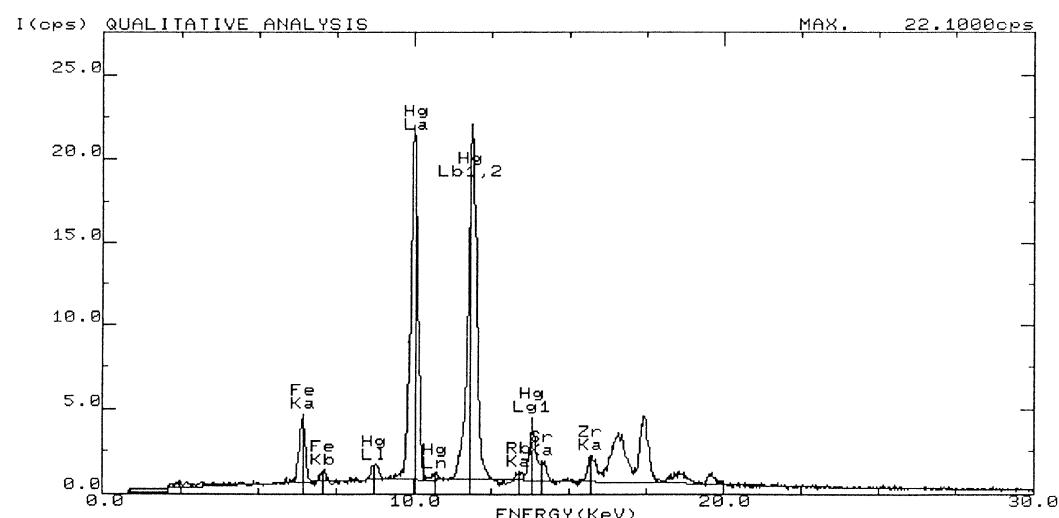
以上のことから、豊穴式石槨において用いられた赤色顔料はH g（水銀）を主成分とする水銀朱（H g S）であると考えられる。また、石杵に付着した赤色顔料は水銀朱の可能性はあるものの今回の分析のみで同定することは不可能であった。

（2001. 11. 30）

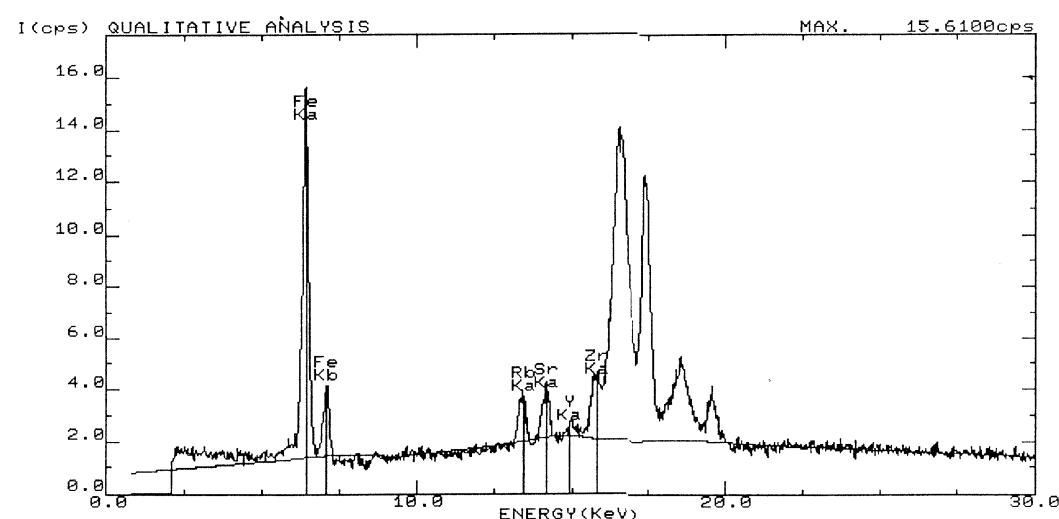
赤色顔料分析図



(1) 穫穴式石櫛赤色顔料 1



(2) 穫穴式石櫛赤色顔料 2



(3) 石杵赤色顔料

觀察表

高松廃寺観察表

掲載番号	種 別	器 種	法量 (cm)			色 調	胎 土	特 徴
			口径	底径	器高			
1	瓦	平瓦				灰黄色(2.5Y7/2)	精良	
2	瓦	丸瓦				灰色(N5/1)	やや精良	
3	瓦	丸瓦				青灰色(10BG5/1)	精良	
4	瓦	丸瓦				灰色(7.5Y6/1)	精良	
5	瓦	平瓦				褐灰色(5YR5/1)	細砂～粗砂	
6	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	細砂～粗砂	凹面に窯壁が付着
7	瓦	平瓦					細砂～礫	
8	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y4/1)	細砂～礫	
9	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	精良	
10	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	やや精良	
11	瓦	平瓦				灰色(7.5Y6/1)	やや精良	2枚が重なる
12	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	やや精良	
13	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	細砂～粗砂	
14	瓦	平瓦				青灰色(5B5/1)	やや精良	
15	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	細砂～粗砂	焼きひずんで反る
16	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	細砂～礫	
17	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	細砂～礫	
18	瓦	平瓦				暗灰色(N3/1)	細砂～礫	
19	瓦	平瓦				灰色(N4/1)	礫	
20	瓦	平瓦				暗灰色(N3/1)	細砂～礫	
21	瓦	平瓦				灰色(10Y6/1)	細砂～礫	
22	瓦	平瓦				青灰色(5B6/1)	精良	
23	瓦	丸瓦				灰色(N4/1)	精良	
24	瓦	丸瓦				暗青灰色(5B4/1)	やや精良	
25	瓦	丸瓦				暗青灰色(5B4/1)	精良	
26	瓦	丸瓦				灰色(N4/1)	礫	
27	瓦	平瓦				灰色(N5/1)～赤灰色(2.5YR4/1)	細砂～粗砂	
28	瓦	平瓦				灰色(N5/1)	やや精良	
29	瓦	平瓦				灰白色(5Y8/2)	礫	
30	瓦	平瓦				灰白色(5Y8/2)	細砂～礫	
31	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
32	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	精良	
33	瓦	平瓦				にぶい橙色(7.5YR6/4)	やや精良	
34	瓦	平瓦				淡黄色(2.5Y8/4)	細砂～粗砂	
35	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y5/1)	精良	
36	瓦	平瓦				青灰色(5B6/1)・灰色(N5/1)	細砂～粗砂	
37	瓦	丸瓦				褐灰色(5YR5/1)	細砂～礫	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
38	瓦	丸瓦				灰色(N6/1)	細砂～粗砂	
39	瓦	丸瓦				灰色(N5/1)	やや精良	焼成不良
40	瓦	丸瓦				浅黄色(2.5Y7/3)	細砂～礫	焼成不良
41	瓦	丸瓦				浅黄色(2.5Y7/3)	細砂～礫	
42	瓦	丸瓦				青灰色(5B5/1)	細砂～礫	
43	瓦	丸瓦				にぶい黄褐色(10YR5/4)	細砂～礫	焼成不良
44	瓦	丸瓦				橙色(5YR6/8)	細砂～礫	焼成不良
45	瓦	丸瓦				灰色(5Y6/1)	細砂～礫	
46	瓦	丸瓦				灰れーブ色(5Y6/1)	細砂～礫	
47	瓦	丸瓦				にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂～礫	
48	瓦	丸瓦				灰黄色(2.5Y7/2)	細砂～礫	
49	瓦	軒丸瓦				暗灰色(N3/1)	精良	
50	瓦	平瓦				灰色(N6/1)	細砂	
51	瓦	平瓦				にぶい黄橙色(10YR6/4)	礫	焼成不良
52	瓦	平瓦				灰色(5Y6/1)	細砂	
53	瓦	平瓦				浅黄橙色(10YR8/4)	礫	焼成不良
54	瓦	平瓦				暗青灰色(10BG4/1)	細砂	
55	瓦	平瓦				明赤褐色(5YR5/6)	細砂～粗砂	焼成不良
56	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y7/1)	精良	
57	瓦	平瓦				灰色(7.5Y6/1)	やや精良	
58	瓦	丸瓦				橙色(5YR7/6)	精良	焼成不良
59	瓦	丸瓦				明黄褐色(10YR6/6)	細砂～粗砂	焼成不良
60	瓦	丸瓦				灰色(7.5Y6/1)	精良	
61	瓦	丸瓦				灰白色(5Y7/1)	精良	
62	瓦	丸瓦				灰白色(7.5Y7/1)	精良	
63	瓦	丸瓦				灰色(5Y6/1)	細砂～礫	
64	瓦	平瓦				灰色(7.5Y6/1)	細砂～粗砂	
65	土師器	椀	—	5.7	—	橙色(5YR7/8)	細砂～粗砂	
66	須恵器	鉢	—	—	—	灰色(10Y5/0)	精良	
67	黒色土器	椀	—	—	—	黃灰色(2.5Y4/1)	精良	両黒
68	須恵器	鉢	—	—	—	灰色(N5/0)	精良	口縁部2個体融着
69	須恵器	広口瓶	—	—	—	暗青灰色(5B3/1)	精良	肩部突帯1条
70	須恵器	甕	—	—	—	灰色(N5/1)	やや精良	
71	黒色土器	椀	—	6.4	—	黒褐色(7.5YR3/1)	精良	両黒
72	土師器	椀	—	6.5	—	橙色(2.5YR7/6)	精良	
73	土師器	杯	—	7.5	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂～礫	
74	土師器	土鍋	27.4	—		にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂～礫	
75	土師器	椀	—	5.4	—	橙色(7.5YR6/6)	やや精良	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
76	土師器	椀	—	7	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂～礫	
77	土師器	椀	—	9.7	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂～礫	
78	土師器	杯	—	7.3	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂～粗砂	
79	土師器	杯	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	
80	黒色土器	托上椀	—	8.1	—	灰黄褐色(10YR6/3)	やや精良	両黒
81	須恵器		—	—	—	灰白色(5Y7/1)	精良	
82	須恵器		—	—	—	灰白色(7.5Y7/1)	精良	
83	須恵器		—	—	—	灰色(N4/0)	精良	
84	土師器	杯	—	8.3	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂～粗砂	
85	土師器	椀	—	5.4	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂～粗砂	
86	土師器		—	7.4	—	橙色(7.5YR6/6)	やや精良	
87	土師器	杯	10.4	7.6	2	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
88	土師器	托	10.7	7	2.6	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂	
89	石器	石匙						サヌカイト製 60g

成重遺跡観察表

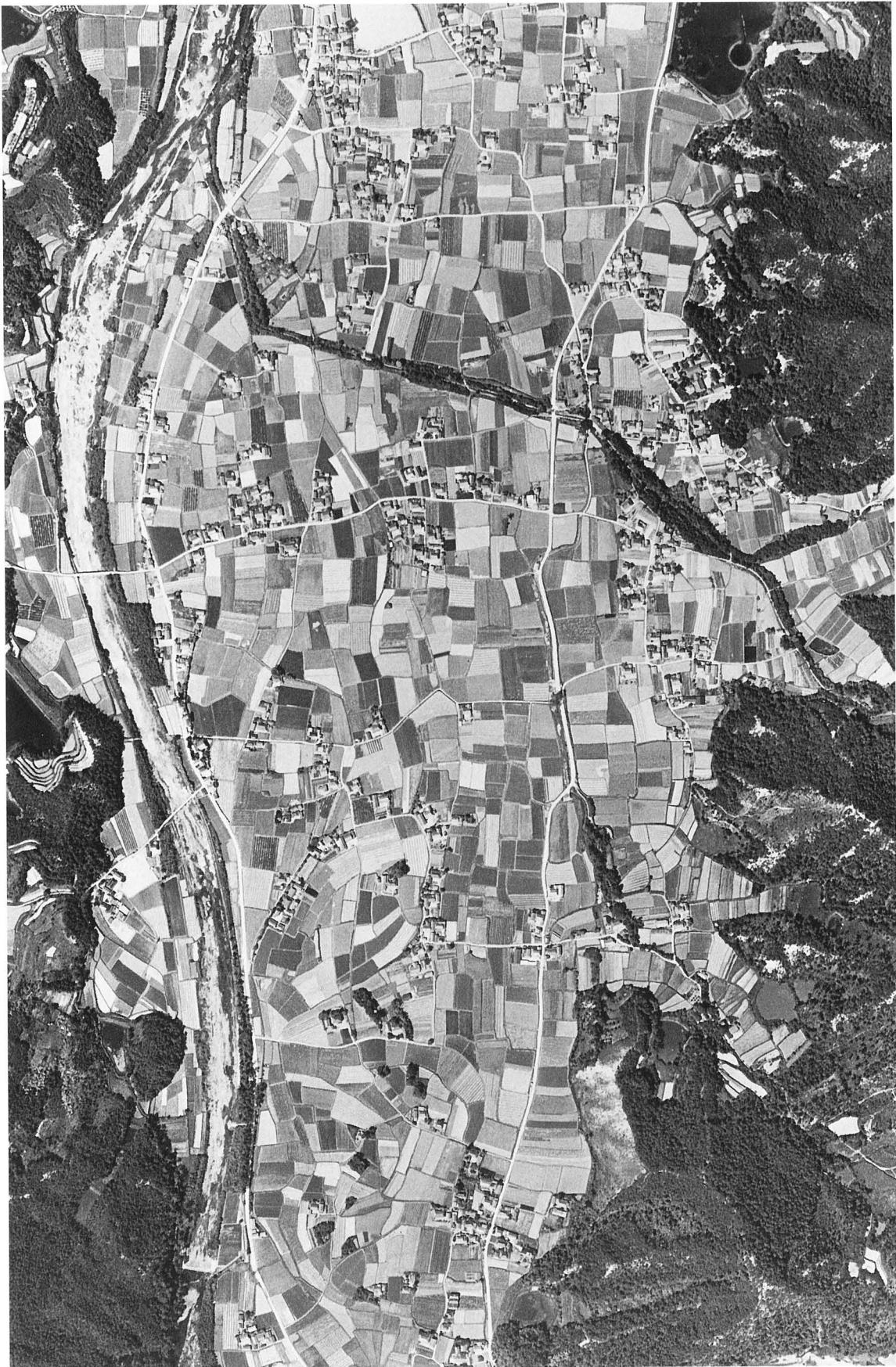
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
1	弥生土器	底部	—	4.4	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粗砂	
2	弥生土器	底部	—	3.7	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	粗砂	内面炭化物付着
3	弥生土器	底部	—	5.5	—	にぶい黄橙色(10YR7/2)	礫	
4	弥生土器	底部	—	7.3	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	礫	
5	弥生土器	底部	—	5.5	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	粗砂	
6	弥生土器	底部	—	6.2	—	灰褐色(7.5YR4/2)	やや精良	外底面にヘラミガキ
7	弥生土器	底部	—	5.6	—	灰褐色(7.5YR6/2)	礫	
8	弥生土器	底部	—	4.8	—	灰黄褐色(10YR5/2)	粗砂～礫	
9	弥生土器	底部	—	3.8	—	明赤褐色(2.5Y7/3)	粗砂	外面平行タタキ
10	弥生土器	底部	—	7	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粗砂	
11	弥生土器	底部	—	5.3	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	粗砂	内面ヘラケズリ
12	弥生土器	底部	—	8.7	—	浅黄橙色(10YR8/3)	礫	
13	弥生土器	底部	—	7.9	—	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	
14	弥生土器	底部	—	2.6	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	精良	
15	弥生土器	底部	—	3	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗砂	
16	弥生土器	底部	—	4	—	橙色(7.5YR7/6)	粗砂～礫	
17	弥生土器	底部	—	8.4	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	粗砂	
18	弥生土器	底部	—	5.4	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	粗砂	
19	弥生土器	底部	—	6.8	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	礫	
20	弥生土器	底部	—	7	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂～礫	
21	弥生土器	底部	—	5.7	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	粗砂～礫	
22	弥生土器	甕	16	—	—	橙色(5YR6/6)	精良・雲母	
23	弥生土器	甕	18.3	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
24	弥生土器	甕	19.8	—	—	褐色(7.5YR4/6)	粗砂	
25	弥生土器	甕	15	—	—	褐色(7.5YR4/3)	粗砂・雲母	
26	弥生土器	甕	11.9	—	—	にぶい黄橙色(10YR8/4)	粗砂～礫	
27	弥生土器	甕	13.7	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂	
28	弥生土器	甕	13.2	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗砂	
29	弥生土器	甕	14.1	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂～礫	
30	弥生土器	甕	14.5	—	—	浅黄橙色(7.5Y8/3)	粗砂	
31	弥生土器	甕	18.6	—	—	にぶい橙色(7.57/4)	粗砂～礫	
32	弥生土器	甕	15.6	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
33	弥生土器	甕	18	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	
34	弥生土器	甕	13.8	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/4)	精良	
35	弥生土器	甕	20.8	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	精良	
36	弥生土器	甕	21	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精良	
37	弥生土器	甕	18.6	—	—	灰黄褐色(10YR7/2)	粗砂	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
38	弥生土器	壺	17.4	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗砂	
39	弥生土器	壺	14.7	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
40	弥生土器	壺	15.6	—	—	浅黄橙色(10YR7/3)	粗砂～礫	
41	弥生土器	壺	12.8	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	粗砂～礫	
42	弥生土器	壺	15.8	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粗砂～礫	
43	弥生土器	壺	18.7	—	—	明黄褐色(10YR6/6)	粗砂	
44	弥生土器	壺	21.5	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	精良	
45	弥生土器	壺	19.6	—	—	橙色(7.5YR6/6)	礫	ヘラ記号
46	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR6/6)	粗砂～礫	体部と頸部のさかいに刻目突帯を付す
47	弥生土器	壺	29.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	礫	口縁端部外面に刻目
48	弥生土器	細頸壺	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	精良	
49	弥生土器	小型丸底壺	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂～礫	内側に炭化物付着
50	弥生土器	壺	10.2	—	—	赤褐色(5YR4/6)	粗砂	
51	弥生土器	体部	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗砂	櫛描格子文
52	弥生土器	高杯	31.2	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂～礫	
53	弥生土器	高杯	—	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	礫	
54	弥生土器	高杯脚	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂～礫	
55	弥生土器	高杯脚	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)		
56	弥生土器	鉢	—	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	礫	現状で貼付刻目突帯が2条あり
57	弥生土器	鉢	29	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗砂	口縁端部内面に円形浮文と斜格子文。体部には貼付刻目突帯に棒状浮文を付す
58	土製品	紡錘車				にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂	13.2g
59	石器	石鎌						サヌカイト製 2.0g
60	弥生土器	底部	—	6.1	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	
61	弥生土器	底部	—	5.6	—	にぶい褐色(7.5YR5/3)	細砂～粗砂	
62	弥生土器	底部	—	3.8	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや精良	
63	弥生土器	底部	—	9	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	細砂	
64	弥生土器	底部	—	5.5	—	赤褐色(5YR4/4)	細砂	底部外面にヘラミガキ
65	弥生土器	底部	—	4.5	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂～粗砂	
66	弥生土器	底部	—	4.4	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂～粗砂	
67	弥生土器	底部	—	6.8	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂	
68	弥生土器	底部	—	3.4	—	橙色(5YR6/6)	細砂～粗砂	
69	弥生土器	底部	—	2.2	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂～粗砂	
70	弥生土器	底部	—	6.3	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂～粗砂	
71	弥生土器	底部	—	5.5	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂～粗砂	
72	弥生土器	底部	—	5.5	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂～礫	
73	弥生土器	底部	—	5.6	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
74	弥生土器	底部	—	4	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂～礫	
75	弥生土器	底部	—	7.2	—	浅黄色(10YR8/3)	精良	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
76	弥生土器	底部	—	4.5	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂～粗砂	
77	弥生土器	底部	—	5.6	—	にぶい赤褐色(5YR5/4)	細砂～粗砂	
78	弥生土器	底部	—	6.6	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂～粗砂	
79	弥生土器	底部	—	6.2	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	細砂～粗砂	
80	弥生土器	底部	—	5.4	—	にぶい橙色(5YR6/3)	細砂	
81	弥生土器	底部	—	11.7	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂～粗砂	
82	弥生土器	底部	—	5.1	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂～礫	
83	弥生土器	底部	—	5.4	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂	
84	弥生土器	底部	—	5.5	—	にぶい赤褐色(5YR5/4)	細砂～礫	
85	弥生土器	底部	—	5.9	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	細砂～礫	
86	弥生土器	底部	—	9.2	—	浅黄橙色(10YR8/4)	精良	
87	弥生土器	甌	—	3.8	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂～礫	孔径1.1cm
88	弥生土器	甌	15.6	2.2	14.3	灰白色(7.5YR8/2)	細砂～礫	孔径0.6cm
89	弥生土器	壺	15.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
90	弥生土器	壺	15.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	精良	
91	弥生土器	壺	15	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	
92	弥生土器	壺	15.8	—	—	浅黄等色(7.5YR8/4)	細砂～礫	
93	弥生土器	壺	16	—	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂	
94	弥生土器	壺	11.3	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	礫	
95	弥生土器	壺	13.5	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂～礫	ヘラ記号
96	弥生土器	甌	15.3	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	口縁端部外面に凹線文
97	弥生土器	甌	15.8	—	—	橙色(7.5YR7/6)	礫	口縁端部外面に凹線文
98	弥生土器	壺	24	—	—	橙色(2.5YR6/8)	やや精良	格子状の櫛描文
99	弥生土器	体部	—	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	やや精良	
100	弥生土器	壺	15.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	2条の貼付刻目突帶
101	弥生土器	壺	16.5	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂～粗砂	口縁内側に斜格子文。端部外面に凹線文と直線文
102	弥生土器	甌	12.6	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	細砂～礫	
103	弥生土器	甌	14	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂～粗砂	
104	弥生土器	甌	13.3	—	—	黄灰色(2.5YR4/1)	精良	
105	弥生土器	甌	15.1	—	—	赤褐色(5YR4/6)	細砂～粗砂	
106	弥生土器	甌	12.8	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	礫	
107	弥生土器	甌	14.3	—	—	にぶい橙色(5YR6/3)	細砂	
108	弥生土器	甌	20.8	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	
109	弥生土器	甌	16	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂～粗砂	
110	弥生土器	甌	16.2	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂～粗砂	
111	弥生土器	甌	12.2	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	細砂～粗砂	
112	弥生土器	甌	15.9	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	礫	
113	弥生土器	甌	15	—	—	にぶい黄褐色(10YR5/3)	細砂	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
			口径	底径	器高			
114	弥生土器	甕	17.4	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂～粗砂	
115	弥生土器	甕	20	—	—	浅黄橙色(10YR7/3)	細砂	
116	弥生土器	甕	26	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂～粗砂	
117	弥生土器	甕	13.6	—	—	褐色(7.5YR4/6)	やや精良	外面にヘラミガキ
118	弥生土器	甕	14.2	—	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	細砂～礫	
119	弥生土器	鉢	29.3	—	—	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂	
120	弥生土器	鉢	10	3.2	4.4	にぶい橙色(5YR6/4)	細砂～粗砂	
121	弥生土器	高杯脚	—	7.5	—	にぶい褐色(7.5YR5/4)	細砂	透孔5
122	弥生土器	高杯脚	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/4)	細砂	
123	弥生土器	高杯脚	—	—	—	にぶい橙色(7.5YR6/4)	細砂	
124	弥生土器	高杯脚	—	—	—	にぶい橙色(2.5YR7/2)	細砂	
125	弥生土器	高杯	—	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	精良	
126	石器	石鎌						サヌカイト製 1.86g
127	石器							結晶片岩 77.8g
128	土師器	小皿	7.8	5.5	1.2	浅黄橙色(7.5YR8/4)	やや精良	
129	土師器	杯	13	7.8	2.8	橙色(5YR6/6)	細砂	
130	須恵器	鉢	—	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂～礫	東播系須恵器
131	須恵器	高台付杯	—	9	—	灰白色(2.5Y7/1)	精良	
132	土製品	土錐				暗灰色(N3/1)		孔径0.5～0.6cm 5.2g
133	弥生土器	甕	16.3	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	やや精良	
134	弥生土器	甕	25.8	—	—	にぶい黄橙色(10YR6/3)	細砂	
135	弥生土器	壺	15.6	—	—	にぶい橙色(5YR7/4)	細砂～粗砂	口縁内側に斜格子文。端部外面に凹線文4条と棒状浮文
136	弥生土器	壺	16.9	—	—	にぶい橙色(7.5YR7/4)	細砂	口縁内側に斜格子文
137	弥生土器	壺	22.7	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	口縁内側に斜格子文と小孔2個
138	弥生土器	高杯脚	—	18	—	灰褐色(7.5YR6/2)	精良	
139	弥生土器	甕	27.4	—	—	黃灰色(2.5Y6/1)	細砂	
140	弥生土器	甕	—	7.6	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	外面は密な縦ヘラミガキ
141	弥生土器	甕	15.2	—	—	明黄褐色(10YR7/6)	細砂	
142	弥生土器	甕	16.4	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
143	弥生土器	甕	—	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/2)	細砂～粗砂	
144	弥生土器	鉢	—	—	—	黃灰色(2.5Y4/1)	細砂～粗砂	
145	弥生土器	底部	—	6	—	赤褐色(5YR4/6)	細砂	底部に未貫通孔
146	弥生土器	底部	—	9.8	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂～礫	
147	弥生土器	底部	—	7.6	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	
148	石器	剥片						サヌカイト製 41.5g
149	石器	石鎌						サヌカイト製 24.8g
150	弥生土器	壺	14.6	—	—	にぶい黄橙色(10YR7/3)	細砂	口縁端部外面に凹線文2条
151	土製品	管状土錐				にぶい黄褐色(10YR5/4)	やや精良	孔径1.7～1.9cm。重さ64.5g

図 版



町内平野部空中写真

図版2 高松廃寺



1 調査地遠景



2 窯跡所在段地近景(北西から)



3 窯跡所在段地南側法面状況

図版3



1 SF-01 確認状況(西から)



2 SF-01 確認状況(南から)



3 SF-01 確認状況(北西から)

図版4



1 SF-01 法面断面図



2 SK-01 検出状況(南東から)



3 SK-01 検出状況(南から)

図版5



1 トレンチ 1 瓦出土状況(1)

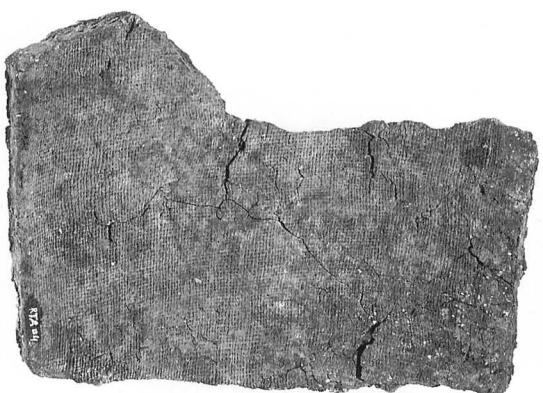


2 トレンチ 1 瓦出土状況(2)



3 トレンチ 1 瓦出土状況(3)

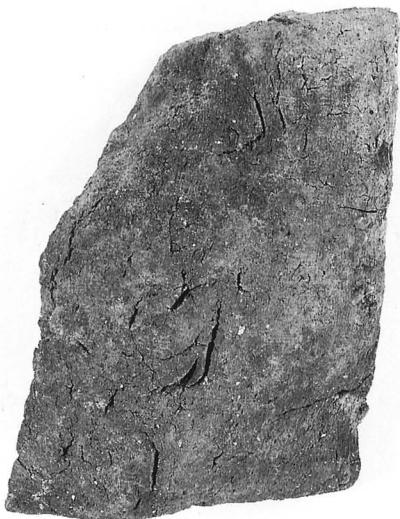
図版6



5



7



15

出土遺物 (1)





18



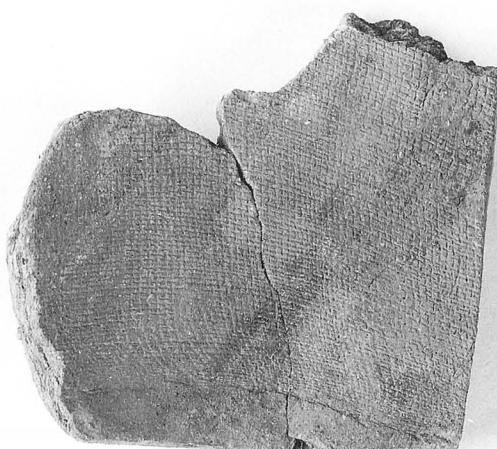
27

出土遺物 (2)

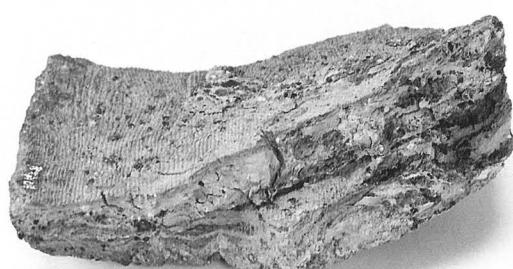
図版8



38



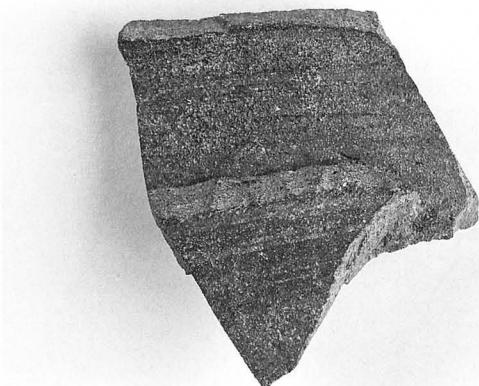
50



11

49

出土遺物 (3)



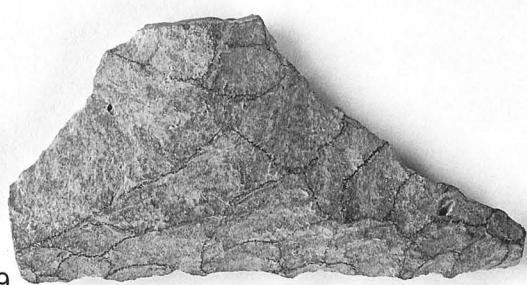
68



88



89

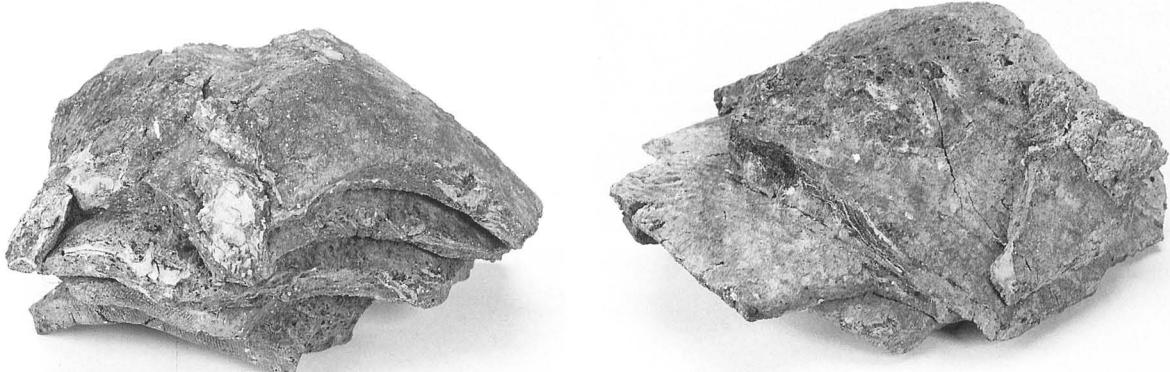
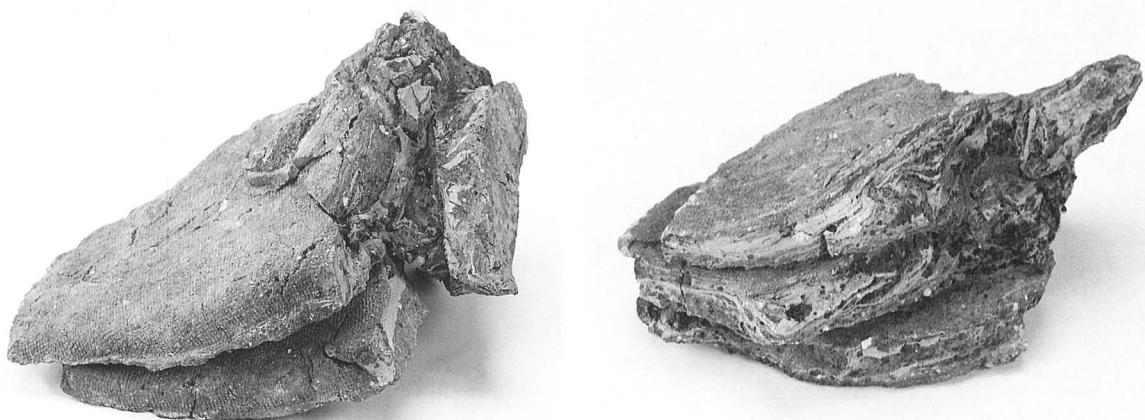


出土遺物 (4)

図版10



出土遺物（5）



出土遺物 (6)

図版12 成重遺跡



1

1 I区全景（東から） 左上



2

2 II区第1遺構面近景（西から） 左下

3 II区第2遺構面近景（東から） 右下



3

図版13



1 III区第1遺構面近景（東から） 左上

2 III区第2遺構面近景（西から） 左下

3 III区第2遺構面近景（東から） 右下



図版14



1 SX-01 調査状況（北から）



2 SX-01 検出状況（東から）



3 SX-02 調査状況（東から）



1 SX-02 検出状況（西から）



2 SX-03 検出状況（西から）



3 SX-03 西端検出状況

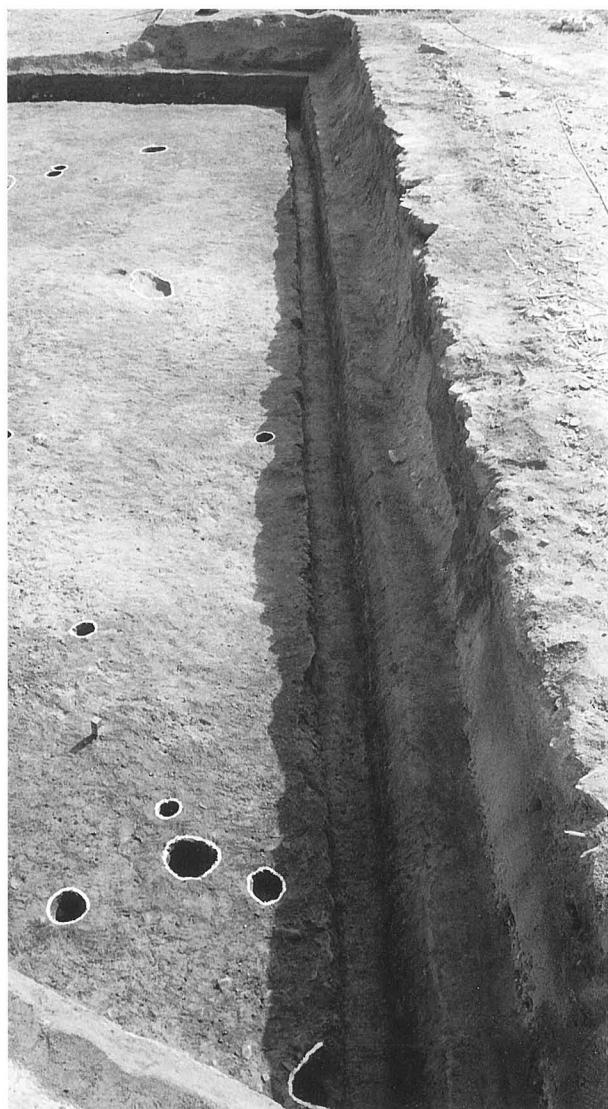
図版16



1 III区第2遺構面SK-05調査状況（南から）



2 IV区第1遺構面近景（西から）



3 IV区第2遺構面近景（西から）



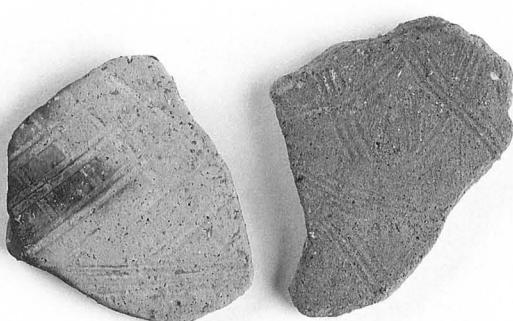
21



56



31



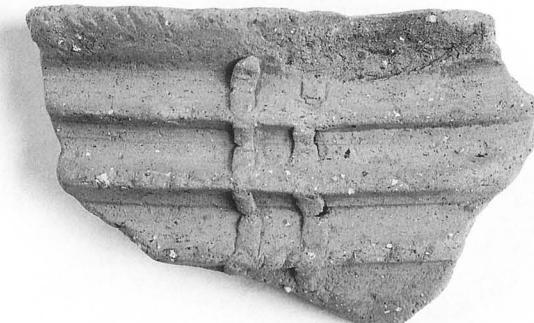
51

99

35



38



57



45



95

出土遺物（1）

図版18



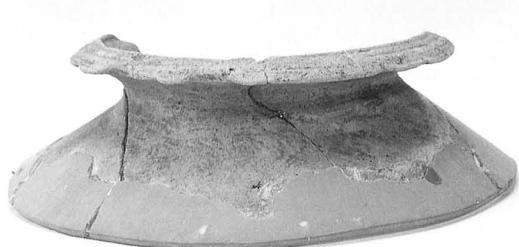
87



94



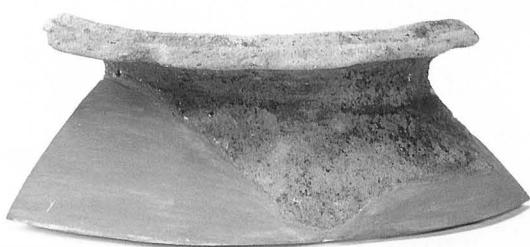
88



96



88



97



100

出土遺物 (2)



101



135



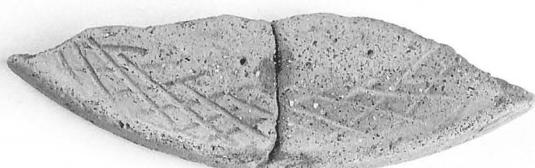
117



136



118



137



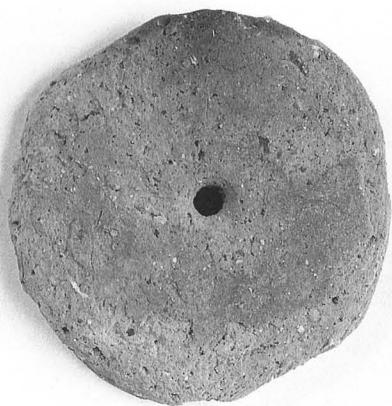
120



145

出土遺物（3）

図版20



58



132



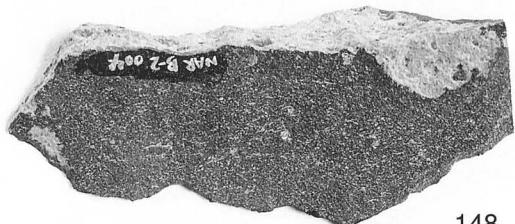
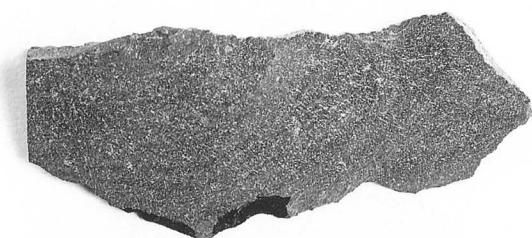
127



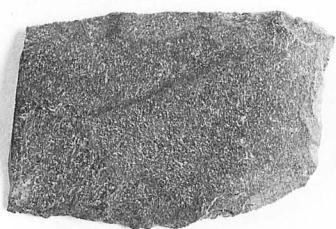
59



126



148



149

出土遺物 (4)



樋端墳丘墓周辺空中写真

図版22



1 調査地遠景（南東から）



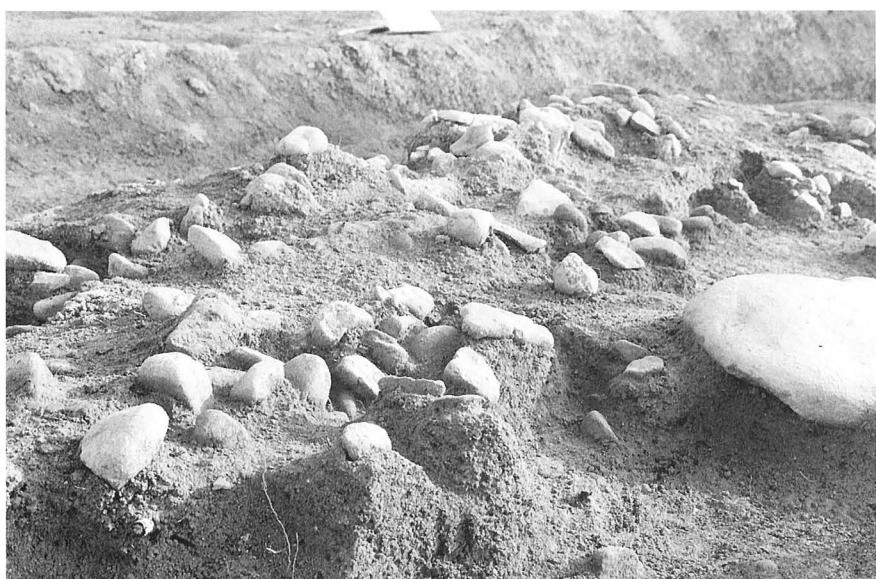
2 丘陵頂部調査前状況（1）



3 丘陵頂部調査前状況（2）



1 壇穴式石槨検出状況



2 磯堆検出状況（1）



3 磯堆検出状況（2）

図版24



1 磯堆掘下げ状況



2 磯堆土器出土状況



3 石槻内掘下げ状況（1）



1 石櫛内掘下げ状況（2）



2 石櫛内掘下げ状況（3）



3 西側土層断面状況

図版26



1 壓穴式石槨壁体検出状況(1)



2 壓穴式石槨壁体検出状況(2)



3 壓穴式石槨壁体検出状況(3)



1 壓穴式石槨床面検出状況(1)



2 壓穴式石槨床面検出状況(2)



3 壓穴式石槨基底石検出状況

図版28



1 基底石南東隅検出状況（1）



4 基底石北西隅検出状況（1）



2 基底石南東隅検出状況（2）



5 基底石北西隅検出状況（2）



3 基底石南東隅検出状況（3）



6 基底石北西隅検出状況（3）